
プレス・オブ・ファイア ドラゴンクォーター

社 九生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレス・オブ・ファイア ドラゴンクオーター

【Zコード】

N7732V

【作者名】

社 九生

【あらすじ】

はるか昔、世界に？大いなる災い？があつた。

空は焦げ、瘴気はあまねく地表に満ちた。

見上げるべき空を失った人々は、足の下に生きる術を見つけ出す。

大深度地下都市。シェルター。

覆われた、第一の世界で、幾世代もの刻が過ぎる。

人々はもう、空を忘れたのだろうか……？

下層地区のレンジャー、リュウは、任務で訪れたバイオ公社（生物化学工場）で、奇妙な体験をする。

闇ぞれた地底の世界の物語が、動き始める……。

あらすじはゲーム公式サイトより引用。

本作はPS2専用ゲームソフト「ブレス・オブ・ファイア? ドラゴンクオーター」のノベライズです。

私は二ーナ

夢を見ている。小さなブリキの箱の中。

そこには少女の、失われた日常があった。

家があつて、暖炉の温もりが橙色に輝いて、テーブルのうえには「じちそうがある。

この香ばしい匂いの湯気に包まれた肉は何の肉で、濃い黄色の、細やかな縁の葉が乗つたスープは何で出来ているのかは分からないが、政府から配給されるまずい米やパンの類でないことは明らかだつた。

お母さんの手作り。もふもふとした薄黄色のスリッパを履いて、赤と白のチェック柄のエプロンを身に着けて、キッチンに向かつて、ふと「ママ」と呼びかけると、こちらを振り返つて微笑んでくれる。そうやって作られた料理が、まずいわけがない。

食卓には母とともに、父の姿もある。楽しそうに笑つている。私もうれしい。家と、光と、母と、父と、そこには一切の悲しみがなかつた。

たつた一つだけあるとすれば、目の前の景色が全部、現実でないということを少女が自覚していることだつた。

このまま目覚めないで。パパとママも、ずっとそこにいて。しかし、夢は夢だつた。

暖炉の火が消える。「じちそうが石に変わる。天井の隙間から影が伸びてくる。途端に空気の質感が一セモノっぽくなつて、視界から色が、光が、急速に失われてゆく。ブリキの箱が壊れてゆく。やめて。行かないで。パパ、ママ。私を置いていかないで。」

虚空に伸ばしたか細い腕が、こつりと岩肌に触れた。

痛くはない。悲しい。

涙があふれ、頬を伝うのを感じながら、少女はぼんやりと天井を

仰いだ。

暗い。コールタールのような深い闇がよどんでいる。そこにはでたらめに隆起した岩のシルエットが絨毯のように敷き詰められ、空気はざらざらとして埃っぽい。

ああ、ここは現実だ。あるいは、？悪い方の？夢だ。家も、暖炉の温もりも、父と母の姿もなく、凍える風が吹き抜ける洞窟で、少女が一人、孤独に時を過ごす夢。

あれからもう一年が経つというのに、涙は一向に涸れてくれない。でも、大丈夫。悪い夢は今日で覚めるから。

少女は手の甲で涙を拭い、傍らに生えた頂点の丸い岩を支えに立ち上がった。遠巻きに人々のざわめきが聞こえる。炊き出しの時間だ。

おもむろに歩き出そうとして、すぐに足を止める。大切な友だちを踏みつけてしまいそうになつたからだ。

くまのぬいぐるみ。幼い頃、父にプレゼントされた。

名前はブキ。素材が貧弱なのか、ちょっと両手を握つてダンスの真似事をしただけで、両腕がブキ、お腹がブキッと音を立てて千切れるからだ。

おかげで継ぎ接ぎとボタンだらけになつた身体は、あちこちパツチワーケされてとてもカラフル。外見こそ変わつてはいるが、少女にとってはいつも傍にいてくれる大切な友だちだ。

少女はブキをぎゅっと抱きしめて、少し早足に洞窟を出て行つた。寸胴鍋で煮詰められるスープの匂いに食欲をそそられたのもあるが、少女には会いたい人物がいた。

広場は列を作る人でごつた返している。俺が先に並んだ、いや俺だ、と口論している男たちもいる。この最下層区ではさほど珍しくもない光景だ。

背の低い少女は、懸命につま先立ちをしたり、高いところに登つたりして、人混みのなかに青年の姿を探した。

彼がこの集落を訪れたのはおよそ一週間前。いまと同じ炊き出し

の時間に、少女が広場の隅でぼそぼそとパンを口にしていると、気さくに声をかけてきた。

薄いピンク色の頭髪、額にかけたゴーグル、白いラインの入った皮製のジャケットに、それと同じ柄のスキニー・パンツ。腰には短めの両刃剣を携えていた。

身なりからして最下層区の人間でないことは明らかで、少女はブキを抱いて警戒心を募らせたが、青年はチョコレートをくれた。欠片一つじゃなく、一枚丸ごとだ。

それでも見慣れぬ人間への警戒を緩めるつもりはなかつたが、チョコレートは甘かつた。

涙が出るほどに。こんな甘いお菓子を口にしたのは何年振りだろう。前に食べたときは、お母さんが一緒だった。

思い出が涙となつてブキの額にこぼれ落ちる。

青年は少女の傍に腰を下ろし、たわやきかけるように話し始めた。「僕はここから一つ上の階層で、レンジャーという仕事をしている。凶暴なディクから街を守り、犯罪者を取り締まる。自分で言つのもなんだけど、正義の味方なんだ」

顔を見せて、「らん」と指で優しく顎を起こされ、にっこりと笑う青年の顔が視界いっぱいに広がつた。とても印象的な、心に火を灯してくれるような笑顔だつた。

「困つたときは、正義の味方に相談してくれ」

それからというもの、青年は度々顔を見せるようになつた。飴やチョコレート、そしてたくさんの土産話を持つて。

青年の話はユーモアに満ち、その耳にすつと入り込んでくる柔い声質で語られる話はどれも、一日の大半を狭いほら穴で過ごす少女にとつては夢にあふれた冒険譚だつた。

少女は引っ込み思案な性格だつたが、やがて青年が集落にやつてくるのを心待ちにするようになり、自らの過去についてもしづしづ打ち明けるようになつた。

言葉も、舌も足りなくて、ときに感極まつて思つよい話が出来

ないけれど、青年はずつと黙つてうなづいてくれる。

ブキも聞き手としては優秀であるものの、青年のよつと背中をなでてくれたり、温もりのある言葉をかけたりはしてくれない。少女は青年を心から信頼し、そして尊敬していた。

やあ、と手を振つて、青年は人好きのする笑みを浮かべた。少女は胸の内がきゅんと高鳴るのを感じながら、足を早めてゆく。行き交う人にぶつかりそうになる。小さな足を踏みつけられそうになる。それはいけない。この靴は青年からもらった物だ。少女がずっと裸足で過ごしているのを見かねて、下層区の街で女の子用のスニーカーを買ってきてくれたらしい。白とピンクのツートン・カラーでやや派手だが、少女の宝物だ。

「じゃあ、行こうか」

おもむろに歩き出した青年の背中を、少女はぱたぱたと跳ねるようについていった。

今日という日をどんなにか待ち望んだことだひつ。

パパとママに会える。

青年が約束してくれたのだ。

君をまた、パパとママと一緒に暮らせるよつにしてあげる、とい。いくら堪えようとしても頬がほころぶ。足元が軽快に弹ける。パパとママに、会えるんだ。

青年と交流を深めていくなかで、少女はこの世のあらゆる理を知つていった。

齡十にもなれば、誰もが常識として頭に留めていることのほとんどを少女は知らない。家の外にもほとんど出たことがなかった。

「外は空気が汚いし、怖い人たちがたくさんいるから」

それが母親の口癖だった。

だから少女は、絵本や、テレビで放映しているアニメ番組、そして窓越しに見える範囲でしか世界を知らなかつた。

青年はかすかに驚きつつも、少女が疑問にぶつかる度、そつと手

を差し伸べるかのように教えてくれた。

千年もの古に地上で起きた？大いなる災い？。それによつて空は焦げ、瘴気があまねく地表に満ち、人々は足元に生き場を求めた。大深度地下都市。それが少女と青年が生まれた地底の世界だ。そしてこの社会には、？D値？といふヒエラルキーがある。いつからともなく人々に課せられた絶対のルールだ。

たとえば青年のD値は1／2048。出生と同時に計測され、割り出された数値がパーソナル・ナンバーとして名前の後ろに附加される。少女は両親から世界の成り立ちを教えてはいたが、D値については一切教えられなかつた。

それに漠然とテレビのニュースを見ていても、不意にチャンネルを回されることがあつたり、新聞や特定の本を読ませてくれなかつたりと、両親には不可解な行動が目立つた。

「両親は、君にD値について知られたくなかつたのだろう」と青年は言つた。

分数様式で示されるこのD値は、分母の数が分子の？1？に近いほど潜在能力が高く、優秀な人材であるとされる。そして人々はD値によつて職業や居住区が決定されるのだ。

D値が高ければ衛生環境の良い上層区への居住が許され、政府の要職に就けるなどエリートとして扱われるが、D値の低い者は空気汚染が深刻な下層区にしか住めず、出世も望めない。一生？ローディ？呼ばわりされて差別や偏見の対象になる。少女が暮らす集落にいるのはみなローディで、実質社会から切り捨てられた層の人間たちだ。

「D値による区分は絶対だ。それがたとえ親子であつても、D値に大きな差があれば別々に暮らさなくちゃいけなくなる。君の両親は上層区の人間なんだろう？」

そこに、D値の低い君が八歳になるまで暮らしていいたのは、君の両親が

最後まで言い切らぬまま、青年はぶつりと口をつぐんだ。

それでも少女には分かつた。父と母は自分を匿つてくれていたのだ。小さなブリキの箱のような家に。胸いっぱいの愛情と温もりのなかに。

それを想つと、また涙が出た。同時に、D値の低い自分を恨めばいいのか、世界を恨めばいいのか、予先の定まらない憎悪が胸を渦巻いた。

青年はしばらく黙つて背中をさすつてくれていたが、やがてこう言つた。D値は生涯変わることのない数値だが、ある手術がそれを可能にする、と。

「上層区に住むに相応しいD値を手に入れて、パパとママと、堂々と暮らすんだ」

ぽん、と肩を叩かれるごと、少女の鬱蒼とした心に光が差し、希望が騒いだ。

手術の費用は全額、自分が出すと青年は胸を張つた。

どうしてこんなに優しくしてくれるのだろう。

自分の知るどんな言葉を持つても感謝しきれない。彼は本当に正義の味方だ。ヒーローだ。

集落を出て十分も歩くと、リフトポートに着いた。

人口増加とともに都市全体が拡大しているため、階層や区画の移動にはもっぱら高速移動車両^{リフト}が用いられる。

この場所に来るのは、顔を重厚なマスクで覆つた人間たちに連れてこられた、あの日以来だ。

薄暗いホームの隅にわだかまる闇、底冷えした静寂、電灯が放つ鈍い青色の光、そこにたかる羽虫たちが作る不気味な音像。

この空間には何か得体の知れない呪いがかけられている。当時はそんなふうに身体が拒絶反応を起こしたが、いまホームへと階段を下りる少女の足取りは軽かつた。

片側の線路に全面黄色で統一されたリフトが停車している。その前には白衣を着た男が立つていた。

青年の言つていた「お医者さん」だろう。フレームの細い眼鏡をかけ、金色の髪は上品に整えられている。いかにも学者然とした風情だった。

「や、これが、あなたの言つていた……」

男は挨拶一つすることもなく、一人を前にするとこきなり言つ出した。

眼鏡のテンプルを一、二回、くいつと上げて、少女を見つめる。あたかも品定めするかのような目つきだ。

男の眉尻一つ動かない、どこか機械じみた表情に、少女は急に心細くなつて、青年の腕に手を伸ばした。

「ええ……？ 素材？ です」

ぴたり、と青年の袖口を掴もつとしていた手が止まる。いまのは誰の声だろう？

紛れもない。青年の声だ。声質の変化に思わず耳を疑つた。

おそるおそる青年の顔を見上げてみると、そこにほいつもの優しさがなかつた。目は鋭く、ある種の残酷さとともにしぐれを冷氣を帶びてゐる。

「や、ござくろひさまです」

？ 値踏み？ が終わつたのか、男は少女から視線を外すと、ポケットからおもむろに財布を取り出した。

「これは、まあ、前金ということです」

青年は何枚かの紙幣を受け取ると、掌のなかでくしゃっと丸め、用は済んだとばかり踵を返した。

少女は慌てて青年を呼び止めたが、冷たい言葉が返つてくるだけだつた。

「あばよ、お嬢ちゃん」

そして遠のいていく青年の背中。去り際に見えた横顔も、言葉遣いも、何から何まで別人だつた。

どういひこと？ あなたは正義の味方じや、ヒーローじやなかつたの？

ぱとり、とその小さな胸からブキがこぼれ落ち、足元を転がった。
「さあ、行きましょうね。どこへ？ や、君は、彼に教えてもらわなかつたのかね？」

パパとママに会わせてくれると言つた。手術をして、D値を高くして、みんなに認めてもらえる家族になるんだつて。

「お父さんとお母さんにですか……それは、まあ、安心してください。手術が無事に済んだら、また一緒に暮らせるようになります」取つてつけたような男の口ぶり。誠実さや心に訴えかける感情のきらめきは微塵も感じられない。

でも、このまま元の場所に戻つたところで、何があるのだろう。ローディたちの不潔なざわめきと、明日の見えないどん詰まりの闇が待つてゐるだけだ。

少女は横様に倒れていたブキを拾い上げると、手招きをする男の元へと、枷を引きずるよつた重い足取りで向かつた。リフトに乗り込んだ。後戻りはもう出来ない。

一本のレールにうなるような軋みをあげて、リフトは発進した。少女はふつとまぶたを閉じてみる。狭い岩窟をひた走るリフトの、身体と心を蹂躪するような振動。大氣のうねり。胸を占める喪失感とも、絶望感ともつかぬ巨大な虚しさ。

それがみな、三秒数える間にどこかへ行つて、少女を、あの暖炉の温もりに約束された、父と母のいる永遠の安穏へと帰しててくれる。ほら、一、二の、三で、まぶたを開けてみよ。

そこには、きっと

「や、ところで、君の名前はなんと申つのです？」

悪夢は覚めてくれなかつた。男の無機質な声が、少女の期待を静かに打ち碎いた。

少女はほとんど息絶えたかのような面差しになつて、じばりく。そのくちびるがひつそりと動いた。

「私は……一、二、三」

(?) ルーチン・ライフ・前篇・

ぼんやりと 空調用のプロペラの羽が、ぐるぐると低速回転しているのが分かる。

耳を包むのはテレビの音声だろうか。空気汚染の深刻化がどうの中層区の水没領域がどうの。

何か夢を見たような気がするけれど、一片の映像さえ覚えてない。ただ、見たかもなあ、といつ憶測めいた余韻だけが頭に残っている。

少年は上体を起こして、眠気の膜を剥がすかのようじりじりとまぶたをこすった。寝覚めはあまりよくない。この辺りテイク狩りが続き、ろくに休暇を取れていなことが原因だろう。

今日も任務だ 少年は短い梯子を使って一段ベッドから降りる。ベッドの下段に同居人の姿はない。近くの壁に埋め込まれた薄型の液晶テレビがつけっぱなしになっている。部屋の明かりも、フットライトも。

少年はまだ本調子でない目をめぐらして同居人を探しつつ、バスルームへと向かった。洗面所の照明もまたつけっぱなし。

少年のこたさかやつれた、不健康そうな顔がのつそりと鏡に浮かんだ。洗面鏡の両脇に備え付けられた棒状の照明具。その淡い橙色に照らされると、少年の肩先まで伸びた髪がつやめき、何か特別な魅力を宿しているかに見える。

本当は忙しさにかこつけて伸ばし放題にしているだけの、何の変哲もない黒色の髪なのに。少年は手ぐいで髪を梳^とき、肩先にかかる部分を赤い紐でまとめあげると、頭のてっぺんできゅつと結わいた。すると背筋に血が通つて、気持ち眠気が晴れた気になる。このあとはじくありきたりな朝の手続きだ。毛並みの悪い歯ブラシで口を洗い、顔面に水をかぶる。

フックにかけられた白いタオルを手に取ろうとする、隣には同

居人のタオルがあり、わずかに水氣を帯びている。つい数分前に彼もここで身支度を済ませたのだろう。

少年は最後に荒れた肌の具合を確かめ、ささつと前髪を整えると、洗面所を後にした。もちろん、明かりを消して。

再び部屋へと戻ってきた少年を、誰にともなく語られるテレビの音声が出迎える。相変わらず同居人の姿はなかつた。

一足先にロツカールームで用意を進めているのかもしれない。起こしていってくればたらよかつたのに。

少年は今さらのように頭のなかで独りごちながら、テレビを消した。手前には四角いテーブルと一人分のスツールがあり、その一つにフレームの赤いゴーグルが置かれている。

昨晩、ロツカーにしまい忘れてここまで持ってきてしまったのだ。最近は度々こういうことがある。疲れが頭に蓄積しているのか、どうにも手足の感覚や意識が冴えない。

骨組み丸出しのベッドでは熟睡出来ないからだろう、空間を造る壁や照明の色に癒しの力がないからだろう。しかし、寝て、起きて、仕事をこなす。たつたそれだけのことを繰り返すレンジャーに、特別な部屋が必要ないのも事実だった。

少年は短いステップをのぼりながら、額にゴーグルをかけ、自動で開かれたドアの向こうへと踏み出してゆく。

さあ、退屈な一日の始まりだ。

ロツカールームへは、自室から宿舎の廊下を歩いて二十秒とかからない。同居人の姿はやはりそこにあつた。

部屋は通路のように細長く、壁の両脇に所狭しと板金製のロツカーペンが並び、パイプやフェンスが張り巡らされた天井には大きなプロペラ。

それが薄暗い室内に充満する埃っぽい空気をゆるゆると攪拌し、どことなく息苦しさを覚える。少年はゴムでコーティングされた床に散らばる紙くずを踏んづけていきながら、同居人に話しかけた。

「テレビ、つけっぱなしになつてたよ……」

同居人はニーツのインナーを着込んでいた最中だった。

やがて襟からするりと頭が飛び出る。上品に切り揃えられた金色の頭髪が、静電気でくしゃくしゃにはねた。

「また一段階、空気汚染がひどくなつたんだってな」

彼は特に悪びれる様子もなく、淡々と会話を続ける。

その細くも筋肉質な腕が、ロッカーから緑色のジャケットを取り出した。

「政府はどうするつもりなんだろう。野生ディイクの数も増えるばかりだし」

「さあな。特にこれといった政策は示されてない。いずれにしても中層区から下の話だから、最悪、連中は見捨てるのかもしれないな」ジャケットに袖を通しつつ、彼は空いた手でロッカーの戸を閉めた。

「ゆがんでるぜ、この世界は」

バタン、と音を立て、今度は少年がロッカーを開けた。

「で、今日の任務は何？ またディイク狩り？」

「いや、リフトの護衛だとぞ」

彼はジャケットの裾をピンと張り、身体のあちこちを触つて装備漏れがないかを確かめていた。

「護衛？」

「ああ。積荷を乗せたリフトを端から端まで送るだけ……」

言葉半ばに、彼は振り返った。「ローディの能無しでも出来る仕事を、リュウ」

その目はいつものように相手を見下すかのような冷気をはらんでいた。ジャケットの襟が耳たぶを覆うまでにびしっと立てられ、彼の高慢な雰囲気をより一層と引き立てている。

ボツシユ＝1／64。エリートである彼にとって、この程度の任務は暇つぶしにもならないのだろう。

「先に外で待つてるぜ、相棒」

去り際に片手を挙げ、彼はロッカールームを出て行つた。
その腰にぶら下げていたのはレイピア。彼のスマートで、攻撃的な精神がそのまま形となつたかのような剣。

一方、リュウが取り出したのは、ごく一般的な細身の両刃剣。ついで紺の地に赤のラインが入つたジャケットをまとつ。こちらもボツシユの派手な色合いのそれと比べればはるかに地味だ。

さすが、革の手袋をはめながら、リュウは思つ。これまでにも疑問に感じていたことだつた。

どうしておれは、ボツシユとコンビを組んでいるのだろう？ 相棒、と呼ばれているのだろう？

あいつは言つた。ローティだ。能無しだと。おれのことを言つているのか？ リュウ＝1／8192、おれのことを。

きつといつもの軽口だ。ボツシユは度々、ああやつて乱暴な台詞を吐く。しかし、その無邪氣な口ぶりに心がかすり傷を負つことをある。

リュウはロッカーの口を開めると同時に、あえて思考を停止させた。

ボツシユ＝1／64にとつて、サークル・レンジャーといつ仕事は、栄光に満ちたキャリアの第一歩に過ぎない。深度九ハ〇メートルに広がるこの場所から、頂点へと這い上がるスタート地点に過ぎない。だが、リュウにとつては永遠の仕事であり、永遠の居場所でもある。彼の前に道は用意されていない。昨日までにしてきた退屈な任務を、代わり映えのしない日々を、これから先もずっと続けてゆく。そうやってルーチンに沈んでゆくだけの運命をありありと示している。1／8192という値が。

よれう、未来について考えるのはよれう。何の意味もないのだから。

リュウはいかか逃げるよつとして、足早に部屋を、いざれまた帰つてこなくてはならない部屋を、出て行つた。

ブリーフィングにはまだ時間がある。そう言って、ボッシュは街の食堂で腹ごしらえをしておこつと提案してきた。

すると呼応したかのようにリュウの腹が鳴る。彼は下層区定番の？ハオチー肉入りスープ？のどろりとした湯の質感と、付け合せに出るぱさぱさとしたパンの食感を思い浮かべながら、ボッシュの後を追つた。

一人のいる廊下はレンジャー基地の一階に相当する部分で、片側は窓のない吹き抜けとなつていて。急峻な崖の岩肌が迫り、時おり深い暗闇の向こうから風が入り込んでくる。

階下は街とリフトポートの進入路を隔てるジャンクション（中継地点）。整地や壁の加工がされていない天然のトンネルだ。藍色で統一されたダウンライトや電球が壁面に取り付け、ないしチェーンで吊り下げられ、闇の奥地で灯火のように底光りする外観はいつそ神秘的でさえある。

そのなかでリュウたちと同業であるらしい身なりの者が連れ立つてリフトポートへと向かつたり、外灯の下で一組の母子が人を待つているかのように立つていて、重厚なマスクで顔を覆つた者が壁際に設けられたテレコーダー（公衆電話）を使って誰かと会話したりしている。扉が開かれると、リュウたちも彼らと同じ空気を吸つた。ジャンクションへは一階から直接階段で下りられるようになつてているのだ。

かん、かん、と鉄条網で出来たステップに音を立てながら、ふと、リュウは誰かに呼びかけられたかのように天井を仰いだ。

深い。巨大な断崖が、急峻な闇が、果てしなく広がつていて。そのうちに奥からふつと手が出てきて、自分の魂をさらつっていくのではないかと錯覚してしまつほど、得体の知れない世界が崖の狭間でゆらいでいる。

「何ボケつとしてんだよ、リュウ」

「いや……何でも、ない」

リュウの心に脈絡もなく芽生えた感情。

空。かつて人は、その広大な青さとともに生きていたといつ。今
の時代からは想像もつかない。本当にあつたのかどうかも定かでは
ない伝説。

二人の向かう下層区街の天井は、全面が色とりどりの絵の具で塗
られている。空を？模した？のだ。更に人の手によつて？太陽？が
造られると、元は地底の大空洞であつた場所に一日のサイクルが生
まれた。

人工太陽の消灯時間が夜。それに光が灯るのが朝。夜に至るまで
の時間が昼。どれもかつて人が地上で暮らしていいたときに使われて
いた言葉なのだといつ。他にも？ユウガタ？という表現があるよう
だが、こちらは使われていない。

ただ、下層区街に描かれた空は、ユウガタの表情に近いと、リュ
ウはどこかで耳にしたことがある。そうか。空は刻々と変化して、
一定の形を持たないものだつたのか。

分からぬ。すべては現代に遺された史料から発する憶測に過ぎ
ない。だから、リュウはこの目で確かめてみたいと思つ。
いつか、本物の空を 。

しかし、結局のところ、空などという存在はお伽話。ありもしない空想だと、一般的には認識されている。

「空が見たい」などと言おうものなら子供呼ばわりされて恥をかく。相手がボツシユのよつた現実主義者ならなおさらだ。

リュウはふつと芽生えた感情を心の奥底にしまい込む。こうやって人々は、空に対して強い憧れ、好奇心を持っていながらも、リュウのように忘れよう、忘れようとしていくのだ。

街の食堂は多くの人で賑わっていた。カウンターに並ぶ列が店の外にまではみ出している。客のほとんどはレンジジャーや地底掘削要員といった公的労働者で、家族連れなど庶民の姿は見受けられない。逼迫した食糧問題を抱えている下層区において、彼らのように国の事業や公安に携わる人間には優先して食料が回されるようになっている。

いまの時間帯はちょうど朝。この店は街にいくつかある大衆食堂の一つで、公的労働者専用というわけではないのだが、この時間帯は決まって彼らに独占されてしまうのだ。

サークル、というレンジジャー内では最も階級の低いリュウもいちおうは官憲であり、これまでにも食事に困ったことはない。

だが、人口増加に対する都市拡大や、それに伴う居住区の治安維持のために、公的労働者の求人率は年々高まって来ている。今や五体満足で経歷に問題がなければほぼ採用といった状態だ。

すると今度は公的労働者内で早い者勝ちの食物競争が起こるわけだが、それでもリュウが食事に困らないのは、ひとえに、ボツシユ。彼の1/64というD値が傍らにあるおかげだ。

ボツシユは長蛇を成す列などまるで眼中にないといった風情で、ずかずかと店に入つて行った。どうにも後ろめたくて、リュウはず

つと顔を伏せたままだ。

当然のように誰かが罵声を飛したが、ボツシユの顔を見た途端にその口が引っ込んだ。代わりに舌打ちや陰気なひそめき合いか店内を包む。

「セツト一人分。俺のにはスープはいらないから、代わりにブレッドを一つ増やしてくれ」

カウンターで接客を務める少女は、見るからに不服そうな顔つきだった。

「あんさんは、まあ、千歩ゆずつてしゃーないとして、そっちの力ははどうなん？　D値高いんか？」

つと向けられた彼女の青い瞳から、リュウはさっと視線をそらした。

彼女の名前はクリオ。てっふんに赤いぽんぽんを乗せた帽子をかぶり、その独特な風貌と口調で客を出迎える店の看板娘だ。

「このボツシユ＝1／64の相方を務めるやつのD値が悲惨なワケないだろ。ほら、俺たちにはあまり時間がないんだ」

クリオはいぶかるような目つきで一人をにらみながら、後ろの厨房に指示を出した。

やがてクリオが運んできたプレートには、どちらも同じように灰色のぎつたりとしたスープとパンがついている。

注文通りでないことにボツシユが文句を言つと、「うつさいの！　顔面にスープぶちまけたるぞ！」という怒声が返ってきた。

やれやれ、といった調子でボツシユはチップと交換にプレートを受け取り、二人はテラスの席についた。店内はもう満席だったのだ。路面の赤土が風に巻き上げられるためにあまり良い席とは言えない。テーブルもスチール製で安っぽく、ボツシユは「これだから下層区は」とでも言いたげな顔をしていた。

「リュウ。このスープやるから、ブレッドくれよ」

言いながら、ボツシユはリュウのプレートからブレッドを取り、ついでハオチー肉入りスープの入ったお椀を置いてきた。

ハオチーとは地底全域に生息する芋虫型の「ティク」で、その硬くて埃っぽい味のする肉は？庶民の味？として下層区では広く親しまれているのだが、ヒリートの口には合わないようだった。

「それにも」

「なに？」

ボツシユはブレッドをちぎり、欠片を一つずつ口に運んでゆく。その気になれば丸ごと一口で食べられる大きさなのに、リュウはこういった所作にボツシユの育ちのよさを感じる。

彼は上層区の出身なのだ。

「さつきの女。あの喋り方、下層区訛りってやつか？」

「いや……普通の人は、あんな喋り方しないよ」

「ふーん」鼻先で答えながら、ボツシユの目が何気なく街に向かう。彼は上層区の出身なのだ。

仕事に出向く労働者たちの往来、レンジャー「」をしている子供たち、そして彼らの頭上に広がる、空。

中天はホワイトとエクリュ・ベージュの中間色で描かれ、地平線に向かう連れてオレンジとエメラルドが混じる。

それらの色彩が人工太陽の光を受けてまばゆく輝き、白みかがつたオレンジの明るさが街を満たしている。先ほどジャンクションから街へ入ったときに目が眩んだのはそのためだ。

生まれも育ちも下層区であるリュウにとつては「」く見慣れた景色だが、ボツシユは違う。三ヶ月前に初めてこの街を見た彼は、一言、「汚ねーな」と言った。

確かに、本物の空がこの天井に描かれたもの通りであつたら失望する。生きている感じがしないのだ。このスチール製のテーブルのように安っぽくて、拙い抽象画のようにさえ見えてしまう。

「そろそろ時間だ。あんまり待たせると、隊長、怖いからな」

ボツシユはプレートを持つて立ち上がり、リュウは一杯目のスープを口に流し込んだ。

「お前、よくそんなもんをゴクゴク飲めるな……。見た目といい匂

いといい、ほとんどゲロだぜ」

ボツシユはうえつと口を尖らせた。リュウの腹のなかで「ゲロ？」と言われた汗がどろどろとゆれている。当分はもう何もいらないだろつ。

プレートをカウンターに返して店を出て行こうとした折、ふと、一台の小型レッカー車が通りがかった。

人々が左右に道を開ける。その間を低速で進む車の前後には、マスクと警棒を装備した警備兵がついている。

バイオ公社か、とボツシユがちらりと呟いた。レッカー車は大きな真四角の鉄檻を乗せた台車を牽引しており、檻のなかでは一体のディクがおとなしく座っている。

その獣らしい底光りする目を遠巻きに眺めながら、二人は歩き出して行つた。レンジャー基地へと戻る道中、一人の話題はもっぱらバイオ公社が中心となつた。

生物化学工場として「デザインド・クリーチャー」、略して「ディク」を研究、開発する機関。それが一般に知れ渡つているバイオ公社の企業内容だ。

乗り物用から食用に至るまで多種多様な「ディク」を生み出し、人々の生活を豊かにする一方、一部の「ディク」は野生化し、人々に危害を与えることもある。

そんなモンスターから街を守るために政府公認のもと組織されたのがレンジャーだが、よくよく考えてみればおかしな話だ。

先ほどのように新規開発した実験体を連れて街を横断するのも珍しくない。噂によれば下層区の少年少女をさらつて非人道的な研究の対象にするとも聞く。

そんな「國家事業？」の名にかこつけて図々しく、企業実態について様々な憶測が飛び交う彼らこそが、今回の任務のクライアント（依頼主）だ。

「任務の辞令はいつ受けたの？」

「昨日の夜。お前が仕事から帰るなりベッドに倒れこんだあとだ」

「リフトって言つてたけど……積荷の中身は？」

「聞かされてない。ま、たかが護衛の俺たちが知る必要もないけどな」

リュウの足がぴたりと止まる。そこは街の出入り口付近、階段を上ったところにある広場で、片側は見晴台になつていた。

バイオ公社の高層ビルが、スマッグや粉塵で濁つた景色の向こうに高々とそびえている。あのなかで今日も、ボツシユが気味悪がるようなスライムめいた何かが生産されているのだろうか。

ボツシユは颯爽とレンジャー基地のオフィスへと入つて行つた。事務机に向かつて報告書をまとめていた女がつと顔を上げる。『太話をしていたと思しき男の二人組みがぴたつと話を止める。

「エリートのお通りだ」とでも言つようにな、ボツシユは肩を鳴らしながら青いタイル張りの床を突き進む。この真ん中にすうつと赤いガラスの入つたドアの向こうが隊長室だ。

「ボツシユ＝1／64、リュウ＝1／8192。以上二名、参りました！」

ボツシユの力強い声が整然とした室内に響き渡る。

「よろしい……」下層区レンジャー基地の監督官、ゼノ＝1／128が静かに呼応した。

ブラインド越しに差し込む人工太陽の明かりを背に受ける彼女は、その燃えるような赤とは裏腹に、淡々とした声で語り始めた。

「すでに聞いているとは思いますが、今回の任務について、確認しておきます」

資料を眺めながら話す彼女の手が、さつと眼鏡のテンプルに触れる。彼女の？クセ？だ。

「警護任務、レベルE……。バイオ公社の下層実験棟より発進する輸送リフトに同乗し、貨物を警備する……。

知つていると思いますが、バイオ公社では機密性の高いものを扱っています。積荷の中身について、細かい報告はありません」

彼女はキッと素早く顔を上げた。無駄を嫌う軍人らしい動き、口調、峻厳な眼差し。

しかしそれはあくまで職業的な態度であり、彼女がもっと心優しい人物であることをリュウは知っている。

「何か質問は？」

「特にありません。ですが……」

ボッシュの声が一瞬、上司に対する口調とは思えない怪しげな響きを帯びた。

「任務の前に、少しお話が」

「いいでしょ。リュウ、先に出なさい」

事態が把握できずに呆然としていた彼は、慌てて敬礼し、部屋を後にした。

扉が閉まり、リュウの気配が遠ざかったのを確認すると、ボッシュはだらりと肩の力を抜いた。

ついで歩き出し、隊長の執務机のうえにどさつと腰を下ろす。いつも暴挙とも言える部下の行いを咎める素振りもなく、ゼノはむしろ怯えているようであった。

「隊長、分かつてると思つけど……」

両足を組み、退屈そうにつま先をゆらしながら、ボッシュは脅迫めいた声音で喋り始めた。

「俺のD値は1／64。この値はセカンドやファーストはもちろん、^{メンバ}統治者？にすら、手が届く資格なんだ……。

だから、俺に足りないのは手柄なんだよ。こんなチンケな任務じゃなく……もつと、ハデな手柄がいるんだよ」

ぱた、という音を立てて、ボッシュは床に降りた。

「今回の任務は、機密レベルの高いものです。無事に終われば、上層部にはそれなりの報告を……」

不意に言葉が途切れる。ボッシュの手がすつと、忍び寄る影のように肩へと下りてきたのだ。

「分かつてればいいんだ……」

ゼノは彼が部屋から出て行くのを背中に知りながら、血の不甲斐なさに拳を握り締めていた。

ボッショウ 1 / 64。地下世界を統べる統治者メンバの一人にして、？

剣聖？ ヴェクサシオンの一人息子。

隊長として何たるザマだ。たかだか十六の少年に、足がすくむほどの恐怖を覚えるとは。

しかし、ゼノは決して彼自身が怖いのではなかつた。彼の背後にちらつく、偉大なる剣士の影に怯えていた。

「ボッショウ……」

隊長室から出でてきた彼に、リュウは「何を話してたんだ？」と訊ねた。

ボッショウは白々しくかぶりを振り、その口元は相手を小ばかにするような笑みをたたえていた。

「別に。任務のことわ」

不信感、というほどではないが、リュウはボッショウの横顔に平穏なうざる思惑を感じことがある。

三ヶ月前にここへやってきて、自分が彼と同年齢だつたためか、隊長命令でコンビを組むことになつた。

彼は自らの過去について多くを語らない。が、その翠緑色すいりょくの双眸は、燃え爆ぜるような野心を奥底に秘めている。

それに不安を感じる一方で、リュウはうらやましくも思う。ボッショウには未来を掴み取る資格がある。だからあれこれと、心のなかで野望をめぐらせることが出来るのだ。だけど、おれは。

「さて。さつと任務を終わらせようぜ、相棒」

言って、早足に歩き出す彼の、エリートの背中を、リュウは追いかけていくことしか出来ないのだった。

リュウとボッシュユは下層区のリフトポートへとやつてきていた。任務開始地点であるバイオ公社下層区実験棟へは、リフトを経由して行かなければならないからだ。

閑散としたホーム。片側にはリフトが停車しているが、そちらは目的地とは反対方向の路線。

とつぐにバイオ公社行きのリフトが来ていても良い時刻なのにせつかちなボッシュユは、ホームに一人佇む係員に訊ねた。

「一、三言やりとりしたのち、ボッシュユは呆れたようなため息を吐きながら引き返してきた。あの重厚なマスクで顔を覆つた係員は、彼になんと答えたのだろう。

「ボッシュユ、どうかした？」

「お決まりの、リフトの故障……」

ボッシュユは愚痴つぽく言いながら、薄暗いトンネルの先を指差した。

「このボッシュユ＝1／64に、線路の上を歩けとさ」

「しようがないね、とリュウは小さくなづいた。

野生化したディクが我が物顔でうろつき、ライフラインや施設の老朽化が甚だしい下層区では、あれが壊れた、これが無いといったのは日常茶飯事なのだ。

係員曰く、目的地へはこのままリフト道を歩き、途中にある整備用のエレベータを乗り継いで行けば良いということらしい。

しかし、係員はひどく無愛想で、具体的にどこの何のエレベータに乗れば良く、また道中は多数の野良ディクが棲息しているから気を付けろといった助言はしなかった。

リュウたちも特に深くは言及しない。レンジャーは街のため、人のため日々働いているが、「政府の人間」ということで一部から忌み嫌われているのだ。

「道、分かる？」

「何となくな。ついこの間、任務でリフト道のディクの一斉討伐をしただろ？」

ああ、と答えるリュウは線路に降り立った。

「道の途中途中に標識があつた。それを頼りに行くしかない……急ぐぞ」

腰につけたポーチからペンライトを取り出し、ボッショウは早足に踏み出してゆく。

トンネルの両壁には白い電球がチョーンで鈴なりに張られているが、明かりは灯っていない。ディクが電気系統を食いちぎったためだろう。

じゅり、じゅり、と音を立てながら進入してゆくトンネルはまさに闇の棲み処。ペンライトの作るスポットが薄黒い染みだらけの壁を、滲み出した地下水が滴る天井を、すっかり錆びついた一本のレールを音もなく撫でてゆく。

歩き出してから五分ほど経過したところで、ベチャ、という液体音がボッショウの足元で弾けた。一人はすぐに身構えたが、スポットのなかでうごめく物体を見ると剣の柄から手を離した。

ハオチー。今ごろリュウの腹のなかで消化されているだろう肉の主だ。

身体の半分が肌色と薄緑色のツートン・カラーになつた芋虫型のディクで、体表に粘着性の高い液体をめぐらして普段は天井や壁に張り付き、パトロール中のレンジャーの前に落下していくのは珍しいことではない。

「リュウ、お前の好物が落ちてきたぞ」

ボッショウはからかうように言ひながら、うねうねと身体をしならすハオチーを蹴り飛ばした。

きりもみするように転がつていくハオチー。と、その先から喉を鳴らすような獣のうなり声が聞こえてきた。

一、二、三………合わせて六つ、白く底光りする獣の目が暗闇に

浮かんでいた。

「さつそくお出ましか」

邪公。地下世界に広く分布する一足歩行型のディクで、丸みを帯びた小太りな胴体に、大砲のようつに顎が突き出た頭の乗つたアンバランスな体つき。耳まで裂けた口の両端には鋭い牙が生えている。

ある程度の知性を持ち、何らかの防具を身にまとつて両手に棍棒や斧を装備して狩りを行つ。なかにはライト・ボウガンを持つ者もいるが、撃つてこないとこりを見ると田の前の三体はどれも近接タイプらしかつた。

リュウは剣を抜こうとしたが、ボッショウに止められ、その手にペンライトを渡された。

「お前は？ 照明係？ だ」

言つやボッショウは颯爽とレイピアを引き抜き、相手を挑発するかのように刃を立てる。

先頭の邪公が高らかに斧をかかげて雄叫びを上げると、三匹が一斉に躍りかかってきた。

しかし、ボッショウの間合いに足を踏み入れた途端、一匹が額から血を噴出させて倒れ込み、半秒遅れてもう一匹も地面に伏した。瞬く間に仲間をやられ、残された一匹は慄くように後ずさりを始める。いよいよ背に壁が迫り、邪公は最後のあだ花と言わんばかりに大きく吼えた。

それを鼻で笑いつつ、ボッショウは突きの構えを取る。

「死んでいいよ」

弾丸のごとく繰り出されたレイピアの先端が、邪公の片目を貫いて壁にまで到達した。

邪公は悲痛な断末魔をもらし、やがて魂が抜けたようにふつと全身の痙攣が止まつた。

獣剣技。自身が学んだ剣術を、ボッショウはこう呼んでいた。

「全員、死んだの……？」

「見りや分かるだろ」

脳、心臓、三体はどれも正確に命の在り処を射抜かれていた。

血は乱暴に噴き出るのではなく、穿たれた穴から滾々（こんこん）と湧き出るようになれば、その顔はべろりと舌を突き出して獲物はどこかと叫んでいた。あたかも生きたまま時間が止められたかのような姿だ。

一方、ボッシュは返り血一つ浴びていない。彼がレイピアを鞘に納めてしまつと、本当にそこで戦いがあつたのか疑わしく思えるほど、一瞬の出来事だつた。

リフト道のディク掃討作戦があつたのは一週間前。大勢のレンジヤーとともにリュウとボッシュも作戦に加わつた。

討伐した邪公の数は述べ百頭。セカンドやファーストといった上級レンジヤーもいたなかで、サードであるボッシュは相当数の敵を討つた。

元から高R値のエリートとして注目されていた彼だつたが、そのときの戦果が彼の名と実力を決定付けた。いまでは彼に取り入ろうと「ゴマをすつてくる下級レンジヤーもいるほどだ。

かの作戦で居住区近辺にのさばる邪公たちを仕切つていたリーダー格の討伐に成功。他にも脅威となりそうな大型の邪公はあらかた片付けられた。

ヘッドを失つた群れは散り散りとなり、いまでは狩り逃した残党、いわゆる「雑魚」が残つてゐる状態。先ほどトンネルで鉢合わせた三頭もその一組だらう。

邪公は高い知能を持つてゐる。その朱色を帯びた全身と、鬼のごとき面差しは見るからに獣猛だが、不用意に人間の繩ぱりに踏み入つていくほど頭の悪い生き物ではない。

だからこれまで大規模な掃討作戦が行われてこなかつた。こちらから近づかなければ、邪公は決して人間を襲うことはない。いや、なかつたのだ。

明確な理由は分からぬ。おそらくは邪公が獲物としていたディ

クが、彼らに狩りつくされてしまったのが原因だらうと推測されている。

ある夜、数匹の邪公が下層区街に侵入してきた。そして街を荒らしに荒らした。このことがきっかけでレンジャー基地は隊員総出で邪公、およびその他のディスクの討伐に乗り出した。

この日のことを、リュウはあまり思い出したくない。頭の中から永遠に葬り去りたいとすら思っている。控えめに言つても、あの日の出来事は？ 悪夢？ だつた。

リフト道はディスクの排泄物で汚れ、壁や線路のうえに飢え死にした邪公が転がっている。腐臭と暗闇。ここに空気を吸つてると、リュウの脳裏にあの日の絶望が矢継ぎ早の映像となつて想起される。事が起きる前に、どうして排除しておかなかつた？

リュウはトンネルを部分部分で仕切るゲートをくぐる度に振り返る。ここにシャッターを閉ざしておけば、ディスクの行く手を塞ぐことが出来る。さつきの邪公、だつてかなりリフトポートに近い場所にいたのだ。

しかし、それをすれば当然、リフトの運行が滞る。食料や物資の供給が遅れてしまう。このトンネルがいくらディスクの通り道になるとはいえ、物資の搬入路を閉ざすことは出来ない。こと何の権力も持たないサークル・レンジャーには。

そうやつてリュウが悩んでいる間に、ボッシュはぐんぐんと先を進む。彼の頭にはそもそも「街を守る」という発想はないようだつた。

整備用の通路を経由し、二人は天上的高い開けた場所に出た。

歩くところは両側に奈落が広がる橋の上となり、壁に設置された照明灯が岩肌に深い青色の光を投げている。向かいには反対車線の線路が見えるが、橋はその半ばでぶつりと途切れていた。

淡い白光を放つ虫がゆらゆらと宙を舞い、鬼火のような光の軌跡が暗がりに描かれては消える。燐虫。奈落からは時おり思い出した

「風が吹き上がった。」

リュウはその都度足がすくんだが、ボッショウはまるで堪えていない様子だった。

「ボ、ボッショウ」

「なんだよ」

「ちょっと、進むの早くない?」

「おまえさ……」苛立ちげに頭をかきながら、ボッショウは立ち止まつた。

「バイオ公社が時間に立たせるのは知ってるだろ? このままだとリフトに置いていかれるぞ」

「まさか……だって、おれたちはその護衛じゃないか。少しひらこは」

「待ってくれねーよ」リュウの言葉を取り次ぎ、ボッショウは再び歩き出した。

「あそこはそういうところなんだ」

橋を渡り終えると、またトンネルが一人の前に伸びていた。しばらくブースで砂利を踏んでゆく音だけがこだましていたが、「そういうや、お前、まだ見るのか?」ボッショウが唐突に問いかけてきた。

「え、何を?」

「夢だよ。最近、変な夢にうなされるって言つてただろ?」

「あ、ああ……それは、そうなんだけど」

リュウは困ったよつに鼻頭を指で搔く。彼との会話はいつも急に始まるのだ。

「何を見たのか決まって覚えてないんだ。ただ、見たつて気がするだけで」

「なんだよ、それ。自分が見た夢ぐらいしつかり覚えとけよ」

そう言われても、リュウは頭のなかで独りこちた。

「なんでこんな話を?」

「別に? ただ、今朝はちょっと覚めざわの悪い夢を見たんでな」

「どんなん……？」

ボッショウはゲートの横につけられた開閉レバーに手をかけながら、肩越しに言つた。

「？竜（ドラゴン）？に喰われちまう夢さ」

ガシン！ 銅造りの壁や天井に大きな音を立て、扉は開かれた。二人の足がぴしりと止まる。白タイルの敷き詰められたホームのうえに邪公の死骸が横たわり、そこに無数のコウモリが群がつていたからだ。

彼らは外敵の存在を察知するや、威嚇するような奇声を上げながら瞬く間に二人を包囲した。

「手厚い歓迎だな……」

ボッショウは素早くレイピアを構えた。それに遅れてリュウも剣を抜く。

敵陣の真つ只中で、一人は背中合わせに立っていた。

「こつちは俺がやる。もう半分はおまえだ」

ついでボッショウは脅迫めいた声で言つた。「出来るよな？ 相棒」そしてボッショウの背中が勢いよく離れていくと、リュウは少しよろめきながら目の前の敵と対峙した。

ランタン・バット。鋭く尖つた耳に、顔の半分を占める大きなガマ口。皮は邪公と同じじく朱色を帶びている。

負けるもんか リュウは十字型の剣を振りかざし、大・小それぞれ体格の異なるランタン・バットの群れに飛び込んでいった。しかし、振り子のように宙を羽ばたくランタン・バットを彼の剣が捉えることはなく、斬撃はことごとく空を流れた。

一匹一匹は怖くないが、ランタン・バットは数で攻めてくる。リュウは防戦一方になり、敵を斬り倒すための剣はやがて敵を振り払うだけで精一杯の？棒？と化していた。

バットたちにたかられて手も足も出ないリュウは、ふと目に飛び込んできた空白へとその身を投げた。

一旦は間合いをおき、戦局を立て直す作戦だつたが

突然、目

の前に鮮紅色の粒子が漂い、一点に集約し始めた。

しまつた！ 群れのなかの一匹が気流を生み出すかの「」とく羽を素早く動かし、その身は田の前にあるのと同じ色の粒子をまとっている。

ランタン・バットは何も噛みつくだけではない。？パダム？という火炎系の魔法を操るのだ。

「くつ！」

眼前で小さな爆発が起きた。とつさに飛びのいたので直撃は免れたものの、しばらく前後不覚に陥った。

左肘に鈍痛が走る。うまく受身が取れなかつた。更に爆風によつて巻き上げられた塵が紗幕しゃまくとなつて周囲を覆い、敵の位置が分からぬ。

しかし、リュウは静かにまぶたを閉じた。ゆっくりと深呼吸し、神経を研ぎ澄ます。

何も死を覚悟したのではない。ゼノ＝1／128はリュウとボッシュの直属の上司であるが、リュウにとつては剣術の指導官でもあつた。

訓練生時代、彼女が演習場で技を実演して見せてくれたときのことはいまでも脳裏に焼きついている。

『全ての生物は体内に？気？を宿している。そして剣士にとつて、剣とは身体の一部。刃の切つ先に気を集中させ、振り下ろしどとどに放出する。よく見ておけ』

彼女の周囲には細長いコンクリートの柱が並んでいた。彼女は一対の剣を両手に持ち、ふとまぶたを閉じた。

時間が静止したような沈黙。それは次の瞬間、コンクリートとともに砕け散つた。

リュウは空氣鉄砲を食らつたかのような衝撃に吹き飛ばされ、おずおずと起き上がりつてみれば、あれほど堅牢に見えたコンクリートが彼女の足元で白い粉末と化している。

唚然とするリュウに、彼女はさつと眼鏡のテンプルを触れてから、

言った。

『おまえにこの技をくれてやる。名づけて

？絶命剣？だ』

リュウは目を見開き、剣を両手で逆さに持ち上げた。全身の気が躍動して刃の切つ先に流れ込んでゆく。砕ける。あのコンリートのように。

「行くぞっ！」

リュウは全力をこめて剣を地面に突き刺した。めりこんだ剣の先から爆裂的な勢いで波動が広がり、周囲にいたランタン・バットは真空の刃に斬り刻まれて次々と落ちていった。やつた！ リュウは両肩で大きく息をしながら、口のなかでつぶやいた。

しかし 振り返ったときには遅かった。一匹のバットが猛烈な勢いで突進してくる。攻撃も防御も間に合わない。

だが、どうしたことだろう。きつく閉じたまぶたの先で覚悟していた痛みは、一向に訪れなかつた。

「危ないところだつたな、リュウ」

まぶたを開けてみると、目の前には左翼から腹の中心にかけて串刺しになつたバットの姿があつた。

ボッショ。彼が助けてくれたのだ。バットは穿たれた穴からどす黒い血を流しながら小刻みに震えている。

ボッショはさつと剣を振るい、まるで唾を吐くようにバットを床に打ち捨てた。

「さて、先に進もうか」

そう涼しげに言つ彼の背後には、バットの死骸が鈴なりになつて横たわっていた。

死骸は眼球大の穴が腹や頭、身体のどこかしらに穿たれ、その数はざつと見ただけで十数匹はいる。

これだけの大群を相手にボッショは息一つ切らすことなく、そればかりか「これぐらい出来て当然だろ?」といつよつな佇まい。

リュウは身体を力ませた。ボッシュの前でぜえぜえと息を喘がせるのが恥ずかしく思えたからだ。

喉の奥で息が詰まりそつなのをじらえつつ、リュウはボッシュの後についていった。

「 廃棄ディク処理施設？」

埃や煤をかぶつて汚れているものの、壁に掲げられたプレートには確かにそう記されている。

つまり、二人の目前にあるエレベータは廃棄ディク処理施設に通じているのだが、二人はそこを目標しているわけではない。今まで一人は標識が示す通りに進んできた。ここに来る直前、最後に見た標識には、廃棄ディク処理施設と一人の目標す場所が同じ方向で示されていた。

「 ようするに、ここを通つて行けつてことだろ」

早々とそう結論付けたボッシュはエレベータに乗り、リュウも慌てて彼の後に続いた。

整備用エレベータは簡素な柵が周囲にめぐらされただけの四角い箱。ボッシュが柱についた赤いスイッチを押すと、鉄のショーンがじりじりと金属音を立てながら巻き上げられていった。

バイオ公社下層実験棟へと繋がる通路は、レンジジャーが度々世話をになるホスピタルの廊下をリュウに思わせた。

床はエメラルド色のリノリウム、所々が張り出した壁は真っ白だ。これまでの銅色で出来た薄汚い建物とは違い、ずいぶんと清潔感があるものの、ハオチー一匹の気配すら感じられないほど底冷えした静寂が広がっている。

ぱつたりと、前を歩いていくボッシュの足音が聞こえなくなる。彼の足は扉へと向かい動き続けているのに。それをどうしてか、リュウは不審に感じなかつた。

心がある種、恍惚とした状態にあった。誰かが自分を呼んでいる。

いまの彼はそのささやきに誘われるままの人形になっていた。

扉が開かれた。廃棄ディスク処理施設。先に入つていつたはずのボ

ッショウの姿はなく、リュウの視線は一点に注がれていた。

?竜?。この地に足を踏み入れた者を待ち受けるかの「」とく、そ

れは扉を入つてすぐ真正面のところで磔にされていた。

大空を自由にかけていた翼は溶け、大地を搖るがした両足は姿さえなく、脊髄骨がむき出しになつて垂れ下がり、世界の行く末を見守つていた目は大きな空洞となつている。

いまや無残に朽ち果てたドラゴンの巨体。しかし、リュウには分かつていた。この耳に聞こえる声の主が?彼?だということを。?長い、終わりのときが……終わつた。とうに潰えた我が試みを、呼び覚ます者……?

リュウはすうつと伸びた橋の上を静かに歩いてゆく。妙な予感があつた。

それはドラゴンとの距離が縮まつていく毎に輪郭を帯び、?彼?の前に着いた頃には確信に変わつていた。

この絶望に満ちた日常が変わる。いや、変えてくれる。そうだろう?

?いいだろう、小さき友よ……?

まばゆい閃光がドラゴンの口先から広がり、リュウの身体を、絶望を、ゆっくりと?み込んでゆく。

?今一度、空へ?

「リュウ! おい、リュウ!」

聞き覚えのある声に鼓膜を揺らされ、リュウは目覚めると同時に飛び起きた。

「あれ! ?」右に左にめぐつていた目が、一点に止まる。

「ボッショウ……?」

「はあ? いきなりフラツと倒れたと思つたら……寝惚けてるのか

よ

「倒れた……おれが……？」

ボツシユはリュウの肩を掴み、強引に立たせた。

「おい、しつかりしてくれよ。行くぜ！？」

いまのは一体なんだつたのだろう。夢、なのだろうか。

場所はバイオ公社下層実験棟へ繋がる廊下。床も壁も何も変わつていない。ただ、あの心を押しつぶすような静寂はなくなつていた。前を歩くボツシユの足音もちゃんと聞こえる。そうだ。エレベータでここのフロアへと降り、そのまま普通に歩いていただけなのにまるで現実と夢の境目を感じなかつた。

不思議に思いながらも、リュウはボツシユとともにレ字型の通路を右に曲がり、突き当たりにゲートを見つけた。

なぜか見覚えがある。この先は、あの、ドラゴンがいた部屋じやなかつたか……？

リュウの予感は当たつた。部屋の奥で、巨大なドラゴンの白骨体が十字に組まれた鉄柱に磔にされている。

「なんだ、これ……！？」

ボツシユは思わず驚嘆した。

施設は天井が高く、各フロアに通じる扉へは橋が懸造りで渡されており、下はディクの死骸や鉄くずが山積している。

なかには人骨と思われるものまであつた。燐虫が舞い、死骸から発せられる臭氣と塵が銅色の霧となつて視界を覆うなか、その奥に浮かぶドラゴンの巨像はあたかも死神のようであつた。

掌や腕、心臓には四本の大きな鉄槍が打ち込まれている。ドラゴンは正面を向いて固定されていたが、それは骨格標本というにはあまりにも不吉な姿だつた。

リュウはボツシユとともにしばし啞然としていたものの、不思議と声を感じない。よりおかしな言い方をすれば、ドラゴンから？生氣？を感じないのだ。

夢のなかでは心が恍惚とするほど強大な引力を持つていたのに、

いまのドリフトンにはそれがない。ただの死骸だ。

不審に思つて見つめていると、ボッシュはリュウが怯えていると思つたのか、

「死んでるんだぜ？ 噙みつきやしないわ。で、行こや。リフトに遅れたらまずいぜ」

くるつと踵を返し、ボッシュはわざと歩き出していく。リュウは永遠に黙して語らないドリフトンの口先を仰ぎ見ながら、問い合わせるようにつぶやいた。

「？ アジーン？ ……？」

どうしてそんな言葉が口を突いて出たのかは分からなかつた。

「リフトが出ちまう。急げ、リュウ！」

発車のベルがけたましく鳴り響く。

ホームへの階段を駆け下り、ボッシュは一足早くリフトに乗り込んだ。

リュウも後に続こうとしたが、係員が前に立ちはだかり、ペンとボードを突き渡された。

どうやら乗員リストに名前を書けといふことらしい。ボッシュの分も。

「おい、何してんだ、リュウ！」

黄色く塗装された三両編成のリフトの先頭から、ボッシュが柵から身を乗り出して急かすように手を振つている。

誰のせいだよ しかし、いまは悪態をついている時間とえ惜しい。

リュウは記入を終えると同時に振り返り、すでに発進したリフトの後部車両へと飛び乗つた。

両手でしつかりと梯子を掴み、呼吸を整える。予定よりも到着が遅れたのは確かだが、何せリフトが故障していたのだ。

リュウは頭のなかで文句を言つながらゆっくりと梯子を上り、小さなバルコニーへと出た。

不意に身体がぐらついて慌てて手すりを掴む。高速輸送車両と名が付くだけあって結構な速度だが、こんなに急いで何を届ける気なのだろう。

屋根の中央には丸いでつぱりがあり、そこはハンドルで開閉するタイプの上蓋がついたハッチとなつていて。すなわち、積荷は今まさに自分の足元にあるのだ。

好奇心に引き込まれそうになる身体を強く吹きつける風が阻む。リュウは片腕で顔をかばいながら通路を進み、銃座の前で柵に背を預けた。

かん、かん、かん。鉄造りの梯子を踏む音が聞こえる。やがてボツシユがその顔を見せ、挨拶代わりに手をあげた。

「リュウ、そんな気難しそうな顔しないで、もっと気楽にいけよ」ボツシユの視線がちらとハッチに向かう。「何を運んでるのか知らないけど、レンジャーの護衛までついたリフトを襲いつはいいなさい」

貨物を狙い、盗賊や?トロニー?の連中がリフトを強襲するのは間々ある話だ。そのため置いてきぼりを食らいそうになりながらも、こつしてレンジャーがリフトの護衛につく。

道中あつた橋の一つが見るも無残に崩壊していたのだって、つい数日前に何者かがリフトを爆破したからだ。犯人は捕まつておらず、動機や目的は不明のままだが、おそらくは?トロニー?の仕業だと見られている。

メベト=1-4という男が率いる?反政府?を掲げたレジスタンス組織。リュウたちレンジャーの敵だ。

確かに、もしも彼らの襲撃にあつたら、という不安がないわけでもなかつたが、リュウが気難しそうな顔をしているのは別の理由だった。

「ボツシユ、君には、ドライコンの声が聞こえた……?」

ボツシユは質問の意図が分かりかねるよつて眉毛を曲げた。

「急にどうした?」

「さっきの大きなドラゴンのことだよ。不思議だけど、おれ、名前知ってるんだ」

「名前？」

「？アジーン？……それが、あのドラゴンの名前だ」

バカバカしい、とボッシュは鼻先で笑つた。

「お前も知つてんだろ？ ドラゴンつていうのは、？大いなる災い？を引き起こした、言うなりや？ 邪神？だ。あいつらのせいで俺たちはこんな薄汚い地下で暮らすハメになつた。もう千年も前の話だから、地上の暮らしがどうだつたかなんて知らないけどな……。とにかく、そんなやつに直々に声をかけられたんだ。お前、やばいかもな」

「ボッシュだつて、夢のなかで喰われたんじゃないのか？」

「あれは、別だ」

痛いところを突かれたように答えて、ボッシュは一息、間を置いた。

「ところで、リュウ。お前……俺に手柄をゆずる氣ない？」

リュウは耳を疑う。「えつ！？」

「俺の能力だと、あとは大きな手柄があれば昇進できる。つまく行けば？ 統治者^{メンバ}？ の一人にだつて、なれる」

別段見るところもない岩窟の景色が矢のよつに過ぎ去つてゆく。それをぼんやりと眺めていたボッシュの目が、じろじろリュウに向けられた。

リュウは彼の眼差しに寒気を覚えるときがある。暗闇に浮かぶ邪公の両目玉に見つけられたときのような恐怖、危機感。

ドラゴンのことで頭がいっぱいだつたリュウは、つかの間の白昼夢から現実へと引き戻されるような気分だつた。

「統治者なんて、まさか……」

「リュウ、俺にはそれだけの資格があるんだ。そう、このボッシュ『1／64は、この世界を統治するメンバーの一人になる。いや、ならなきやいけない』

初めは理想を語るようだつた彼の口調が、それがさも自らの？義務？だとでも言つような堅苦しい響きへと変わつていつた。

「なあ、リュウ。D値1／8192だと……おまえはサード・レンジャーより上には行けない。俺が昇進すれば、お前の後ろ盾になつてやることも出来る」

ボッショは真っ向からリュウを見据えて、よく言い聞かせるように言つた。

「リュウ、俺のために働いてくれ」

ボッショはその身にどんな過去を、使命を背負つて生きているのだろうか。

これまで謎に包まれていた友人の心が垣間見えた気がする。いや、いまとなつてはもう？友人？とは呼べないかも知れない。

彼の翠緑色の瞳は力強く自分を見つめているようで、視線はずつとその先に向かっている。ボッショのなかで、自分は單なる踏み台でしかないのか？

リュウはしばらく黙りこくつていたが　　その耳はまだならぬ危機の気配を感じ取つた。

中央に連なるつらら石をはさんだ向かいの線路に、人型のティクガリフトを追うように走行している。

背中には人がまだがり、こちらに鋭く何かを向けた。一発、二発、銃声が響き渡る。

一つはリュウの袖口をかすめた。リュウは慌てて銃座につき、ろくに照準もあわせることなくトリガーを引いた。

「強襲ティク？　トリニティか！？」

銃声の隙間にボッショの怒号が聞こえる。

敵はハンドガンで応戦しながらやがてリフトを追い越し、その姿は闇に消えた。

「あきらめた……？」

目を凝らしながら、リュウはつぶやいた。

「いや……ボッショが？前方？に敵の姿を捉えた。

「ちくしょう！ ぶつ壊してでもリフトを止める気だ！」

彼の背中越しにリュウにもしかと見えた。リフトのフロントライドに照らされ、敵が何かを ?ロケット・ランチャー ?を肩に担いでいるのが。

やがて砲口が火を噴いた。この世のすべてが一瞬にして破壊しぶされるような凄まじい衝撃のなか、リュウの意識は深い奈落の底に投げ出された 。

地平線の果てまで真っ白に塗りつぶされたこの景色は、おおよその世の物ではない。

ひどく傷ついた身体を引きずるように、リュウはよたよたと歩いていた。

どこへ行き着く当ても、標もないのに、何か強大な力に引き寄せられるように足が動く。

何だ？ 何と言っている？ 白らの息遣いだけがこだまする真空のような静寂に、それは空間のどこからともなく聞こえてくる。 ?おまえを……？

突然、リュウの脳内に幻像げいじやうが流れ込んだ。

ドラゴン。その見るも無残に朽ち果てた巨体が全身を震わせ、目の前で飛び立とうとしている。

聞こえた。いま、はつきりと、それは打ち鳴らされた鐘のように大きく響いた。

?おまえを選んでやる？

(?) 飛べない羽を持つ少女 -前篇-

「今日は歴史の勉強だ、リュウ」

眼鏡の柄をさっと触れて、ゼノはスツールから立ち上がった。なめらかな岩肌が黒板、四角いコンテナが机。レンジジャー演習場の片隅に作られた、ゼノの特別教室だ。

「かつて、世界には、空？という色があった。そして太陽という？光？があり、月という？闇？があった。とても美しい世界だった。そこには我々の祖先が暮らしていた。人間、獣人、妖精……誰が王様ということもなく、彼らは大空の下を自由に駆け回っていた。しかし、彼らの平穏を蝕む存在があった。？竜？。彼らは世の安寧を守るために、学問を拓き、魔術を生み、科学をこしらえて兵器を作った。

そうして長い年月に渡り、彼らはドラゴンと戦い続けた。気が遠くなるような闘争の歴史のなかで、高度な科学技術を手にした彼らは、ドラゴンの邪悪な力を利用しようとを考えた。

すると今度は彼らのなかで血で血を洗う戦いが起こるようになつた。かつて？邪神？と畏怖されたドラゴンは、もはや彼らの手駒、兵器になつっていたのだ

手に書物を開きながら、悠揚^{ゆうよう}と歩いていた彼女の足がぴたりと止まつた。

「ここまで歴史が記されたところで、古文書は唐突に終わっている。？大いなる災い？。その一文を残して」

ぱたん、と分厚い書物を閉じ、彼女はおもむろにリュウの机に置いた。あずき色の布で装丁された本は所々がけら立ち、金箔で印字された表題はかすれている。

重い。リュウはペラペラと頁をめくつてみるが、この本には膨大な時間が詰まっている。幼い彼の手に、それはまだ大きすぎた。

「それはお前にやる。幼い頃に父からもらった物で、私はもう文面

を思い出せるほど読み込んだからな」「

父。どこか懐かしい響きのようにはじられたが、同時にひどくよそよそしい感じもする。リュウは両親の顔を知らないのだ。

「ところで、リュウ。この科学や銃がある時代に……どうして私のような？剣士？がいると思う？」

どうせ答えられないと分かっているくせに、ゼノは度々いじわるな質問をふつかけてくる。

リュウはしばらく考えてみたが、やがてふるふるとかぶりを振った。

「魔法も銃弾も、その力を抑えることは出来ても、完全に絶つまではいかなかつた。唯一、ドラゴンを倒すことが出来た武器が……？」

剣？ だつた。

理由は分からぬ。純粹に殺傷能力の高さを上げるなら、剣は魔法にも銃弾にも劣る。武器としては最も原始的で、また非効率だ。それでも邪を払う唯一の聖具として、剣はいかなる時代にも必要とされてきた。無論、その使い手もな」

ゼノはリュウの肩を叩く。「お前は魔法も銃の扱いも苦手だつたな。だが、ようこべ。いつかお前の剣は、ドラゴンから世界を救うかもしれないぞ」

これから厳しい稽古が始まる。するとその口元から笑みが消え、彼女はまったくもつてドラゴンのようになる。

ゼノは怖いし、いじわるだし、たまに逃げ出したくなつてしまつけれど　リュウは彼女との時間が、大好きだつた。

一度は肉体を離れた魂が徐々に舞い戻つてくるかのようだ、リュウはゆっくりと目を覚ました。

鉄の焦げるような匂いが真つ先に鼻をつけ、視界にはちらほらと火の粉が舞つている。

辺りには黄色い車両が横倒れに、あるいは前部から岩盤に突き刺さり、漏れ出したオイルに引火して所々ぼやが起きていた。

そうか。トリー・ティの襲撃にあって、リフトー」と谷底まで落ちてきたんだ。

一筋の黒煙がすうっと吸い込まれていく先を目で追うと、そこには闇。急峻な崖と、突出した岩々の鋭さがほの赤く染まっている。幸いにも火が照明の役割を果たしてくれた。明かりがあるだけだいぶ心が落ち着く。

リュウは通信機を取り出そうと、腰の後ろにつけたポーチに手を伸ばした。がしゃり、と鉄くずを握るような音が鳴る。

通信機だけでなく、ペンライトまでがポーチのなかで壊れていた。おそらくは落下の際に背中をしたたか打ちつけたからだろうが、しかし、不思議だった。

かすり傷一つ負つてないどころか、よく眠ることの出来た朝のように身体の具合が良い。頭もすっきりとしている。

リュウは小首を傾げたが、途端、一拳に押し寄せてきた不安がそれを打ち消した。ボッシュはどうしただろ。積荷はどうしただろ。

彼は大慌てで確認に向かう。積荷を乗せていた車両は横倒しになりながらも、ハッチは依然として固く閉められていた。が、車体の側面には何か強い力でこじ開けられたような亀裂が入っている。

パチッと勢いよく爆ぜる炎が行く手を塞ぎ、中身の確認も出来ない。リュウはしばし途方にくれた。

いざれにしろ、レンジャー基地に戻る必要があるだろう。任務の失敗を報告しに。

暗い地の底で出口を見つけようと歩き出した彼の足取りは、ひどく重々しかつた。

つと、何か曰くありげな物音が聞こえた。火の爆ぜる音とは違うし、腹を空かせたディクのうなり声にしては嫌に甲高い。

人間の悲鳴？ リュウは直感に打たれ、額にかけていた暗視ゴーグルを装着した。

サーモグラフ視界の中央に、鬼火のようにゆらめく熱源がある。

岩間から出たり隠れたりで全体像がおぼつかないが、人型であることは分かつた。

だが、リュウは助けを求めて呼びかけることはしなかつた。ディクのなかには人間によく似たシリエットを持つ者もいる。サイクロプスやドヴォークウ、彼らは身の丈二メートルを悠に超える一つ目の怪物だ。

リフトを襲つたトリー＝ティの一員が乗つていたのはそのどちらか。鋼のような肉体に、リフトと張り合つほどの馬力を誇る足腰。人を乗せて自在に岩場を飛び、駆け回るために開発された乗用のディクだ。

もしかしたら、あれは例のトリー＝ティかもしれない。リュウは熱源を追つて、狭くてごつごつとした岩道を進んだ。ときに歪な地形に足を取られそうになりながらも、対象との距離を着実に縮めてゆく。

やがて強い光を感じ、リュウはゴーグルを外した。それは廃工場らしき施設の玄関につけられたポーチ・ライトだった。対象は先ほどこのなかへと入つて行つた。

室内は埃や錆びた金属の匂いで満ち、部屋の四隅に付けられた白熱灯が明滅を繰り返している。ここは鉄くずやスクラップの集積場らしかつた。

扉の形をした四角い枠が、次のフロアへの道順を示している。その奥から、どす、どす、どす……。粉の詰まった袋を踏みつけるような音が、不気味な響きを帶びて聞こえてくる。

リュウは気配を殺しながら慎重に、かつ急いで足を運んだ。部屋に入つてすぐのところにあつたスクラップの築山に身をひそめ、ちらと外を覗きこむ。

女の子だ。女の子？ リュウは我が目を疑つた。今まさに、サイクロプスが自分の眼前を横切ろうとしている。その分厚い腕のなかで、少女が鎖の束縛から逃れるようにじたばたともがいているのだ。リュウは嘆くように一人かぶりを振る。その声にもならない悲鳴

を聞いた、涙でいっぱいの瞳とさえ視線が合った。しかし、無我夢中だったのだろう。少女はサイクロプスと同様にリュウの存在に気が付いていない。

そのままじっと身を潜めていれば助かる。おれはサーダー・レンジヤー、D値1／8192のロー・ティ。あんな怪物とともに戦つて勝てるわけがない。

だけど、本当にいいのか？ おれはまた繰り返すのか？ お前は？ また、無力なまで終わるのか？

ぶつぶつと糸が切れたように、身体の底から怒りにも似た闘志が湧き上がる。今までに感じたことのない力の奔流。

それはやがて真紅のオーラとなつて体外へとほどばしり、紺色に澄んでいた彼の瞳は燃えるような赤に染まっていた。

あいつを倒す。彼はスクランプのうえに飛び乗り、剣を抜きざま再び高らかに飛翔。刃は矢のごとき速度と威力を持つて、サイクロプスの背中を斬り貫いた。

緑色の血液とともに、その口からびよもすような金切り声が噴き出した。サイクロプスはめちゃくちゃに腕を振り回し、肩口に乗つていたリュウを振り落とした。

スクランプの側面にしたたか背中を打ちつけたものの、まるで痛みを感じない。理性や恐怖もとうに吹っ飛んでいる。いまはただ、目の前の敵を倒す、破壊する。その衝動だけに突き動かされていた。サイクロプスの胸から飛び散る血しぶき。その一滴一滴を正確に捉えるまでに神経が研ぎ澄まされていた彼にとって、眼前に振り下ろされた拳をかわすなどは造作もないことだった。

リュウは素早く背後に回り、剣を握る手と足に力を込める。一息に地面を蹴つた。刃が斜めに閃き、少女を抱えていたサイクロプスの左腕が宙を舞つた。

耳をつんざくような絶叫を背中に受けながら、リュウは両手にじかと受け止めた少女の安否を確かめる。ショックのあまり氣を失っているが、呼吸は感じられる。

どす、どす……。あの重量感のある足音が近づいてくる。リュウは静かに振り返り、あらぶる敵と対峙した。

それが顔と言わんばかりの巨大な一つ目。腹筋が六つに割れた雄々しき肉体。片腕を失い、おびただしい量の血を流しながらも、万雷の「」とき雄叫びを上げるほどの生命力。

残された三つ指が鉄塊のごとき拳を作り、急加速をつけて振り下ろされたのよりも早く、リュウは先ほど穿った穴の下を貫き、剣の柄尻に左手を添えて、そのまま前へ前へと体重をかけた。力強く踏ん張っていたサイクロプスは、しかし、リュウの力に負けてかかとからコンクリートにめり込み、ずりずりと地面を掘り進みながら一直線に押し流されてゆく。

その巨体を壁が受け止めた頃には、サイクロプスはすでに瀕死の状態にあつた。一つ目が力なく瞬きを繰り返す。

リュウは素早く剣を引き抜き、終の一刺し。大目玉がぶしゃっと弾け、やがてサイクロプスの全身からふつと力が抜けた。

「はあ、はあ……」大きく息を喘がせる彼の周囲から、真紅のオーラが空氣に溶け込むように消えていった。同時に脳内を占めていた破壊衝動が失せ、理性が戻ってきた。

リュウはいまさら腰が抜けそうになるほどの恐怖を感じた。目の前でうなだれるサイクロプスにではなく、この数分間の自分に。何だ？ この力は何だ？ 思い返してみれば、戦っている間はまるで自分の意思が働かなかつた。この身体を誰かに操られているかのような感覚だつた。

リュウは返り血に汚れた掌を見る。それはかすかに震えていた。何だ、何なんだ、おれは……？ 誰なんだ？？

動搖する彼の瞳が、遠くで横たわる少女を捉えた。彼は剣を鞘に収めながら駆け寄り、少女の顔を覗き込んだ。

思わず息を呑む。それまで脳内にはびこっていた不安や疑念は、一瞬のうちにかき消えた。

「」の色素の薄い金色の髪も、白い肌も、か細く流れの四肢の輪郭も、すべてがガラス細工のように繊細だった。

リュウは革の手袋を取り払い、そっと少女の背中に両腕を回した。薄汚い返り血で「」の美しさを壊らせてはいけないと、あるいは血の一滴すら少女にとつては致命傷になるかもしれない。

「」とにそう思われるほど、少女はもうく、無闇に触れてはいけない物なのだと五感が訴えてくる。

少女の顔が一瞬、苦痛を感じたようにゆがみ、やがておぼろげにまぶたが開いてゆく。

それが完全に開かれ、リュウを見つけると、少女は小さく声をこぼしながら彼にしがみついた。まるで深い闇に吸い込まれそうになる身体を必死に繋ぎ止めるかのように。

「大丈夫。あいつは、倒したよ……」

思考が止まつた頭のなかから、一つ一つ言葉のピースを探すように、リュウはただただじしくをさやいた。

間近に見る少女の黒い眼は、表面に透き通つた水をたたえ、なかに神秘の都が広がつてゐるのではないかと思われるほど、心をひきつける力があった。

リュウは小刻みに震える身体を肩からおろし、「立てる?」と言つうと、少女はゆっくりとつなづいた。

「おれは、リュウ。きみは……?」

少女は腰周りについた埃を払い落とし、おどおどするよつた視線をリュウに向けた。

「……」

喉の奥につつかえている物を吐き出さずするよつて、少女は懸命に言葉を紡いとする。

そして痛そつて、歯痒そつて身じれしながり、やつと、それらしい単語を口に出すことが出来た。

「……ナ……? きみ、声が……?」

リュウの言わんとしていることを察し、少女 一ーナの表情に、

暗い影が降りた。

何か悪いことをしてしまった気がしつつ、リュウはおもむろに踵を返した。

「とにかく、ここを出よ。安全なところまで行かなきや」

しかし、二ーナは元の場所で身をすくめたまま動かない。

怖いのだろう。サイクロプスのような怪物が、外の世界が。

「おいで」

リュウは手招きし、力強く「行こう！」と言った。

しばしためらうような仕草を見せたあと、二ーナはべたべたと音を立てながら駆け寄ってきた。

彼女は裸足で、手術の際に患者が着るスモックのような、薄地の白いベールしかまとっていない。

そして、何より。彼女の背中には一対の赤い羽が生えている。「翼」と呼ぶにはあまりにもか弱く、彼女が動くたびに白い光の粉がふつと虚空に散られた。

リュウが手を差し伸べると、二ーナはそれを遠慮がちに、すこしそこひなく受け取った。

瞬間、何故だろう。彼女を守らなければ、リュウは思った。

一人が立ち去つてからもなく、とある人影がフロアに降り立つた。

生き物のようこうねる長い尻尾。フードに隠れた獸耳。タイトな藍色のショート・ワンピースに締めつけられるように膨らむ乳房。薄がりに浮かぶその姿は、あでやかな女体の輪郭を持つていた。彼女は床に飛び散った緑色の血を追いかけ、壁にもたれたまま死んでいるサイクロプスの前で足を止めた。

口から上が暗視レンズ付きのマスクで覆われ、彼女の瞳や表情の機微をうかがうことは出来ないが、彼女はどこか名残惜しそうにサイクロプスを見つめていた。

『今回の任務は

』

ふと、彼女の脳裏に低くしわがれた男の声がよみがえる。

『下層区バイオ公社から搬送される……積荷の確保』

彼女は訊ねた。『それは、一体何ですか？』

『人の形をしている。それも、おそらくは……？子供？だ』

そのとき、彼女は自分と男の間の光が怪しく輝いたように感じた。長い沈黙のち、男は悟ったような、諦めたような態度で言った。

『この世界がいかに疲弊しきっているか……それが分かる事例だよ』

彼女はつと振り返り、その足は一人が向かつた先へと静かに動き出していった。

(?) 飛べない羽を持つ少女・後篇・

二一ナ。それが彼女の名前らしい。

何かに怯えるようにうつむき、いつそ亡靈のような足取りで歩く。この手に彼女という存在を握り締めているのに、どこか実体が感じられない。幻なんじやないかと、思わず疑つてしまふほどだ。

リュウは絶えず彼女を気遣いながらゆつくりと進んだ。こちらはブーツを履いているから何の問題もないが、彼女は裸足だ。

銅でコーティングされた床はざらざらとして表面が粗く、ネジや尖った鉄の断片がそこらじゅうに落ちている。ディクの排泄跡としき染みもある。

そんなところを歩かせるわけにはいかない。右腕と左足首に錘のような分厚い輪をはめている以外、彼女は赤子のように無防備なのだ。

通路の突き当たりでHレベータを発見したが、電気系統をディクに食いつきながらされているのか稼動せず、リュウは近くにあつた整備用梯子をしつこにした。

先に自分がのぼり、二一ナの手を引く。まるで昏睡状態にあるかのような、意識がはつきりとしていないらしい彼女の面差し。いつまぶたが閉じて、ふつと梯子から落ちてしまふかリュウは肝を冷やしつ放しだった。

だが、それは単に外見から受けた印象であることが分かった。梯子から引き上げられると、二一ナは自分の意思できょろきょろと首をめぐらし、薄がりのなかで何かを見つけた。

するとそちらのほうにぱたぱたと駆けていつてしまい、リュウは彼女が何をするのかと行方を見守った。

「うー?」

所々が鋸びた鉄のチエスト。

錠前は壊れており、ふたはうつすらと開いている。二一ナは物珍

しゃうに手を伸ばした。

「うあ！」

途端にチエストが跳ね上がり、額に一対の触手を生やした奇怪な生物が姿を現した。

「二ーナ！」

リュウは腰が抜けた動けなくなつた二ーナの手を取り、通路へと逃げ込んで立てつけの悪い鉄扉を強引に閉じた。

噂でしか聞いたことがないが、宝箱やコンテナを背負つて風景に溶け込み、それに近づいた者を襲う巨大カタツムリがいるという。いまのは明らかにそれだ。リュウは鉄扉に背もたれてほつと胸をなでおろしながら、諭すように言った。

「だめだよ、二ーナ。気になるからつて無闇に触っちゃ」

二ーナは上目遣いにちょっと残念そうな顔をして、じくじくとうなづいた。

こういつた反応を見るに、彼女は言葉を理解出来るらしい。ただ、何らかの事情で声を失っているのだ。

それに自分の意思もはつきりとしている。今だつて、好奇心の赴くままに行動したじゃないか。十一、三歳の子供らしく。

彼女をどこか魂の抜け殻のように感じていただけあって、この発見はリュウを安堵させた。彼女には心がある。生きている。

しかし、一方で疑問は尽きない。たとえば肩や首元、腕や足に規則的に刻まれた青い文様について。見るからに飛べそうにない赤い羽について。

思い切つて口に出そうとするが、それはいつも寸でのじりで留まる。彼女は答えを言うための術を持たないのだ。

だが、これだけは答えて欲しい質問として、どうしてこんな場所にいるのか。サイクロプス、恐らくはトローニティの所有物と思しきディクに、さらわれかけていたのか。

リュウの脳裏に、車体の側面を引き裂かれたリフトの姿が浮かぶ。まさか。

リュウはちらりと、彼女に悟られない程度に横顔を覗き込む。そうだ。こんなに可愛い子が、リフトの？積荷？であるはずがない。

二人は半壊になっていたドアをこじ開けて、新たなフロアへと足を踏み入れた。

すると、ディク？ 何か平穏ならざる物音が聞こえた。顔をマスクで覆った人間が、ハンドガンを構えて物陰から飛び出してきた。とつさにリュウも剣を引き抜いて逆袈裟に斬りかかる。銃声が高らかに鳴り響いた。それにおどろいて地面にへたり込んだ二ーナがあそるあそるまぶたを開けると、リュウは尻もちをついた状態で、相手の首に刃の切つ先を突きつけていた。

一方、相手もリュウの額に銃口を向けていた。まさに一触即発の状態だった。

「トリーーティか？」

「レンジャー、その子を置いていけ。君では……その子を救えない」膨らみのある胸、甲高い声質、相手は女だった。

「なに……？」

「我々はその子を必要としている。この腐った世界を変えるためにな……」

女の後ろには長い尻尾が地面を這うようにして垂れている。獣人。リュウは一瞬それに気を取られたが、すぐさま視線を女の顔に戻した。

「何を考えているのか知らないけど……犯罪者の言うことを聞く気は、ないね」

女は鼻先で嘲笑った。「立派だね、レンジャー。けどね……」

淡々とした口調で、女は続けた。

「君の目に映つていい世界だけが、すべてというわけではないんだよ……。

ただ生きてるだけなら、知らない方が幸せなこともある。君は、私は会わなかつた……。羽の生えた女の子もいなかつた……。いい

ね？」

ついで、女は少し離れたところに立つて、一一人を見やつた。

「あ、おこで。私と一緒に」「ひ

すると、一一人は意を決したように立ち上がり、ぱたぱたとリュウの下へ駆け寄つた。

そして自分が守るといわんばかりにリュウをかばい、女をにらみつけた。

「そのレンジャーといても、君は救われない……」

しかし、一一人の瞳は頑なだった。

女は困つたようにため息をもらし、やがて根負けしたふうに言った。

「分かった、レンジャー。手を結ぼう。ここを出るまで」

「何を企んでる……？」

「その子を保護しようって目的は、同じだろう？」

女はおもむろにマスクを外し、その素顔が露わになった。リュウが想像していたよりも優しく、それでいてどこか悲しげな誰かの未来を暖かく見守りつつも、いつかその身を襲うだろう不幸を憂いてもいる、そんな複雑な表情だった。

「私は、リン。よろしく」

しかし素顔を見せてくれたといって、すんなりと心を許すわけにはいかない。相手はトリニティ、何を考えているのか分からぬのだ。

リュウの眼差しから敵意が消えないせいか、リンは努めて親しげに言った。

「あなたも、よろしくな。レンジャー」

リンという女は、なぜか施設の間取りに詳しかつた。この階段がどこに通じているか、この部屋は何に使われていたか。

「ちょっと昔、ここに厄介になつたんでね」それが彼女の答えだつた。

過去にトリニティのアジトとして使われていたのだろうか？ リュウはリンの尻尾を目で追いながら、あれこれと考えをめぐらした。リンが先頭を歩くのは、何も彼女が案内役を買って出ただけではない。もしリュウが彼女の前を歩いていくとして、いつ後頭部に銃弾が飛んでくるか分からなかっただ。

しかし、それはリンにとっても同じはず。更にこちらは用心して剣を抜き身にしているにも関わらず、彼女はハンドガンを腰のホルスターにしまっている。

リュウはますます不思議に思った。二ーナが目的なら、さつさと自分を殺して連れ去ればいいのに。

疑念に耐えかねて、リュウは訊ねた。

「さつきリフトを襲つたのはお前だろ？ ロケット・ランチャーまで使つて……なのに、なんでいまは何もしないんだ？」

リンは背中を向けたまま答えた。

「私の目的はその子を連れて行くことであつて、あんたを殺すことじゃない」

「でも……」

「しつこいやつだね」 リンはぴたりと足を止め、肩越しに二ーナをちらと見やつた。

「誰だつて、小さな子が悲しむ顔なんて見たくない。犯罪者にだって……心はあるんだ」

リンは冗談めかして言い、くすりと掴みどけるのない笑みを浮かべた。

「そう、か……」

リュウは睡然とするほかに言葉が思いつかなかつた。

レンジャー基地、隊長室。

窓に差し込む人工太陽の光が部屋を真っ赤に染め上げるなか、ボッシュは身体を震わせていた。

上司の叱責が怖いのではない。任務に失敗したという？ 屈辱？ に

打ち震えているのだ。

「トリニティの襲撃……リュウは行方不明……そうですか」
抑揚のない声で応えながら、ゼノの瞳はかすかに憂いを帯びていた。

「それで、積荷はどうしました？」

「積荷！？ 僕は、殺されそうになつたんだぜ！？」

「あれは、極めて機密性の高いものです……。報告に戻るより、積荷の確認を優先すべきでした」

ボツシユの視線が狼狽しきりに足元をさまよつ。「あ、あの高さから落ちたんだ……あとかたもなく……」

ぴしゃ、とゼノは書類を挟んだボードを中指で小突いた。

「ボツシユ……上層部は、言い訳を好みません。積荷の確認、そして、確実な？処分？を望みます……」

くつと眼鏡を持ち上げ、ゼノの眼光が鋭く冴え渡つた。

「いいですか。？それ？が、どのような姿をしているとしても……完全に処分するのです」

ボツシユが慌てて部屋を飛び出して行つてからしばらく。彼の去り際はさながら負け犬のようだった。

高いD値に恵まれたとはいえ、偉大な剣士を父に持つとはいえ、所詮は十六の子供。精神が未熟なのだ。

ゼノはブランドをめぐり、人工太陽をぼんやりと仰ぐ。時々思うことがある。

いや、それは何十年と組織に尽くし、一定の地位についた者なら誰でも胸に秘めることかもしれない。

組織への、そして自分への疑念だ。悪化の一途を辿る地下都市全体の大気汚染に対して、上層部はとある計画を推し進めている。到底表沙汰には出来ない非人道的な計画だ。しかし、大気が浄化され、人々の暮らしが守られるなら止むを得ない？犠牲？なのだというのが、上層部の考え方だ。

彼女自身、彼らの？手駒？として計画の邁進に加担している。今

さら「嫌だ」という我を押し通して組織を抜けることなど出来ない。そうするためには、彼女は長く組織にい過ぎたのだ。責任がある。裏切れない信頼や期待、長い年月のうちにびっしりと根差したしがらみがある。

だが、単に勇気がないだけなのではないか、そう指摘されたら言ひ逃れ出来ないのも、また事実だった。

自分の心はとっくに腐っている。命令通りに働くだけの機械と化している。剣の指導員として働いていたときから、彼女は上から与えられたマニュアル通りに幾人もの訓練生を指導してきた。義務的に、何の感情もなく。

そうしてレンジャーになつた彼らは、いま立派な人間として生きているだろうか。いや、ほとんどは公儀権力の笠を借りて横暴に振る舞い、ローディたちを踏みにじる下衆と化している。

世界を汚す分子たちの誕生に、彼女は一役買つてしまつたのだ。それに気付き、自責の念に苦しんでいた折、彼女はリュウと出会つた。

一切のマニュアルを捨て、ときには姉のよう、母のよう、彼女はリュウに接した。

そのおかげかも分からぬ。リュウは決して優れたレンジャーではないが、少なくとも自分の利益のために誰かを傷つけるような人間にはならなかつた。

ゼノが下層区レンジャー基地の監督官に任命されたのは、リュウの訓練期間が終わつてまもなくのこと。それから彼女が教え子を持つことは一度となかつた。

リュウ。心から向き合つことの出来た、最初で最後の教え子である彼には、自分の果たせなかつた想いを全て託してある。D値の低さなどは関係ない。

だから、生きて、この様々な歪みを抱えた世界の、ほんの一部分でもいい。

変えて欲しいと、願うのだ。

(?) 究極の破壊者 -前篇-

一一〇〇メートル。自分たちのいる場所は、大体その辺りだらうとリンは言った。

リュウが暮らす下層区街でちょうど一〇〇〇メートル。それより深い最下層区は都市化が進められておらず、採鉄プラントや下水処理場などライフラインに関わる施設が集まつた工業地域となつている。

人工化されていない天然の空間は野良ディクたちにとつて格好の棲み処であり、現状ほとんど野放しだ。治安も衛生環境も？最下層（世の底）？に相応しい劣悪ぶりだが、一方で貧民層に残された最後の生活圏でもある。

人口増加に対する居住ドームの許容量^{キャパシティ}には限界があり、D値が低い者のなかでも高齢、病弱などの理由で職につけない者は次々と淘汰される。罪を犯してD値、すなわち政府発行のIDナンバーを抹消された者も同様だ。

社会からつま弾きにされた彼らはおのずと最下層区に集まり、やがて？貧民窟？と呼ばれる集落群を築き上げた。ちょうどバイオ公社の実験施設から逃げ出したティクたちのようだ。自らの棲み処、コミニティを形成したのだ。

貧民窟はアリの巣のように張り巡らされている。リン曰く、この施設の最上階にあたる場所から貧民窟の一つに出られる。更にそこからは下層区行きのリフトが出ているそうだ。

リュウはほつと胸をなでおろしたが、すぐに「相手はトリニティだぞ」と氣を奮い立たせた。話が出来すぎている、これはひょっとしたら罠なのかもしね。

「レンジャー、疑う気持ちは分かる」

心を見透かしたような物言いに、リュウはどきつとした。

「だけど、ここを出るまでは？同盟？だと言ったはずだろ。私の言

う」と、少しは信じてもらいたいもんだね」

しかし、リュウの顔から警戒の色が薄らぐ気配はない。

「無理、か……」リンは自嘲気味にくすりと笑つた。

廃れた壁や床の具合を見るに、施設は人の手を離れてかなりの時間が経つてゐるらしかつた。

しかし、通路の照明は所々生きている。電気が通つてゐる証拠だ。やる気のない工員が施設閉鎖の前に電源を落とし忘れたのか、あるいは浮浪者が住み着いているのかもしれない。

じりじりとストロボのように瞬く黄色の電灯、腐敗した金属の匂い、滴る水が下水管に音を立て、廃墟特有の鬱蒼とした空氣と底冷えした静寂とが怪しいコントラストを作つてゐる。

あまり長居したくはない場所だ。かさかさ、かさかさ、という何かがうごめくような音がどこからともなく聞こえてくる。排水溝から虫が飛び出して、一行の前を素早く横切つていつた。

鎧のように黒く艶めく扁平状の体、鋭い双眸、力ナクイと呼ばれる昆虫型のティクだ。ひやつ、と怯える二ーナの肩を、リュウは安心させるようにぽん、ぽんと叩いてやつた。

ここはティクの巣窟となつてゐる。先ほどから耳に聞こえる不気味な物音も、その源を辿つていけばティクに行き着くだろう。一行の足はおのずと早まつた。

T字型になつた通路の一方へと進んでいくと、突き当たりの壁に梯子がかかつてゐた。

ここはもうつぱら階の昇り降りに梯子を使つていたらしが、リュウは地階にあつたものほかにエレベータはないのかと訊ねてみた。

「それがないから、みんなここをやめちまつたのかもね

「冗談っぽく言いながら、リンは梯子をのぼり始めた。

リュウは田のやり場に困る。レオタードのような衣服を着ていながら、彼女はまるで男の視線というのを意識していない。

更に長い尻尾がうねうねと動いて、顔を下に向けていても毛先が

鼻にかかる。これは妨害を目的とした嫌がらせなのか？ と、リュウは盛大にくしゃみをしながら思った。

梯子は三階を抜けて四階まで伸びていた。直線距離にすれば七、ハメートルと言つたところか。

リュウとリンにとつては大した移動ではないが、二ーナは小さく息を喘がせて疲れの色を見せている。

近くに小部屋を発見し、一行はそこで休むことにしたが、先客がいた。

バインド・スペイダ。四本の長い肢と頑強な顎を持ち、普段は天井に張り付いている。

部屋へと踏み入つた一行は彼らの歓迎を受けたというわけだ。身体の成熟した者から小さな者まで、次から次へと天井から降りてくる。ざつと目にしただけで十匹近くはいた。

肢を小刻みに動かして前進する姿は一見すばしつこく感じられるが、実際はのろい。

リンは慌てることなくハンドガンを抜き出し、構え、マガジンに装填されている弾丸の数だけ銃声を鳴らした。

あまりの爆音に驚いたスペイダたちは、壁の穴から隙間から、文字通り蜘蛛の子を散らして消えていった。リンは一匹たりとも殺すことはなかつた。

もしも彼らを全員残さず倒していたら、通路はこの部屋を抜ける以外には広がっていない。自分たち、特に二ーナが裸足で血溜まりのなかを歩くことになる。

それを配慮したことだつたのだろう。梯子の件で、彼女は大雑把で細かいことには無頓着な性格かと思っていたが、リュウは少し、感心した。

一行のいるところは工員の休憩室に使われていたらしく、一段ベッドやスチール製の机や椅子などが置かれている。また同じ用途の部屋が道なりに連続しており、一行は一つ目の部屋で足を休めることにした。

何気なく下段ベッドに腰を下ろすリュウ。マガジンに弾を込めているリン。

二一ナは地べたに座り込んでいたが、やがて思いついたように立ち上がると、元来た部屋のほうへぱたぱた走つていつてしまつた。おとなしく見えて、彼女は好奇心の塊なのだ。

「あの子が何なのか、訊かないのか？」レンジヤー

ハンドガンをホルスターにしまい、ベッドの細い鉄柱に背を預けると、リンがおもむろに話しかけた。

「訊けば教えてくれるのか、犯罪者？」^{トロニティ}

本当に二一ナについて訊きたいことは山ほどあるのだが、リュウはとつさに強がつてしまつた。

「正直なところ……私も詳しくは知らされてないんだ。けど、ね。

レンジヤー

リンの目線の先で、二一ナがぼんやりと天井を仰いでいる。

またいつスパイダが現れるか分からない。リンの指先は密かにハンドガンにかかっていた。

「あんたが守ろうとしているこの世界は、それほどまつとうなもんじゃない……」

分かつてゐる。そう答へそつになつたのを、リュウはばぐつとこらえた。相手が同業者ならいざ知らず、敵対者に言われて合意するわけにはいかない。

しかし、彼女はなぜこんなことを言つのだろう？トロニティとは犯罪者と訳されると同時に、反逆者とも呼ばれる。

元々は政府の人間だった者が、彼らの生み出す不条理に耐えかねて反旗を翻すのだ。ひょっとしたら彼女は、自分と同じレンジヤーだつたのかもしれない。

「行くよ、二一ナ」

長い沈黙のあと、結局リュウはリンに訊ねることはしなかつた。

どうしてトロニティ（反逆者）になったのか。経緯はどうあれ逆賊になつた時点で、彼女はIDを抹消されているはずだ。

それは社会に居場所がないことを意味するが、あの忌々しいD値という呪いから解放されたとも言える。

自由の身。いや、本当にそうか……？

前を進むリンの背中が、なぜだか急に小さく見えた。

新たに二つ梯子をのぼり、一行は施設の最上階へと降り立つた。施設内を歩いていて気付いたことだが、ここはどうも廃棄物を処理するだけの場所ではないらしい。

フェンスやパーテーションで室内が分割され、空間的にも少し開けた部屋をいくつか通ってきた。そこに入ると決まって二ーナが怯えたように腕を掴んでくる。

部屋にはこの世で最も残酷な拷問を受けたとでもいうよつた、惨たらしいディクの屍が累々と横たわっていたのだ。

死体にはどれも個体識別の番号プレートが付いていたことから、おそらくは実験体だろう。すなわち、この施設は過去にバイオ公社の息がかかっていたということだ。

いや、むしろ下層区周辺でバイオ公社の息がかかっていない施設を探すほうが難しい。日々粗製乱造される新型ディクの？性能？を試すべく、本来は違う目的で作られた施設が得体の知れない実験機関と化す。

この施設もその一つなのだろう。リンは昔ここで厄介になつたと言つていたが、元はバイオ公社の社員だったのだろうか？

リュウは絶えず考えをめぐらしていたが、そうやって気を紛らわせていないと、死骸が発する臭気の渦に飲み込まれてしまいそうだつた。

さながら悪夢のような部屋を抜け、分厚い鉄扉で蓋をしてしまつと、一行の前に細い十字路が広がっていた。

このまま真っ直ぐに進めば貧民窟に出られるそうだが、しかし。リュウとリンはさつと身構える。？番人？が立つていたのだ。

ドヴォークウ。サイクロプスと同じ巨人型の乗用ディクだが、あ

ちらと比べると華奢な体付きで、クリーム色の肌や幅広の耳は愛玩動物として親しまれる？地底ウサギ？を思わせる。

彼らは手と足を鎖で繋がれ、低い壁で仕切られたブースのなかで大人しく立っている。

どうやら野生化していないらしく、リュウは自分たちを物珍しそうに見つめる一つ目に愛嬌すら感じた。

通路の左右に連なるブースは二十近くあつたが、残っているのは五体のみ。リンは銃をホルスターにしまい、そのなかの一体の首元を優しくなで始めた。ドヴォークウはくすぐったそうに身じろぎする。

ディクは本来、人間に尽くすために生み出された人工動物だ。基本的に人間を襲うことはないし、知能が高いために飼い主の顔を死ぬまで覚えている。

先ほど自分が殺したサイクロプスだつて、リンとの時間を記憶しているのだ。もちろん、飼い主である彼女も。

どうする。謝るべきか。リンはそもそも自分のディクが死んだことを知らないのかもしれないし、あるいは、それを責めたところでどうにもならないと思っているのだろう。

むしろ別行動を取らせていた自分の責任だと悔やんでいるのかもしない。しかし、相手は犯罪者トリーティ。そして自分は、犯罪者を取り締まるレンジャーダ。ふと、リンがくちびるに指を当てて「しつ！」と静寂をうながした。

フレードのなかでぴくりと動く獣耳が物音を聞き取つたらしい。リュウは辺りに視線をめぐらすと、それは通路の先に開けられた穴からひとつそりと顔を見せた。

一つ目と目が合う。手足の鎖はすでに断ち切られたあと。野生化したドヴォークウだ。その右腕には何か肉片らしき物体が大事そうに抱えられている。

ドヴォークウはリュウたちと仲間の関係を探るようにしばし目を瞬かせたあと、急に雄叫びをあげた。どうやら？敵？だと判断され

たらしい。

リュウはいちばんやく剣を握つて駆け出す。が、それはリンも同じだった。

通路が狭いために、一人の身体は絡まるよつとつしかえた。
「ジャマだよ、レンジャー！」

「あんただつて！」

四の五のしている間に、ドヴォークウは姿勢を低く構えながら突進していく。

そして左腕を天井すれすれまで掲げ、拳という鉄球をぶん投げるよつに振り下ろした。

「ぐお……つ！」

リュウは真正面から殴打を食らつてはるか後方の壁に激突。とつさに剣を構えて衝撃をやわらげたものの、一時的に気を失つた。

「ちつ」舌打ちを一つ、リンは壁に向かつて走り出した。

「こつちに来な！」

ベースの低い仕切りを踏み台に、リンはドヴォークウの頭上を飛び越えた。

一発、二発、銃弾を背中に撃ち込むが、ドヴォークウは怯むどころかよいよ激昂。身体を反転させるやいなや、めちゃくちゃに左腕を振り回し始めた。

リンが軽やかな動きで拳打をかわす度に、壁や床が砕け散つてゆく。他のドヴォークウたちは声援とばかりにがなり声を上げていた。後退していくばかりのリンだったが、やがて意を決したように突入。ドヴォークウの攻撃をかいくぐり、懷にもぐりこんだ。

そしてふつと地面を蹴り、銃口を顎先に押し当てる。決着だ。

「貫け」

至近距離で放たれた弾丸はドヴォークウの脳天を貫いた。

操り糸が一本一本切れていく人形のように、ドヴォークウはふらつき、どつと大きな音を立てて背中から倒れ込んだ。

その胸に抱えていた肉片が血しぶきとともに飛び散り、辺りにほ

のかな腐臭を漂わせる。あれだけ吠えていた仲間たちの声もぴたつと止まり、場は一変して静まり返った。

「こじつは、仲間を守ろうとしただけなのかもしれないね……」

リンは誰に語りかけるでもなく、ぽつりと呟いた。ブースに残されたドヴォークウはみな、鎖に繋がれたまま忘れ去られてしまつているのだろう。

そして戦闘中、我を忘れてもなお、彼が肌身離さず持つていた肉片は、決して迎えに来ることのない主人を待ち続ける仲間のための食料だ。

一旦は鎖に向けた銃を、リンはやがてホルスターに戻した。ここで彼らを解き放つてしまつたら、仲間の仇討ちをされるに決まつている。

「行こう。こじつは、危ないよ……」

リュウはそつと彼女に声をかける。戦闘の一部始終を見ていたが、あの軽快な身のこなしは獣人にこそなせる芸当だ。

敵に回したらかなり手強いだろう。いや、立場としてはとっくに敵同士なのだった。それを一瞬忘れてしまつほど、彼女を頼もしく感じている自分がいた。

「傷は大丈夫なのか？」

「ああ。全然、痛くないよ」

あんなに強く吹つ飛ばされたのに？ とリンは怪訝そうに眉根を寄せたが、本当に痛くもかゆくもなかつた。二一ナに心配な顔をさせてしているのが申し訳なく思えるぐらいだ。

やがて足早にその場を後にした一行だが、リュウはとあることに気付いていた。ドヴォークウの手足についている鉄の輪。それはディクを鎖に繋ぐための物であるのだが、二一ナがはめている輪と形も材質もまったく同じだった。

すると、二一ナは ここで彼は、考えることをやめた。

(?) 究極の破壊者 -後篇-

岩場に出来た隘路あいじゆを抜けると、暖かい火の明かりが三人を出迎えた。

鉄くず町。橋の入り口にかけられたアーチには、かすれた文字でそう記されている。

つとリュウの後ろに隠れていた二ーナが駆け出した。きょろきょろと辺りを見渡し、ぱたぱたと橋を渡つてゆく。まるで何年かぶりに生まれ故郷に帰ってきたかのような様子だった。

二ーナの進む橋は一段一段の間隔が広く、手すりもつけられない。梯子を水平に使つたかのような粗末で危なつかしい物だ。

それがいくつも連結されて、町の至るところへ繋がる空中通路になつてゐる。地面まではせいぜい一、三メートルの高さだが、二ーナはガラスだ。

落ちたらひとたまりもないのだが、一人の心配をよそに、彼女は慣れた足取りでどんどん進んでいった。

「あの子、急にどうしたんだろうね……」

リンがつぶやく横で、リュウも同じことを考えていた。

彼女は橋の下に何かを見つけたらしい。覗いてみると、老婆が幼い男の子と一緒に焚き火を囲んでいる。

一行を出迎えた光の源だ。それが貧民窟全体を温もりある色で満たし、妙に懐かしいような、優しい気持ちにさせてくれる。

二人は橋の上で慎重に足を運びながら、目線で二ーナを追つた。彼女はスロープを下り、老婆のもとへ駆け寄つた。

手振りや身振りで彼女は何事か老婆に訴えかけているが、まったく通じていないうつだ。一人がたどり着くと、二ーナはしおぼくれた顔でリュウのところへ帰つて來た。

「婆さん、あの子のこと知つてゐるのか？」

はて、と老婆はリンの問いかけに応えた。

ついで「うーん……」としわがれた喉を鳴らすと、「知ってるようないよな……」と小首を傾げた。

「坊やはどうだい？」

近くにいた男の子の反応も芳しくなかつた。というより、彼はまだ幼すぎて質問の趣旨さえ理解していないらしかつた。

彼らの衣服は煤と塵にまみれ、もう何日と洗われていないのが分かれる。まるでボロい布切れを身体のあちこちに貼り付けたかのようだ。

どう？ と訊ねたリュウの視線に、リンは静かにかぶりを振つた。リュウの横で、一ーナは膝を抱えていじけている。

「ずっと前に」

老婆がつと口を開いた。

「あんな子を見たような、気がするんじやけれど……」

「どつちなんだい、婆さん」

緩慢とした老婆の口調に、リンは苛立ち半分、呆れ半分といった様子だつた。

「あつ」

老婆に天啓來たり。

二人は固唾を呑んで、その口が何を語るのかと見守つた。

「もうすぐ、炊き出しの時間じゃねえ……」

はあ、とリンは踵を返した。

「ダメだ。すっかりもうろくしてゐるね、あれは」

「でも、一ーナは、あのお婆さんのことを見つてるみたいだつたけど？」

「じゃあ、一ーナはここで暮らしてたつて言つのかい？ あの姿で？」

リンは田振りで一ーナの背中を指す。まるで持ち主の心の有様を示すかのごとく、赤い羽はしゅんとしあっていた。

パチッと焚き火が爆ぜ、大空洞の天井を風が吹き渡る音だけが場を占めてしばらく。リュウがおもむろに口を開いた。

「トリー・ティ……お前は、二ーナの何を知ってる?」「さつきも言つたる。私は、何も知らないって」

嘘だ、リコウは彼女の言葉を遮つた。

少年らしからぬ迫力に、リンは物怖じしたように顔をそらした。
「急にどうしたんだ? さつきまでは無関心だつたくせに」「いいから、教えてくれ。お前が知つてゐる範囲でいいんだ」

リコウの脳裏には先ほどの光景が焼きついていた。

ドガオーケウと二ーナ。どう考へても重なり合わない両者が、?
鎖輪? というアイテムで結びついてしまつてゐる。

この共通点が意味することは何だ? 考えるだに惑ひしくて、リコウは何でもいいから答へが欲しかつた。

「二ーナが何者であるか、本当に私は何も知らないし、聞かされて
もいない……。けど、私の推測を話すことは出来るよ」

すかさず詰め寄るうとしたリコウを、リンは片手で制した。

「最初に言つたね。ただ生きてるだけなら、知らないほうが幸せな
こともある、と……。」

彼女の真実を知つたといひで、お前に何が出来る? レンジャー、

これは感情や興味本位でどうにか出来る問題ぢやないんだよ」

「なら、お前たちはどうするつもりなんだ。二ーナに向をさせよつ
つて? 世界を変える? こんな小さな子に、何を背負わせる氣な
んだ」

「しようがないね……」リンはホルスターに手を伸ばす。

「ここで決着をつけるかい? レンジャー」

リコウは剣の锷を鳴らしてそれに答えた。途端に周囲の空気が張
り詰める。

そしてリコウは先手を打とうとしたが ふつと、リンの口元が
ほころんだ。

「あんた、しようもないバカだよ。本当にこんなところで戦おうと
?」

「そつちが言つたんだろ」

「冗談だよ。今はね」

言つて、彼女はスロープに向かい歩き出した。

「Jの先はリフトポートだ。歩いて十分とかからないだろう。あそこなら誰もいないだろうし、私たちの同盟もそこまでだ……」
彼女の言葉は、リフトポートへ着くまでに答えを出せといふことを意味していた。

「これは私の任務なんだ。彼女を組織へ送り届ける……。ジャマする気なら、容赦しないよ」

ガシン！ と、彼女はハンドガンの撃鉄を引いてみせた。その目は刃のような鋭さを帯びている。

本気だ。彼女は必要となつたら、間違いなく自分を撃ち殺すだろう。

ドヴォークウに、人間の下僕であるティクに、あんなに優しい顔が出来る彼女も、感情に流されるほど愚かではない。

ゼノ隊長と何となく似ている気がする。何か巨大な責任や義務の前に、ひたすら感情を押し殺しているような迷いの光。

それが彼女の青い瞳のなかにも感じ取れる。いや、もっと頻繁に、ごく身近なところで見かけてはいなかつたか？

鏡だ。毎朝、あの洗面鏡のなかに見る自分自身だ。寝て、起きて、仕事をして。それを繰り返すうちに、どんどん感情をなくして。

リンも、ゼノ隊長も、こんな気持ちで生きていたのか？ こんなにもみじめな気持ちは、D値の低い自分だけが抱えていたものじやなかつたのか？

リュウは二ーナを呼んだ。町に飛び交う地底トンボを頭で追いかけていた彼女は、ぱたぱたと彼の元へとやってきて、手を差し伸べると、ごく当たり前のようにそれを受け取った。

出逢つて一日と経つていいのに、彼女は心を開いてくれている。それは自分が命の恩人だからだろうし、人を疑い抜くには彼女はまだ幼すぎるからだ。人の、世界の非情さを知らないのだ。

二ーナの手を握っていると、不思議と心が落ち着いた。スロープ

をのぼって、一行はリフトポートへと続く通路の入り口に差しかかる。

考える。いま自分の気持ちと向き合つて、自分で答えを出すのだ。手遅れになる前に。

リフトポートは静寂に包まれていた。

係員の姿も、停車しているリフトもない。電灯にたかる羽虫だけがじりじりと音を立てている。

「さて、答えを聞かせてもらおうか」

同盟終了。リュウに用意されている答えは三つ。
自分の手で二ーナを守るか、リンの仲間になるか、あるいは、この手を離すか。

リンが彼に選めているのは第三の選択肢。自分たちと出合ったことは忘れて、元の日常に戻る。賢明な選択だ。

リュウはちらりと二ーナを、ついでリンの顔を見た。彼女の指先はかすかにハンドガンに触れている。不意打ちに備えているのだろうか、隙のない奴だ。

いざれにしる、リュウの心は決まっていた。あとはそれを口にして、行動にすればいいだけのことだ。

「おれは――」

突如として、トンネルの奥からリフトの警笛が突風のようにホームを横切つていった。

フロントライトの閃光にリュウの目が眩む。口にしようとしていた言葉は遮られた。

たつ、たつ、たつ……ブーツの乾いた音が聞こえる。眩い逆光のなかに立っていたのは、彼だった。

「ボッショウ……！」

リュウは思わず歓喜の声を上げ、彼に駆け寄つた。

「ボッショウも無事だつたんだ！」

しかし、とうの本人はリュウの横を冷たく通り過ぎていった。あ

たかもリュウの姿が見えていないかのよつ。

ボツシユの双眸はただ一点、二一ナに向けられていた。

「トリー二ティイが一緒か……」いつで間違いなさそうだ。上出来だよ、リュウ。」「

一瞬、ボツシユとリンの間で視線の鍔競り合いが起こる。

抜き身にしたレイピアを右手に持ち、じりじりと、彼の足取りは高慢という名の使い魔でも引き連れているかのようだつた。

「ま、待つてよ、ボツシユ！ 二一ナがどうかした……！？」話を聞かせてよ

「命令は……積荷の、確実な処分だ。それ以上のことを、おまえが知る必要はない」

すると、リュウはボツシユの前に毅然と立ちはだかつた。

「ジャマする気か……？」

「違う、ちゃんと説明してくれ！ 積荷？ 処分……？ なんだよ、それ！？」

予感はあつた。二一ナが、考えたくもないが？ 積荷？ であるかもしないということは。

赤い羽が生えた女の子を見たことがあるか。デイクにはめるものと同じ鎖輪がつけられた人間を見たことがあるか。

ない。彼女がごく普通の人間であるということの証明を、リュウは一切持ち合わせていないのだ。

あるのはただ、二一ナを守りたい。その気持ちだけだ。

「リュウ……俺は、な……」

鋭く、そしてひどく残酷な痛みが右足に走った。何が起つたのか分からなかつた。

見れば、レイピアの切つ先が自分の右足を貫通している。刺した

？ ボツシユが、おれを？

「ボツシユ、何を？」

ボツシユは手元をねじり、更に痛みを加えた。うめき声が口からこぼれ、リュウは思わずひざまづいた。

「俺は、こんなところでつまづいてるわけには……いかないんだよ」とつさにリンがハンドガンを構え、トリガーを引こうとした。が、それはボツシユの後方から発射された弾丸に弾かれ、彼女は丸腰になってしまった。

リフトから新たに一人のレンジャーが降り立ち、速やかに一人を取り押さえに向かう。

二一ナは慌ててリュウの下へ駆け寄り、彼の両肩をしつかりと掴んだ。

「ふん、ずいぶんとなつてゐるじゃないか……」

あざけるように言い、ボツシユはリュウの右足から引き抜いた刃の先端を、二一ナの首筋に当てた。

切つ先から赤いしづくがこぼれ落ち、二一ナのほつそりとした胸元を伝つて白いベールに染みを作つてゆく。

液体の不気味な感触と、いつ殺されてしまつが分からぬ恐怖に、二一ナのか細い肢体はふるえていた。

「やめる……ボツシユ……」

彼の反抗心に満ちた眼差しに、ボツシユはいたさか驚いたようだつた。

「リュウ、お前……」

ボツシユはちらりと刃の切つ先を宙に泳がせ　おもむろに、リュウの喉元を突き刺した。

呼吸が途絶える。喉の奥で生温かい痛みがあふれ、リュウのなかのすべての時間が氷結してゆく。

「リュウ……俺の道を、阻むな……」

機械のように無感情なボツシユの顔が、真つ赤な視界のなかでぐらぐらと形を失つていった。

おれは、ここで死ぬのか……？

よどみきつた闇がどつぶりと渦巻く底なし沼に、あがくのも虚しく意識が沈む。

声が聞こえた。あの、凶悪で、すべての抵抗を徒労に変える強大

な力を持つた声が。

？おまえを選んでやる？

ふつと、身体の内側で小さな太陽が生まれた。

それは焰の翼を広げてリュウの手を、足を、心を、一瞬のうちに焼き尽くしていった。

やがて真っ黒にこげた皮膚をびつしりと赤い鱗が覆い、劫火に研がれた爪は何者をも切り裂く刃となり、頭からは角が生え、髪は燃え朽ちて灰のような白銀へと色を変えた。

「リュウ……？」

ボッシュの問いかけに答える少年は、もうどこにもいない。あるのはただ、鮮紅色の火の粉をまとつた禍々しい人外の姿。それだけが、間違いなく彼の目の前にあった。

六歳ぐらいの男の子だった。

任務からレンジャー宿舎の自室に帰る途中、ふと路上で声をかけられた。

『いいな、おにいちゃん。ぼくもれんじゅーになりたいな』

そう無邪気に言う男の子の声はきらきらと輝いていた。

『ねえ、ぼく、でいーちー／4096なんだけビ……れんじゅーになれるかな?』

やや答えに迷つた末、彼は答えた。

『なれるよ。君は、おれよりずっとすごいレンジャーになれる』
わあー、と言つて、男の子は顔いっぱいに晴れやかな笑みを浮かべた。とても印象的な笑顔だった。

仕事の実態を知つた途端に嫌になる職業だが、幼い子供、特に男の子にとって怪物から街を守るレンジャーはヒーローであり、憧れの的だった。

銃や魔法杖、なかには拳一つと、レンジャーの戦い方は各々の個性が色濃く反映されるために多種多様である。

そのなかでもとりわけ子供たちから人気があるのは剣士だった。男の子が声をかけてきたのも、リュウの腰に剣がぶら下がっているのが見えたからだろう。

銃にも魔法にも適正がなく、身体的にも取り立てて目を見張るところがなかつたリュウにとって、唯一レンジャーとして戦うために残された武器が剣だった。

たつたそれだけの理由で一躍ヒーロー扱いされるのは照れくさかつたものの、この日は『レンジャー』になつてよかつた『と思つた日はなかつた。

そんなある種の優越感が彼を深すぎる眠りへとさせてしまつたのかもしれない。その日の夜に鳴らされた敵襲警報に彼は気付か

なかつた。

すべてを翌朝に知つた。数匹の邪公が破損したライフルラインの隙間から居住区へと侵入してきたこと。巡回任務中のレンジャーがバイオ公社製の酒を飲んでいたこと。

路上生活者のなかから若干数の死傷者が出てしまつたこと。そのなかの一人に、あの男の子がいたこと。

リュウは自分を呪つた。街を守るためのレンジャーが、ありうりとか事件の瞬間に眠りこけていたのだ。

アナウンスを知らせる部屋のスピーカーが壊れていたせいもあるかもしれない。そもそも、ローディだから、働く力がないからと、彼らに家を与えてやらなかつた政府のせいかもしれない。

あるいは、酒に酔つて警備を怠つていたレンジャーが、原因を挙げればきりがなかつた。強いて言うなら、そう。男の子は世界に殺されたのだ。そして、自分は無力だつた。

二ーナと手を繋いでいるとき、リュウはあの男の子のことを思い出していた。心が焼け切れそうになるほどの罪悪感とともに。

だから、思つた。二ーナを守ろう。それで世界に居場所を失つたつて構わない。もしも彼女の手を離してしまつたら、自分の心までも一緒に離してしまふ氣がする。

生きる。自分の心に従つて。しかし、いまの彼?は、自分がら望んでその姿になつてゐるのではなかつた。彼自身の心、自我、感覚さえもとうになかつた。

竜人。異形。血溜まりのような真紅の双眸。^{そうぼう}彼にはもはや破壊に對する飽くなき欲求しか残されていないようだつた。

そして彼は欲望を満足させるに必要な力をすべて備えている。爪、牙、角。あとは破壊対象を見つければいいだけだが、いた。目の前に。

その腕^{かいな}がゆらりと、鮮紅色の火の粉を連れて振り上げられる。音はしなかつた。しかし、ボッシュの身体は数十メートル後ろの壁に叩きつけられていた。

もうぐつたりとしてしまつてゐる。なんて脆弱なのだらう。

チクつと、何かが背中を刺した。銃弾だ。

破壊対象の一つが言葉にならない絶叫を上げながら何発と銃弾を撃ち込んでくる。

弾丸は胸を貫くことなく、ただ弾かれて彼の足元にその数を増やしていくばかりだつた。

力チ、力チ、トリガーの空転音がむなしくこだまする。彼の姿がふつと虚空に消えると、男の身体からぶしゃっと血液が弾けた。まるで水風船が割れるかのよう。

これで二つ目。破壊対象は三つあつたはずだが、近くにいない。

男の心臓を深々と突き刺して右腕を引き抜き、彼はおもむろに振り返つた。

見つけた。破壊対象は尻尾を巻いて逃げようとしている。彼は雄叫びを上げながら、頬が裂けんばかりに口を広げた。

怒れる彼の咆哮が劫火となつて男を呑みこむ。後には大きな焼却痕と、悲鳴の余韻だけが淡々と静寂を舞つていた。

これで完了。いや、本当にそうか？

この羽の生えた子供は？ 長い尻尾を垂らす女は？

駄目だ。壊してはいけない。なぜ駄目なのか？ 分からない、分からぬ……。

混乱をきたした彼の意識は、やがてふつつと途切れた。

* * * *

煌々と、ほの赤い光が揺らいでいる。壁のくぼみに幾本と配された蠟燭の火だ。

「この時期に召集とはな……」

「いざれにせよ、早すぎる」

石造りの聖堂に、二つの低い声が厳かな響きを立てる。

「その時が来るのは確かのこと……それがいつかを決めるのは、僕

たちじやありません……」

ほつそりとしたシリエットがちらりと横を向いて、幼い子供の声で喋った。その手は丸みを帯びた流線形を膝の上に置いた小動物の背をゆっくりと撫でている。

ぱち、ぱちぱち。青白い光の球が忽然と虚空に現れて、小さな稻妻を散らしてゆく。

まばゆい閃光がストロボのよつに空間を照らし、三人の男と、一人の子供、そして瞳を閉じた女の姿とを映し出した。
統治者。気まぐれに分散していた光はやがて一点へと収束していき、消えると同時に一つの大型を生み出した。

刀傷のような線が縦に入つた赤い瞳。その片方は白銀色の前髪に隠れて見えず、耳の付け根から生えた一対の角が髪留めのように頭を横断している。

世界を統べる者たちの頂点、エリュオン。彼の登場を持つて、統治者たちは集団としての完成を見る。

「？竜？が……現れた……」

白と黒の大理石で出来た床に硬い足音を響かせながら、彼は第一声を発した。

「ドラゴンが……！？」

「そう、古の超兵器……我らが、対となるもの。世界を滅ぼすもの。公社からの報告では……起動したのは、すでに活動を終えた個体らしい」

「再起動、だと？ 適格者は、すでに滅んだはず……」

「定かではないが、サード・レンジャーに過ぎない、リュウという少年が……ドラゴンとのリンクを保持している可能性がある」「サード・レンジャー……？」鳴らされた鐘のような、気高く、静い謐な女の声が一人の会話に割つて入つた。

「そのような能力の低い者では……適格者とは、なり得ません。これは？事故？でしょう」

胸の前で祈りを捧げていた手がゆっくりと離れて、その片方が掌

のうえに球を作った。真円のなかで闇色が、時空が、ビくビくと渦を巻き始める。

「その者が世界を混乱へと導く前に……私が、空間の断層へと封じましょう」「まだ」エリュオンは静かにかぶりを振る。

「我々が動くときではない。人のことは、人に……。いまは、上級のレンジャーに確認を命じてある」

そう言葉を残して足早に場を去りうとした彼の背を、左目に眼帯をつけた男が呼び止める。

残された片目は疑念の光に満ちていた。

「息絶えたはずの超兵器……、滅んだはずの適格者……。エリュオン。貴様、一体何をした……？」

エリュオンはつと足を止め、おもむろに天井を仰いだ。幾層ものステンドグラスが張られた天窓の向こうに、人工太陽の真つ白な輝きが見える。

中央省庁区。すべての都市の、人々のうえに存在する場所。彼ら統治者は、この世で最も空に近い場所にいた。

「デモネド、あの少年は実に凡庸だ……。しかし、読まれぬ歴史こそが、真実のときもある……すべてはこれからだ」

蠟燭の火は、ただ煌々と燃えていた。

* * * *

霧のようになかすむ視界のなかで、大きな黒い眼が二つ。見覚えのある顔だ。どことなく物憂いしげで、儂くて。

「二一ナ！？」

リュウは急発進したリフトのよろに慌てて飛び起きた。

ボッシュは？ 敵は？ 辺りをきょろきょろと見回すリュウの目に、白熱灯の光が眩しく突き刺さる。

「ここはどこだ。リフトポートじゃない……。

つと、素早い足音が背後から近づいてくる。リンだ。

「お前は何だ……！？」普通のレンジャーじゃないのか……！？」

「な、何を言つてゐ？」状況が掴めずに呆然とするリュウの肩を、リンは激しく搖さぶつた。

「ボッショたちはどうした！？ 積荷？ 処分？ トリー＝ティ、お前は何を知つてゐんだ。答える！」

「知つてどうする？ さつきみたいに……得体の知れない力を使って、どうにかしようとも？」

「うるさい！」

リュウは荒々しくリンの手を振り払う。自分の置かれた状況が分からず、一種のパニック状態に陥つていた。

掌を見てみる。剣を持つ利き手は皮の手袋をつけ、左手は素のまま。返り血でニーナの手を汚すまいと思つたからだ。

どこにも何も異常はない。ブーツも履いていればニット風の胴着インナーも着てゐる。これは間違なく自分の身体だ。

それなのに、この、他人の布団を使つてゐるような、ぴりぴりとした違和感は何なのだろう。解消しようのない不安に駆られて、リュウの苛立ちは増幅するばかりだつた。

「うう……、んー、んん」

顔を突きつけていがみ合つて一人を見て、ニーナがふるふると首を振つた。

やめて、ケンカしないで、と言つてゐるのだろう。が、リュウもリンも強情で、お前のことなんか知るか！ とでも言わんばかりにお互いぶつちがいに顔をそむけた。

ほどぼりがさめるまでには、それから数分の時間を要した。

今いる場所はリフトポートの貨物庫。話を聞くに、リンが意識を失つた自分をここまで運んでくれたらしかつた。

昨日うなされた悪夢の内容を細かく説明していくような顔つきで、肅々と語るリンの声に耳を傾けていのうちに 徐々に記憶がよみがえり始めた。

映像の断片。感触の切れ端。血だ。悲鳴だ。

戦慄が身体を突き抜けた。これは、本当に、自分がやつたことなのか……？

今さら、リュウは胸震いするほどの恐怖を覚えた。

「……こわい気持ち……こんな感じだけど、本当に分からぬのか……？」

リンはコンテナのうえに座っているリュウを見やつた。

「ああ……あの力のことは、何も分からぬ……」

ただ、と付け加えて、彼は自分の両掌を見た。それは麻痺をきたしたかのように震えていた。

「頭のなかで声が聞こえて、気がついた……。

とても、怖かつた……。自分が、人ではなくなつていくみたいで……」

そつと、二一ナが手を置いた。恐怖に凍えていく心が、ほんの少しだけ温められる。

二一ナは優しく、頭の賢い子だ。つい先ほどもそうだったが、彼女は自分がどのような行動を取ればよいか分かっている。

「分からぬことがまた一つ増えた、つて感じだね。

二一ナといい、あなたの謎の力といい……。まあ、私が一番不思議に感じているのは、

「なに？」

「あなたの服がどこも破けてないってことさ」

リュウはぽかんと口を開けて、やがて小さく笑つた。

「笑うところか？ 私が見た限り、あなたの身体は一瞬にして生まれ変わつたんだ。

得体の知れない？ バケモノ？ の身体にね。それなのに、今じやすつかり元通り。不思議に思わないほうがおかしい」

「それは、そうだけど……一番不思議に思つてることだが、服のことだなんて、ちょっとおかしくて」

「まあ、裸のお前さんを抱ぐことにならなくて、よかつたとは思つ

てるけどね……」

リュウは心ひそかに安堵していた。自分はまだ笑つていられる、人間らしくいられる。バケモノなんかでは決してないのだ。

再び前に進む気力を得たリュウは、ニーナの手を引いておもむろに立ち上がった。

「どこへ行くつもりだい？」

「このままじつとしていてもラチがあかない……おれは、ニーナのことを知りたいんだ」

「行く当てはあるのか？」

そう問われると、リュウは口ごもった。

「バイオ公社のラボ……あそこなら、何か手がかりが掴めるだろ？」それまで背を預けていたコンクリート壁から離れ、リンはゆっくりと歩み寄つていった。

「トリニティ、お前までついてくるつもりか？」

「その子の正体を知りたいって目的は、同じだろ？」リンの口元が静かにほころぶ。「手を結ぼづ、リュウ」しばらくしてから、彼は答えた。

「分かつたよ……リン」

(?) 世界を統べるもの・後篇・

整備用のエレベーターを使い、一行は下層区街を目指した。バイオ公社のラボへは、街にある専用通路を使わなければ入れないからだ。

一行の前に景色が開かれる。赤土の地面が風で巻き上げられ、あの嘘っぽい空の輝きが暗闇に慣れた目に突き刺さる。

ここは街の中央区にあるエレベータポート。

今朝方食堂の行き帰りに見かけたときは故障中だったのだが、ゲート付近でたむろしている作業員たちが復旧させてくれたらしかった。

「変わらないね、ここは……」

歩きながら、リンが横でぼそりとつぶやいた。

「リンも、前はこの街に……？」

「あ、どうだろうね」

くすりと、リンは冗談っぽく微笑んだ。

一行は何食わぬ顔で作業員たちの横を通り過ぎたが、ふと呼び止められた。

リュウはびきつとする。自分たちはすでに?お尋ね者?になつているかもしれないからだ。

「エレベータ、ちゃんと直つてただろ?」

「あ、ああ……助かったよ」

ふつふん、と、作業用マスクで顔を覆つた男は、得意げに鼻を鳴らした。

リュウは冷や汗を拭う。いつも見慣れた街が、人が、牙を隠し持つた獣のように見える。

彼らの足取りはおのずと早まつた。

「ところで、リュウ。一つ寄りたい場所があるんだが」「なに?」

「ついでに金も出してくれると助かるね。二ーナに靴を買つてやりたいんだ」

「え？ でも、急がなくちゃ、と続けようとしたリュウを、リンは手で制した。

「さすがにいつまでも裸足じや、可哀想だろ？ 私がひとつ走り買つてくる。あんたたちは先に行つてな。場所は分かつてる」
二ーナの白い足は煤や埃で汚れてしまつている。この先も長い道のりを踏破していくことを考えれば、多少の危険を冒しても手に入れておくべきかもしれない。

いつか彼女がガラス片なり踏んづけて、そのいたいけな足に痛々しい傷がつくところなど見たくないのだ。

リュウが財布に入つていた札のすべてを渡すと、リンはぽんつと二ーナの頭に手を置いた。

「あんたに一番似合ひの色を見つけてきてやるからね」

そして堀の向こうを一瞥、レンジジャーらしき者がいないことを確認すると、リンは足早に通りを突つ切つて行つた。

少し遅れて、リュウも二ーナの手を引いて歩き出す。広場の中央には、何台もの液晶モニターがつけられた通称テレビ塔が立つている。

モニター各個が違う映像を流し、腰の折れた老人がぼんやりとそれらを見上げていた。物珍しさに二ーナも足を止めたが、リュウが手を引っ張ると慌てて歩き出した。

町民のほとんどは労働者。いまの時間帯は仕事のピークで、人通りは少なかつた。

それでも人目を避けるために、リュウは細く入り組んだ裏路地を進むこととした。子供の頃によく他のレンジジャー候補生たちと鬼ごっこやかくれんぼをして遊んだ。

路の窮屈さや、薄汚れた鉄レンガ堀の質感、近くで換気扇が回る音と、その振動。排水溝からは泥とカビの悪臭がうすら立ち昇り、リュウの五感はそれらを鮮明に記憶していた。

バイオ公社ラボの専用通路は表通りの目立つ場所にある。いつも警備員が一人門前に立っていて、友人たちとともに物陰から忍び込む機会をうかがっていたものだった。

あのトンネルの真っ暗な入り口は、挑むべきこの世の謎として子供たちの冒険心をくすぐり続けてきたのだ。あれから十年近くが経つて、まさか自分がその謎にトライすることになるとは思つてもみなかつた。

幼い女の子を連れて、世界中から追われる身になつて。手前勝手な考えだとは承知しつつ、ボツシユには無事であつて欲しいと思うし、ゼノには恩を仇で返すことになつて申し訳なく思う。

しかし、いつだつて退屈な未来を予想していた彼は、いま巨大な使命感を胸に抱え、高揚していた。

一本の狭い路が伸びている。ここを抜けねば専用通路の真ん前だ。しかし、おかしい。先ほどから喉がひりひりと痛む。いくら環境汚染が深刻な下層区といえど、身体に不調が出ることはなかつた。

「一ナが二、三度咳き込む。「大丈夫？」と背中をさすつていると、やがて街全域にアナウンスの大音声だいおんじょうが響き渡つた。

『警戒レベル4ノ空気汚染ガ発生。該当ブロック閉鎖シマス』

一体何が起きたんだ？ 答えを探る間もなく、新たな問題がリュウの前に立ちはだかつた。

狭い抜け道の出入り口に、つとガスマスクをつけた作業員風の男が現れた。彼はトランシーバーに何事か吹き込むと、やにわに銃を構えた。

「一ナ！」

彼女の手を取つて走り出すのと同時に、高らかな銃声が空を切り裂く。

放たれた弾丸は通路脇のコンテナに当たり、一発はリュウの左頬をかすめた。

リュウは物陰に飛び込む。が、目の前には新たな追つ手の姿があ

つた。挟み撃ちにされたらしい。

相手が体勢を取る前にリュウは地面を蹴り 裂縫がけに剣を振り下ろす。

それはポリカーボネート製の透明な盾に防がれたが、リュウは強引にもう一撃。男は胸を斜めに斬り裂かれ、赤い血がパツと虚空に花を散らせた。

ディクとは違う生身の人間の感触。初めてだ。初めて人を斬った。しかし、一瞬の氣の迷いが命取りとなつた。

「ぐつ！」

右の太ももに激痛が走る。後ろから銃弾を撃ち込まれたのだ。何とか立ち上がらねばと力を振り絞るが、身体が言うことを聞いてくれない。敵はゆっくりと近づいてくる。

不意に、物陰に隠れていた二ーナが飛び出した。その手には木製の魔法杖^{ウォンド}が握り締められている。今しがた倒した敵が装備していた物だ。

二ーナは果敢にも敵を真正面に据え、ウォンドをくるくると旋回させながら振り上げた。すると敵の頭上にほの白い冷気が収束、鋭い氷柱となつて相手を押しつぶした。

レイガ。空気中の水分を一瞬間に凝結させ、対象に撃ち出す攻撃魔法だ。

「二ーナ、君、魔法が……？」

驚くあまり、リュウは傷の痛みなど忘れてしまっていた。

敵は砕けた氷塊のなかで意氣消沈している。だが、死んではいいだろう。

リュウの知る限り、レイガは攻撃魔法のなかでも低級に位置し、威力としてはそこまで高くない。敵が意識を取り戻す前に逃げるのが得策だ。

自分が役に立つことが出来てどこか得意げな彼女の手を取り、リュウは足早にその場を去つた。傷がちくちくとつづいたが、なぜか急速に痛みが消えてゆく。

見てみると、傷口が塞がっていた。あれほど生々しい血を流していた穴が、すっかり元の肌色を取り戻している。？再生？した……？ともすれば背筋が凍るような恐ろしい出来事ではあるが、この非常事態。リュウはひとまず考えないことにした。

来た道を半ばまで引き返してみると、リュウは思わず手で口を覆つた。紫色がかかった霧が路地に垂れ込めていた。

間違いない。これは？ガス？だ。リフト道のディク掃討作戦の際にも使用された神経ガス。

霧の濃度は広場に近づくにつれてより深みを増している。目から涙があふれ、腹から湧き上がる強烈な吐き気をこらえながら、リュウは最後の道を一気に駆け抜けた。

通りを出たところで、二ーナの足がもつれる。慌てて抱き起こしてみると、彼女の額にどつと冷や汗がにじみ、呼吸は荒い。かなり辛そうだ。

と、リュウは人の気配を察した。ガスマスクをつけた一人のレンジャーが悠々とこちらに歩いてくる。その後ろには彼と同じ出で立ちのレンジャーが一人、どうやら自分を待ち伏せていたらしかった。

「よう、サード。お前がリュウだろ……？」

「一体、何をした……？」

ふん、と鼻で笑つて、男は顎で後ろを指した。彼の仲間は物見遊山といった風情で、横たえたガスボンベのうえに座っている。街中の空気を汚すものの正体だ。

「お前、ローディのわりに強いつて聞いたもんでね……用心つてやつだよ」

「そんなことで、ガスを……ゼノ隊長の命令か？」

「いや？あの女は会議だとかで席を外していてね……、なら、好き勝手やらしてもらおうってワケだ」

強い怒りを覚えたリュウだったが、思つように力が入らない。何か強大な重力に押さえつけられているかのようだ。

しかし、何とかしてこの毒ガスを止めなければ。テレビ塔の近くでは、先ほど見かけた老人が苦しそうにもがいている。二一ナも同じだ。

不意に、彼は通りの向こうにリンの姿を認めた。緩やかにカーブする通りを、こちらに向かい走つて来ている。

リュウは何事か二一ナに耳打ちすると、その背中を強く押し出した。いつものように優しく促してやる余裕がないほど事態は切迫している。

「走れ、二一ナ！」

怒号を上げるとともに、リュウは剣を抜いて男の脇腹を突き刺した。

飛びかかった勢いのまま馬乗りとなつたリュウは、一発、二発、拳で男の脳みそを大きく揺さぶつた。

しかし、敵は彼だけではない。男の仲間が銃を構え、その一つは二一ナに向けられている。

リュウは射線のうえに飛び込み、寸でのところで銃弾をさばいて見せた。銀色に輝く刀身は、真つ赤に燃え盛る彼の瞳を映している。突風のように鮮紅色のオーラがほとばしり、彼は剣を振り上げながら急加速。光の軌跡を残しながら一直線に突き進む姿はあたかも弾丸のようだつた。

敵の一人はあられもない声をあげながら無様な死に体をさらし、残るは大男。身の丈二メートルに迫るうかといふその巨漢は、右手に戦斧のよう大きい十字剣を握つていた。

しかし、サイクロプスさえも赤子扱いにしたリュウの敵ではない。一、二度斬り結ぶと、大男はがっくりと体勢を崩した。

好機！^{チャンス}しかし、追撃を仕掛けんとするリュウの意思とは裏腹に、足が動かない。急速に力が抜けて、リュウはがくつと片膝をついた。敵がこの隙を見逃すわけがなかつた。リュウは一転して劣勢に追い込まれ、一度ならず一度、三度ならず四度、高所から繰り出される攻撃を寸でのところでしのいだ。

やがて顎先に蹴りを食らい、リュウは赤土の地面を成すべもなく転がつてゆく。数秒間のうちに傷を治してしまった再生能力も、内側から命を蝕む毒霧に対しても効果がないようだった。

彼の瞳からは真紅の輝きが消え、その呼氣さえも途絶えようとしたがしかし、彼は立ち上がった。ゆらゆらと、蜃氣楼のように。

「どうしてだ……」

リュウの言葉に氣を取られ、敵はぴしゃりと足を止めた。

「おれだけに用があるのなら、街の人を巻き込む必要はないはずだろ……」

「死んだところで……ローディじゃないか。悲しむ奴なんざいねーよ」

言つて、大男は高らかに笑つた。聞いていて吐き氣を催すような下品な声だ。

リュウの額に血管が浮きあがる。柄を握る手に力がこもる。理性はどうに吹き飛んでいた。

「それが……それが、人間のやることかよ！」

穿刺せんし一閃。男の胴体に刃の切つ先よりもはるかに口径の大きい穴がうがたれ、その巨体は弾かれたビー玉のように飛び出していった。攻撃の瞬間、リュウの身体には鮮紅色のオーラがよみがえつた。砲弾でも食らつたかのような穴が男の胴体に開いたのは、オーラの力が刃を通して爆発を起こしたからだ。

ひとまず、敵は片付けた。あとはガスボンベの噴出孔を塞ぐだけだ。

しかし、ガスボンベにはあるべき物がない。ハンドルだ。栓の開閉をするハンドル。

リュウはとつさに振り返る。初めに倒した男が、見せびらかすようにハンドルをかかげていた。

「ざまあ……みやがれ……」

男の腕がぱつたりと地面に落ちる。

リュウも限界だった。意識が混濁し、呼吸もままならない。

乾いた音を立てて、彼は地面に倒れ込んだ。闇に覆われていく視界の先に、リンと二ーナの姿が見える。

そうだ。そのまま安全なところまで逃げろ リュウの意識は、そこで途切れた。

「二ーナ！？」

リンの手を振り払い、二ーナは走り出した。

リュウのところへ向かう気だ。しかし、今さら何が出来る？

慌てて彼女を引きとめようとしたリンだったが、その足は止まつた。

あまりにも深い霧に臆したのではない。思い出したのだ。二ーナには特別な力があることを。

二ーナは小さな足を引きずるよう、ときにはつまづきながら、そのたびに立ち上がりつてリュウの下へたどり着いた。

彼の瞳は固く閉ざされている。まるで死人の顔つきだ。

二ーナは嗚咽をもらすように数回咳き込んだあと、胸の前でそつと両手を組んだ。

彼女の想いに呼応するかのように、赤い羽がはためき、白い光の粒子が放たれ始める。

光は加速度的に強さを増し、やがて巨大な柱となつて天空に打ち上げられた。

紫色の霧が晴れてゆく。汚れた空気が浄化されてゆく。そして光が消失するとともに、彼女は意識を失つた。

リンは一人の下へ駆けていった。リーダーの言つていた、？大気汚染改善プログラム？という言葉を思い出しながら。

(?) 小さな旅立ち -前篇-

「一体、何が……起こったんだ?」

「分からぬ。ただ、言えるのは……二一ナが飛び込んで行つたら、ガスが中和されて、一人とも無事で済んだってことだ」

「二一ナが……?」

ちらりと、リュウの視線が傍らに向く。

良い子でしょ? と胸を張るような、ウォンドを手に持つた二一ナの姿がそこにあった。

街は沈黙に包まれている。あたかも昼に夜が来たというような、寝息が聞こえてきそうな静寂。

気を失つてから十分と経つてないらしかつた。テレビ塔の近くで倒れていた老人が、階段のふもとで女が、路上で子供が、顔に赤土をつけて起き上がつた。

どうやら大事には至つていないようだ。リュウはほつと胸をなでおろすとともに、危機感を覚えた。

またいつ新たな追つ手が現れるか分からぬ、街がまだ寝惚け眼でいるうちに次の行動を取つたほうが良いだろう。

その意思が目線を通してリンに伝わると、一行は足早に広場を後にした。

* * * *

バイオ公社ラボの専用通路には、難なく入り込むことが出来た。毒ガスにやられて警備員が倒れていたからだ。ついでにリンがそのポケットから『カードキー』をくすねておいた。

「災い転じて何とやら、だね」

冗談を言いつつ、リンは入り口の認証装置にカードキーを読み込ませた。

セキュリティハッチの内側でロックが外れる音がし、薄ひんやりとした廊下が目の前に開けた。

暗がりの向こうから科学薬品の匂いが漂つてくるだけで、社員や警備員の姿はない。壁や床の構造は、廃棄ディスク処理施設に至るアプローチ道とほぼ同一。この廃墟を思わせる静けさもだ。

リュウはまた例の不可解な白昼夢のなかを歩いているのではないがと、しきりに頬をつねつた。先を行くリンの足音は聞こえる。後ろをついてくる、ひたひたという二ーナの足音もちゃんといや、止まつた。

その代わりに、けほけほ、けほけほ、二ーナは一度二度、大きく咳き込んだ。

「大丈夫？」

リュウはとつさに彼女の肩を支えた。

しかし、咳は収まるどころか勢いを増し、二ーナはとつとう座り込んでしまつた。

「少し、休ませた方がよさそうだね……」

リンの提案に同意し、一行は近くに見つけた小部屋のなかへと入つて行つた。

何らかの培養装置と思しき台座付きのカプセルが中央を領し、マス目の細かい銅造りのタイル床には薬品の瓶やガラス片が散乱している。

常人にはなはだ用途不明なものばかりだが、部屋の有様からして長らく使われていないことは分かつた。

そのなめらかな素足が傷つくことがないように、リュウは慎重に二ーナを歩かせ、浅黒い粒子を散らす赤い羽を壁に寝かせた。

咳の合間に、ヒュー、ヒューと、肺が悲鳴を上げているような音が口の端からこぼれる。さぞ苦しくてたまらないだろうに、心配をかけまいと作られる二ーナの笑顔が何とも痛々しかつた。

つとリンに肩先を叩かれ、リュウは彼女とともに戸口の先まで歩いていった。蝶番の壊れた扉が小さく軋む。

「リコウ、気付いたか？」

「ああ……一ーナの羽が、汚れてる」

リコウの見やる先で、一ーナが強く咳き込んでいた。そのうひの血を吐き出すのではないかと不安になるほどだ。

「さつさも言つたように、一ーナが毒ガスを浄化したんだ。何をしたのか分からぬけど……あの子の負担になつたつてことね、間違になさうだね」

「……リン、どこへ？」 ゆるやかに踵を返した彼女の背中を、リコウは呼び止めた。

「ちょっと先を見てくれる。少し思い当たることがあるんだ。あんたは、一ーナの傍についていてやつしてくれ」

「え？ でも」

「それと、靴を買つてやれなかつたこと……あの子に謝つておいてくれ」

優しい笑みを投げると、リンは走り去つて行つた。健やかにゆらめく尻尾の先が暗闇に消える。リコウはしづかに呆気に取られていたが、やがて一ーナの下へ戻つた。

「ごめん、つてさ。リンが」

リコウはつとめて明るい声で話しかけた。

一ーナの咳は幾分収まつてきていた。それでも呼吸は弱々しく、玉のような汗が額に浮かんでいる。

「靴を買つてあげられなくて……けど、一ーナ、近いつけいけやんと買つてあげるから。君に似合つ靴を」

「ん……ん……」 瞳りに落ちてしまいそうな、けれど確かに声を聞いているかじりのきらめき。咳はもつ止んでいた。

リコウは一ーナの隣に腰を下ろし、次の声を発するまでじはじばしの沈黙を要した。

「リンは、心当たりがあると……言つてた。やつぱり、君のことどうか知つてゐんだと思つ。けど、おれには何も言わないと。隠してゐんだ」

「んー……」

「別に、嫌ってるわけじゃない。リンはいいやつだ。それは分かつてる」

「ん……？」

「けど、相手はやっぱリコ二ティだ。」のまま一緒にいて、本当に良いのかどうか

そこでリュウはやつと氣付いた、二ーナが部屋の隅まで歩いていたことに。考え方で頭がいっぱいだつたにせよ、物音一つ、配一つ感じなかつた。

二ーナは小振りな尻をこちらに向けて何かを見ている。そのまま後ろにガラス片が落ちていて、リュウはどきりとした。

「二ーナ？」

「んー、んー、んー！」

うれしそうな声を上げる二ーナの胸元には、くまぬいぐるみが愛おしそうに抱かれていた。

継ぎ接ぎだらけの身体に、目がちかちかするような極彩色。それはがらくたの下に長らく埋もれていたらしく、埃まみれだった。

「これは、二ーナの……？」

「んん、んー！」

二ーナの顔がよろこびで弾ける。無理をしていない自然な笑みだ。リュウは心が青く澄んでいくのを感じたが、それも束の間のことだつた。

覚醒を促すようなサイレンの音が鳴り響く。やがて数人の警備兵が窓越しに部屋を横切つて行つた。

リンが見つかつたのか？

リュウは二ーナをかばうようにして身を潜め、しばらく様子をうかがつた。

悲鳴が聞こえた。ついで、およそ人間でない者のうなり声が腹に響いた。違う、リンが見つかつたのではない。

「二ーナ、ここで待つていられるね？」

彼女がうなづくのを待たず、リュウは部屋を飛び出した。

赤い交閃灯が警報に合わせて忙しく回る。リュウは血塗られたよう赤く染まつた空間を走った。

また、悲鳴。リュウの行く手に警備兵の背中が立ち並ぶ。彼らの頭上には、禍々しい人外の顔つき。ディクだ。

それは腕というにはあまりに巨大な長物で警備兵を三人まとめて壁に叩きつけた。豪快な破碎音が一瞬、サイレンをかき消し、あとには見るも無残な血しぶきの光景が残っていた。

リュウはとつさに目をそらしたが、またキッと怪物をねめつけた。たつた一人残された警備兵は、ただただ怯えて後ずさりを始める。

「どいてくれ」

「な、なんだ、お前……戦つつもりか？」

リュウは剣を抜き、構える。

「やつてみる」

一本角の生えた鉄兜の下で、今にも血の涙を流しそうな真っ赤な双眸がギラリとリュウを見つけた。

目の前にするとかなり威圧感があるが、巨腹をでつぱりと言わせてがに股に構えている姿はどこか滑稽でもある。

両腕は生き物のそれでなく、先端に三つのアームがついた大振りな鉄の砲身。人間を三人まとめてなぎ払うには十分な長さと太さだ。しかし、元々の肥満体に更なる重装備をしているために動きはノロく、冴えない。リュウは繰り出された腕のうえに飛び乗り、そこを突つ走りながら首めがけて剣を薙いだ。

飛び散ったのは火花。生身だと思っていた部分は堅牢な鉄のフレートを内側に仕込んでいた。迂闊。

敵が腕を振り上げるとリュウは体勢を崩し、宙を舞つた。もう片方の腕が横様に接近してくる。

リュウは激しく壁に叩きつけられた。骨が軋む、意識が飛びかかる。

それでもなお生きているリュウの身体を、敵はがつしりとアームで捕縛した。ついでぎりぎり、ぎりぎりと、圧力をかけて潰しにかかる。

リュウの口からうめき声がもれ、両側にネジの突き刺さった頭を見据える視界が激痛とともに薄らいでゆく。

と、敵の肩口で小さな爆発が起こった。リュウは力が弱まつた瞬間を見逃さず、さつと素早くアームの束縛から逃れた。

見てみれば、遠くにはウォンドを振り上げた二ーナの姿があつた。いまの魔法はパダム、そして二ーナは再びくるくるとウォンドを旋回させる。

敵の頭上で紫色の電流が弧を描き、小さな雷鳴が轟いた。稻妻は一本角を通して巨体を隅々まで駆け抜けた。

なおも二ーナは小気味よくウォンドを振り回し、一発、二発、続けざまに雷撃を浴びせた。パル。雷属性の低級魔法だ。

「助かつたよ、二ーナ……」

続いて裂ぱくの声を上げながら、リュウは胸の中央部を突き刺した。丸いでつぱりの奥でガラス体がオレンジ色に底光りしている。「コア。またの名を弱点。そこが破壊されると敵は巨体をゆるがしつつ後ずさりしていき、やがて身体の節々から一斉に蒸気が吹き出した。

更に細かなスパークが生じ、感電したかのごとく全身がぶるぶると痙攣けいれんを始めた。往生の姿にしては尋常ならざる気配。

敵は死んでなどいなかつた。それどころか理性の箍たがが外れたかのごとく大音声でわめき始めた。暴走。

敵は両腕を頭上高く掲げてかかげ、有無を言わずに振り落とした。凄まじい烈風とともに碎けたリノリウムがつぶてとなつてリュウを襲う。

とつさに顔をかばつたものの、肩口や太もも、身体の至るところに裂傷が走った。

なおも敵の勢いは留まることを知らない。右腕に反動を溜めると、

それは放たれた砲弾のよつにリュウめがけて繰り出された。

半秒遅れてリュウも地面を蹴る。横薙いだ剣でアームを受け止める。このままでは刀身もろとも全身が砕けてしまうが、しかし。

リュウの怒号に呼応するかのように鮮紅色のオーラがほとばしり、それが刀身にみなぎつてアームに食い込み始める。

リュウは渾身の力を振り絞り、一直線に駆け抜けた。斬り裂かれ、バラバラと崩壊飛び散る鉄片のあられ。

敵の背後を取つたリュウは、その命の在り処に狙いをつけて突き刺した。コアの部分から刃が根元まで突き出している。

敵はゆらゆらと平衡感覚を失つていきながら、やがて耳をつんざくような断末魔とともに、力尽きた。

リュウも無傷ではない。戦闘を終えると同時に片膝をつき、二一ナがぱたぱたと彼の元へ駆け寄つた。

「た、倒しちまつた……！ すげえな、あんた！」

今の今まで傍観を決め込んでいた警備兵が、驚き交じりに歓喜の声を上げた。

うつ伏せに倒れた敵の巨体からはプスプスと黒煙が上がっている。どうやら生身と機械のハイブリッドらしい。

しばらくして、リュウの全身から痛みが引いた。例の？再生能力？だろう。

警備兵に事情の説明を求めてみるに、開発途中だったアーム・ストロングという実験体が檻から脱走し、今の事態に至つたということだった。リュウはどこか腑に落ちない気分になつた。

「まあ、あんたが何者かはこの際聞かないことにして……礼をさせてくれよ」

「それなら、頼みがある」「

リュウは強い眼差しで言った。

「二一ナの……この子のことを知つていいやつに、会わせてくれ」

(?) 小さな旅立ち -後篇-

サイレンが止み、空間は元の静けさを取り戻した。
獣耳をぴくつかせ、リンは辺りに注意を配る。リコウとニーナの
ことが気がかりだ。

ふつと踵を返そうとした彼女だったが、薄暗い廊下の先にエメラ
ルドのおぼろな輝きが見える。それは半開きになつた部屋の扉から
こぼれる光だつた。

銃を構え、リンは慎重に足を踏み入れていつた。すうつと肌寒い
空間が広がる。何基もの培養装置が四列に整然と並べられて、カプ
セルはどれも螢光色の液体で満たされていた。

そのなかの一つに、いたいけな少女の青白い肉体があつた。背中
からは赤い羽が生えて、やせさらばえた身体が螢光色の海に浮かん
でいる。

リンは思わず目を覆つた。

少女には、首がなかつたからだ。

『大気汚染改善プログラム……』

リーダーはこう言つていた。

『空気を浄化するのは、機械ではダメなのですか？』

『この計画は……人間を、その機械にしてしまおうというものだ』
追想の糸が切れるとともに、リンは思わず独りごちていた。

「なんてことを……」

部屋を出て、リンは認証装置にカードキーを通して扉にロックを
かけた。

あの一人にこの部屋を見せるわけにはいかない。そう、本能が彼
女に訴えかけたのだ。

曲がり角の向こうから足音が聞こえてくる。この分だと相手との
距離はかなり近い。

リンは銃を構えて身を潜め、足音が自らの定めた警戒線を踏み越

えるとともに飛び出した。

ぎらりと剣が閃いて切つ先が眼前に突きつけられる。よく見覚えのある強いまなざし、相手はリュウだった。

「なんだ、あんたか……」

銃を下ろそうとしたリンだったが、それはまた素早く構えられた。暗がりにぼうっと浮かぶようにして、二一ナの後ろに警備兵の顔があつたからだ。

「リ、リン、大丈夫だよ。この人は、おれたちを案内してくれてるんだ」

「案内？ どういうことだ……？」

「まー、まー、威勢の良いねーちゃんよ」

警備兵はまずいと身を寄せて、馴れ馴れしく喋り始めた。

「ちょいとこの子に助けてもらつてな……そのお礼をさせてもらつてるんだよ」

警備兵の言葉に付け足すように、リュウは事情を説明した。

リンは銃をホルスターにしまつたが、警備兵を見る眼差しからは疑いの色が消えない。

なにせ相手は重厚なガスマスクで顔をすっぽり覆つていて、その下で何を考えているのかさっぱり分からぬからだ。

聞けば研究主任の部屋に案内してくれるとのことだが、はなはだ疑わしい。ひょっとしたらレンジャー部隊が待ち構えているかもしない。

「あんたたちのこと、知ってるぜ？ 政府に追われてんだろ。大丈夫だ、俺はあいつらの一味じゃない……」

思惑を見透かされたような物言いに、リンは啞然とした。

「どうして知ってる？ レンジャーでもないあんたが」

「おいおい、迂闊じやないのか？ そんな言い方じや、自分から相手に正解を与えてるようなもんだ……」

「あてずっぽを言つたってのかい？ ふざけやがって」

リンは銃口を突きつけたが、男は動搖する気配もなく、ちょこん

と廊下の先を指差した。

「すぐそこが研究主任の部屋なんだが……どうする？」

「信用できないからね。」このまま、おとなしくしていてもいいよ」

「はいはい……」

男はぶらりと両手を挙げて、銃に背中を押されるまま歩き出した。ぴりぴりとした不穏な空気に二一ナはすっかり怯えてしまい、リュウのスーツの袖をぎゅっと掴んでいた。

研究主任の姿は部屋になかった。

薄ひんやりとした沈黙が漂い、壁際に置かれた長いデスクには書類が散乱している。

片側には扉で隔てられた小部屋が設けられており、真っ白なタイル張りのなかに手術台が置かれている。

それが長方形の窓越しに目に入るや、二一ナは小さな悲鳴を上げてがたがたと震え始めた。

「二一ナ？ どうしたの？」

彼女の左手からぽろりとぬいぐるみが足元を転がる。リュウの見る限り、手術室のなかは空っぽで何もない。

ただ、二一ナの目には幻か何か、おぞましい光景が見えているようだった。

「や、なんですか？」

不意に声が聞こえて、リュウは振り返った。

かちやかちや、と忙しい手つきで眼鏡を持ち上げ、一人の男が室内に伸びる廊下の入り口に立っていた。

研究主任。リュウは直感的にそう思った。

「やや、その試作品は出荷したはずですが……」

事務的な態度は崩さないまま、男は言葉ながらに歩み寄つてくる。

「何か、動作不良でも……？」

「試作品？ 出荷……？」

二一ナを見る男の目は、人間に対するそれではなかつた。あたか

もディクや機械に接するような無機質な態度。年端のいかない女の子がこんなにも肩を震わせているというのに。

リュウのなかで徐々に怒りが芽生え始めた。

「や、いけませんね。換気肺がこんなに汚れてる……」

「ベンチレータ……？」リュウの存在などお構いなしに、男は図々しく二一ナの傍に立つて、ためつすがめつ身体の有様をうかがつた。そして咎めるような視線をリュウに向け、彼は語氣を強めた。

「もつと大事に使ってもらわないと」

「何を……言つているんだ？」

「君こそ、何を言つてるんです……？　これは、ここで？作られた物？じやないですか……？」

一度、二度、二一ナの頭をぽんぽんと叩きながら、彼は平板な口調で続ける。

「肺細胞をクローニングして換気肺を培養……汚染空氣を浄化する機能を最大に強化……」

「や、すべて注文通りですよ」男はクツクツと眼鏡を持ち上げる。

「何がいけないんです……？」

「？何が？……？」

鮮紅色のオーラがほとばしる。穏やかに二一ナを見守っていた瞳が血の色に染まる。

「言つておきますが、肺の交換は不可能ですよ。ここまで汚れたら、もう、回復も……」

リュウに殴られ、男の言葉は宙を舞つた。

しりもちをついた相手にリュウは容赦なく刃を突きつける。

「？作つた？だと？　二一ナは人間だ！　二一ナに何をした！　答えろ」

「何を、つて……私たちは、注文通りに改造を……」

「注文通り？　改造？　誰が、そんなことを」

男は頬を押さえながら、喉先三寸に迫る死に怯えていた。

「この子は……二一ナは、この先どうなるんだ？」

「二ーナの身体を支えながら、リングが心配げな表情で言った。

「試作品^{プロトタイプ}なので、耐久性はありません……。汚れた空気を身体に取り込んで、処理しきれなくなったら、終わり、です」

半ば泣き出すような声音で言われた言葉が、リュウのなかで途絶えることのない響きとなつて反復された。

処理しきれなくなつたら、終わり。終わり。

その呪いのような響きの循環から逃れるように、リュウは激しくかぶりを振つた。

「空気の汚れてない場所なら、二ーナは助かるのか？」

「地下の空気は悪くなる一方です……それが、生きていけるような場所は……ありません」

剣を握る手に力がみなぎる。「お前は、お前たちは……最低だ」そして刃が振り下ろされようとしたとき 二ーナがリュウの背中にぎゅっと抱きついた。

途端に鮮紅色のほどよじりが消え、リュウの心から邪気が払われゆく。ここで誰かを殺したところで何にもならない。彼女を救いたいのなら、そう。目指す場所は一つだ。

「行こう、二ーナ……」

剣を捨てて、リュウはその手に彼女の体温を掴む。優しく、放してしまつことがないように。

「君を、空へ連れて行く。君を……助ける」

リュウの胸のなかで、二ーナはゆっくりとうなづいた。

その昔、人々は空の青さとともに生きていたという。澄み渡つた美しさのなかで、自由な翼を広げていたという。

そこに行けば、きっと、二ーナの小さな羽も 。

一行が部屋を去つていったあとで、警備兵がひびく打ちのめされた様子でうなだれる男の前に立つた。

その手がおもむろにマスクへかかる。徐々に脱ぎ払われていくべールを前に、男はただ愕然としていた。

「あ、あなたは……ジェズイット、様……？」

「随分と手痛くやられちまつたな」

燃え盛る炎のよう逆立つ赤い髪、つり上がった双眸を持つ細面。それが皮肉げな笑みを口元にたたえて、男を見下ろしていた。

ジェズイット。統治者^{メソバ}の一人。

「冷やかしに来たつもりだったんだが……リュウ、か。面白そうなやつだな」

「どちらへ……？」

「追いかけるんだよ。触り損ねた？ケツ？をな」

瞬間、青年の姿がふっと虚空にかき消えた。

男はきょろきょろと辺りを見回すが、部屋にはブーツで床を叩く音がこだまするだけだった。

それが次第に遠のいていき、沈黙が重たく部屋に垂れ込めると、デスクに置かれた赤いタブレットが男の目についた。最高機関の印が刻まれた勅命書。そうだ。

男は、確かに、統治者たちの言つとおりに、ベンチレータを作り上げたのだ。

(?) 剣の絆 -前篇-

レンジャー基地、メディアカルルーム。ターゴイズのカーテンに仕切られたベッドの上に、ボッシュは上体を起こしていた。

その腹や頭、腕は包帯でぐるぐる巻きにされている。実に、実に不愉快だ。

「くそつ……くそつ……！」

ボッシュは苛立つ拳を繰り返し白いシーツに振り下ろす。自分よりもD値ではあるかに劣るサークル・レンジャーに、リュウに、負けた。

これほど屈辱的なことはない。彼の憎悪にも似た怒りはいや増すばかりで、クッシュョンやサイドボードに置かれた備品など、手当たり次第に感情を爆発させた。

「落ち着きなさい、ボッシュ」

カーテンを開けて、ゼノがその顔を見せた。

ボッシュは大きく息を喘がせる。額には破裂せんばかりの血管が幾筋も浮かび、その目は血走っていた。

「なんだよ……笑いに来たのか？ ローディに負けたこの俺を！」「ボッシュ、D値は能力の最大到達予測値です。あなたが彼に敗れたのは……？ 誤差？ の内でしじょう」

「誤差！？」ボッシュのくちびるが震えを帶び、瞳は狼狽しきりに宙を泳いだ。

「そんなもんじゃない。あれは、あれは……？ バケモノ？ だよ」「言つて、ボッシュは力なくうなだれた。

肋骨にひりひりと痛みが走る。完治にはまだ程遠いのに、無理やり身体を動かしたからだ。

「そのバケモノにやられて、全身打撲で済んだ奇跡に感謝すべきです。あなたについていった他の二名は見るも無残な……。とにかく、

あなたにはこれ以上任務を続けさせるにはいません

「バカな!? 俺は、任務に失敗したわけじゃない。こんなことで、ボツシユの名を……汚すわけにはいかないんだよ!」

「ボツシユ」ゼノは静かに、だが相手の心臓をきゅっとわし掴みにするような恐ろしい声音で、彼の耳元で淡々とささやいた。

「上層部から直々に勅命がありました……。?竜?を討て、と。バイオ公社からの報告では、つい先ほど、リュウたちと思しき三名のグループが……ラボを抜けて氷結廃道へと向かつたそうです。私はこれから数十人の上級レンジャーを組織し、彼の、リュウの討伐に向かいます」

さつと素早く踵を返したゼノの背中を、ボツシユは慌しく追つた。

「ボツシユ、あなたは」

「いや、行かせてくれ。この田で見てやるんだよ……」

にやり、と、彼は頬が裂けんばかりの、邪悪な笑みを浮かべた。

「あいつが死ぬところをな」

* * * *

リュウたち一行は、公社ラボのメンテナンスハッチから氷結廃道へと入った。

地下水脈が凍えて出来た氷の洞窟。床や天井に至るまで分厚い氷が岩肌を覆い、所々に置かれたライトの光が乱反射されて、空間全体がほの眩い銀色に輝いている。

この洞窟は地下の何ヶ所にも出入り口があり、身もすくむような寒さと遭難のリスクを恐れなければ、ショートカット（抜け道）として大いに役立つてくれる。

事実、リンも今回の任務のためにこの洞窟を使つたらしい。彼女はここでも慣れた足取りで先頭を進み、案内役を買って出てくれた。目指すはトリニティのアジト。レンジャーとしてのリュウは敵の本拠地に向かうなど猛反対だったが、そこには二ーナの病状を緩和

するための医療設備があるといつ。

彼女を想うリュウとしては願つてもない朗報だ。それに今となつてはもう、自分は半ばトリー・ティのようなもの。変に自分がレンジヤーだといつ意識に固執する必要はない、大事なのは、二ーナを助けることだ。

リュウは二ーナをおぶさり、凹凸がひどく、つるつると滑る氷の床に悪戦苦闘しながら、すいすいと進むリンの後を追つていた。

ジャケットを着ていてすら冷気が身に染みるのに、裸足の二ーナを歩かせるわけにはいかない。だが、彼女は思いのほか寒さに強く、ぬいぐるみをリュウの頭に乗せたり、ぱたぱたと足を動かしてこの状況を楽しんでいる様子だ。

道中には小さく、身体が白く透き通った神秘的な生物が、エラを張つて空中を浮遊していた。リン曰く、？クリオネラ？といつ名の生き物らしい。

二ーナは彼らと触れ合いたくてたまらない顔をしていたが、両手はあいにくウォンドとぬいぐるみで塞がつていて。その代わりとばかりリンが捕まえようとしたが、クリオネラは伸ばされた手をひらりとかわして、悠々と空中散歩を続けた。

掴み損ねたものの感触を確かめるように、リンは右手をか弱く開閉させながら、ふと口を開いた。

「リュウ。本当に？ 空？ を目指す気が？」

「なんだよ、急に……」

「それが本当に存在しているかも分からんのだ。仮にあつたとしても、あんたが考えているようなものじや」

「リン」 彼女の口をそつと覆うように、リュウは穏やかに話した。

「地下は、二ーナを救わない世界だ……。それどころか、彼女がないと、大気を満足に保つことさえ出来ない。

おれは、二ーナを助けたい。だから、ここを出で……」

リュウはゆるやかに歩を進めながら、静かに天井を仰いだ。

その如何ともしがたい堅牢な氷壁の向こうに、彼は、青く澄み渡

つた空を見ていた。

リンはこれ以上何も言及するまいといった風情で、短く息を吐き出すと、やんわりとニーナの背を打った。

「あなたは幸せ者だよ、ニーナ」

言葉の意味が分かつているのか、いないのか、ニーナはにっこりと笑つた。

彼女にとつて、リュウとリンの一人といふ時間はかけがえのないものであるらしかつた。

一行は氷床のうえに建立された鉄タイルの橋を渡り、奥の部屋にあつた梯子を使って上階についた。

景色は天然のものから人工物へと一変し、銅造りの床と壁、埃っぽい空気などは、リンとニーナに出逢つた廃棄処理施設をリュウに思わせた。

せせこましい通路を左に曲がり、突き当たりにあつた立て付けの悪い扉を、始めは手で、次に足で、最終的には身体ごとぶつかつてこじあけた。

四方に開け、天井が高い広間。コンテナや鉄筋類が無造作に置かれているところを見るに、ここは施設の集積庫であるらしい。

一同は短いスロープを下つて部屋を横断しようとしたが、広間の中央に来るや、部屋の四方にあるゲートが一斉に開き、中から物々しい装備をした連中がぞろぞろとやってきた。

レンジャー部隊。まんまと待ち伏せを食らつた。ここで情報が漏れたのかと勘ぐる暇もなく、やがて正面のゲートからよく見覚えのある顔が出てきた。

「よつ、相棒」

ボッショ。額に包帯を巻いてある以外、いつもと何ら変わらぬ高慢さで、彼はスロープのうえからこちらを見下ろしていた。

「生きていたのか、ボッショ」

「ああ？ それはこっちの台詞だ。下層区でお前を捕まえるために、

クズどもが大層バカげたことをやらかしたみたいだが、……でもよかつたよ、そこで死んでくれなくて」

「お前の死を目の前で眺めるんだからな」 そう得意げに言葉を付け足すのと同時に、かつかつかつ……静かに足音を立てて、ゼノが彼の後ろからやつてきた。

「リュウ＝1／8192……」

彼女は足元を向いて歩みながら、やがてその鋭い眼差しをリュウに向けた。

「お前は、バイオ公社の任務において、特殊な実験体とあやまつて接触……その結果、精神に重大なダメージを負つている」

「ゼノ隊長……？ 何を？」

彼の言葉に答えず、ゼノは一の句を継ぐ。

「反逆者と行動をともにしたり、保護対象に過剰な思い入れを持つたり……全てのお前の行動は、精神的混乱の結果だ」

リュウはかぶりを振る。「違う、おれは、」

「おとなしく、我々の保護を受けるんだ、リュウ……」

「違う」

「今なら、まだ間に合つ……」

職業的だった彼女の口調は、次第に懇願するような響きに変わつていた。

彼女は自分に戻つてきてもらいたいのだろう、それは胸が痛むほどよく分かる。

しかし、この意思是、ニーナを助けたいと思つ氣持ちは、偽りなく自分のものだ。精神的混乱などでは決してない。

リュウは静かに口を開く。叶つなら、この想いがゼノに届くように。

「行かせては……もらえませんか……？」

「はあ？」 ボッシュが横槍を入れた。

「バカかお前。機密を持って行かすと思つのかよ……どっちにしても、お前はもうすぐ死、」

「リュウ、残念だが」ゼノが鋭い声でボッシュを制す。

「それは出来ないんだ……どうしても行くというのなら、仕方がない」

ゼノはリュウたちを包囲するレンジャー部隊に向けて、視線で合図した。

レンジャーたちは各自武器を構え、来る鬪志の放出に向けて首を、拳を鳴らした。

「残念だよ、リュウ」

相手はざつと数えただけで十四、五人。彼らの先頭部隊はライオット・シールドを構えてがつちりと脇を固め、三方向からじりじりと距離を詰めてゆく。

リュウたちは完全に袋の鼠ねずみだった。しかし、?バケモノ?の噂が広まっているせいなのか、レンジャーたちにはどこか怖氣づいた様子がある。

だから思い切つた行動に出ないのだ。リュウは何事か二ーナとリンクに耳打ちし、三人はそれぞれの方向を見据えて背中合わせに武器を構える。

第一に行動に出たのは二ーナだつた。ウォンドを旋回させながら横薙ぐとともに、右から左へと小気味よく巻き起こる爆発の連鎖が前方に並ぶレンジャーたちを蹴散らした。

それが戦火の号砲とばかり、リュウとリンクが同時に駆け出した。敵も黙つてはいない。

「う、撃てえ！」

リュウに放たれた銃弾は、しかし、鮮紅色のオーラを放ちながら爆発的加速で飛び出した彼を捉えることはなかつた。

ここで優先すべき撃破対象は銃や魔法杖を持った敵。リュウはライオット・シールドによる防衛網を力ずくで突破し、後衛部隊に斬つてかかつた。

一人、二人、血しぶきが飛ぶ。三人、四人、刃が鋭く閃き渡る。何発かの銃弾が頬をかすめ、あるいは肩を貫いていった。パダム

による爆撃、パルによる電流も同時に巻き起^ひこる。

攻撃はリュウ一人に集中していた。しかし、これでいい。

リュウは攻撃を受けるたびに獣にも似た雄叫^びびを上げて、鮮紅色の軌跡を縦横無尽に描いていった。

一方、リンは二^二ナとともに大型コンテナの裏に身を潜めていた。二^二ナが魔法を発動したのと同時に、リンは彼女をかっさらうかのごとく胸に抱えて素早く退避。戦闘はリュウが一手に引き受けるという寸法だつた。

これはリュウの提案だつたのだが、リンは何となくいたたまれない気持ちになる。確かにこちらの装備はハンドガン一丁で、リュウのような怪物じみた力も自分にはない。

あの包囲網を突破するには、リュウの得体の知れない力を頼りにするほかなかつたのだ。ぎりつ、とリンは奥歯をかむ。

やがて銃声の驟雨^{しゅうう}が止み、場が完全に沈黙すると、二^二ナが不^ふ安^{あん}にひょこつと外を覗いた。

硝煙が薄く立ちこめる中で、はあ、はあ、と荒い息遣いがこだましている。リュウが地面に剣をついてひざまづいていた。床やコンテナのうえ、レンジャーがあちらこちらに横たわり、血しぶきが辺り一面に散つている。

二^二ナがぱたぱたと駆け出していく、リンも遅い足取りでリュウのところへ向かおうとしたが、その田は殺氣を捉える。

リュウの背後、少し離れたところで男がむくりと腰を上げ、今まさに手に持つた魔法杖を振り下ろさんとしている。

やらせるか！ リンはハンドガンを抜くや一^一発、二^二発、発砲しづまに男との距離を詰めてゆく。

銃弾は男の腹や腕を貫いたはずだが、相手はよろめきつつも倒れない。そして男はふらりとターゲットをリンに変え、最後の力を振り絞るように魔法を発動させた。

氷柱の波が轟音を立てて迫る。レイギル。レイガの一段階上位の

魔法だ。

回避も間に合わず、リンは苦し紛れに腕を広げたが、爆発が起きた。二一ナのパダメムだ。

それが何連発と起こって氷柱を碎き、ビームでも無防備な敵の姿が真正面に浮かぶ。あとは冷静にトリガーを引くだけだつた。額を撃ち貫かれ、男は背中からぱたりと大の字に倒れ込む。決着だ。

リンは銃をホルスターにしまいつつ、リュウの下へ向かつた。

「すまない、リン、二一ナ……」

彼の震える声とそこかしこが破れたジャケットが、ダメージの深刻さを物語つていた。

「あなたの負担に比べたら、たいしたことじやないよ。それより

」
リンはキッとゼノをにらみつけた。彼女は戦闘が始まる前と同じ場所に立ち、その横ではボッシュが悲嘆するようにかぶりを振つてゐる。未だ信じられないのだろう、その目に焼きついているはずの光景が、リュウが生きていることが。

現状、敵になりそうなのはあの女だけだ。リンはそう見越して、最後の敵を討つべく静かに歩き出しが、リュウがバツと左腕を広げて行く手を阻んだ。

「大丈夫だ。あの人とは、おれがやる……」

「リュウ？ でも、その傷じや」

「戦えるよ。おれは？バケモノ？なんだ」

リュウは自嘲気味に言いながら、よろよろと立ち上がつた。

ついで剣を振るい、切つ先をゼノに向ける。彼女は初めからこうなることが分かつていていたかのように、眼鏡のテンプルを小さく持ち上げただけで、動搖した様子はなかつた。

「ドラゴンの力……か」

言つて、ゼノは腰に交差させたマウントしていた一対の剣を素早く抜いた。

「隊長、おれは、おれたちは……行きます」

「リュウ、それはお前の意志ではない。お前にリンクした実験体の意志だ」

「違う。これは、おれの、」

「リュウ……残念だが、ここまでだ」

ゼノの瞳が鮮明な霸気を帯び、剣を十字に構える。リュウの身体からはオーラが消えていたが、戦意をなくしているわけではない。

ゼノ（師匠）を倒して、証明して見せるんだ。自分の意志を。

(?) 剣の絆 -後篇-

長い沈黙の後で、先陣を切ったのはリュウ　いや、ほとんどの時に飛び出した。

硬質な金属音が火花とともに飛び散る。リュウとゼノはいつ首が宙を舞うかすれすれの斬り合いを演じ、ときには飛びのき、間合いをつめ、果てることなく刃を交錯させた。

そのなかで形勢は徐々にゼノに傾きつつある。一振りの剣から繰り出される攻撃は終わりがなく、何度も受け止め、捌いても、次から次へと息をつく間もない。

止むことのない斬撃の連鎖。リュウは防戦一方となり、じりじりと後退させられていった。

ゼノが腹めがけて突きを放つ。リュウは寸でのところで身をよじり、伸び切った腕をがつしりと脇に挟んだ。

瞬時に剣を右手から左手に持ち替え、袈裟がけにゼノの肩口を斬りつける。相手の反撃もまたこちらの肩を斬り裂いた。

両者の血しづきが舞い、ひとまず互いに距離を取る。ゼノは呼吸を整え、リュウは剣をまた利き手に持ち替える。あのとき剣を移動させたのは、ゼノの腕をホールドした利き手側からは満足な攻撃が出来ないと判断したためだ。

リュウは本気でゼノを殺しにかかっている。それは相手も同じ。この戦いに生ぬるい情けや感情などは無用なのだと、二人は理解していた。

「どうした、リュウ。さっきまでの動きが嘘のようだぞ」眼鏡の位置を直しつつ、ゼノは挑発するよつに言った。

リュウは懐かしさを覚える。いつの日だか、いつして、ゼノと剣の稽古に励んだ。

もちろん、真剣ではなくて、命を取り合つたためではなくて。ひたすら、明日を生きるために。

いや、いけない。思い出してはだめだ。リュウは雑念を振り払おうときつとまぶたを閉じ、誓いを立てるように十字剣を胸に構えた。次にまぶたが開いたとき、瞳はすでにいつもの色を失っていた。毒々しいとさえ言える赤が渦を巻き、鮮紅色の粒子が燃え爆ぜる焰のよう立ち昇つてゆく。

覚悟は決まった。

「 行きます」

残像をその場に残し、リュウの実体は半円を描きながらゼノに向かっていた。

彼女は寸でのところで殺氣を感じ取る。とつたに剣を構えたところに斬撃が飛び、これはどうやら防いだが、続いて背後にただならぬ気配。

瞬間に飛びのいたものの、彼女の頬にはぱつくりと裂傷が出来ていた。リュウの姿はまた見えず、ただただ大気を引き裂くような不気味な音だけがこだましている。

右か？ 頭上か？ いや

「 ここだ！」

ゼノの剣が背後から飛んできた斬撃を受け止める。彼女は素早く胴体をよじつて右の剣で斬りにかかった。

次に左で、次に右で、完全に相手の姿を捉えた彼女の剣は、怒涛の連撃を見せた。

リュウの体勢がわずかに傾ぐ。彼女は手元で双剣を揃え、ありつたけの力を込めて突きを放つた。

それはオーラの防壁を貫いてリュウの腹に到達。肉を捉えた感触は薄かつたものの、リュウははるか後方に吹き飛ばされた。

なおもゼノの猛追は続く。力強く疾駆しながら両腕を交差させ、刃が薄紫色の光を帯びてゆく。そして力がみなぎったところで、ゼノは斜め十文字のかまいたちを放つた。

飛ぶ斬撃。リュウはコンテナにしたたか背中をぶつけ、未だ体勢が整っていないところだった。

直撃。コンテナはスパッと四つに分断されて鉄片を散らしつつ宙を舞い、粉塵が立ち込める。そのなかからやがて赤い弾丸が飛び出してきた。

リュウは裂ぱくを上げながらゼノへと直進し、三振りの剣が激しく衝突した。瞬間に鎧を削る力の拮抗があつたのち、両者は弾かれたビー玉のように飛んでいった。

もはや人間同士の戦いとは思えない光景に、リンとニーナ、そしてボッシュはただ唖然とするばかりだった。一方は祈るような思いで、一方は期待と焦燥を募らせながら。

やがて、広間の中央に姿を見せたのはリュウだった。半歩遅れるようにして、ゼノもよろめきながらも戦いの舞台に立つ。

眼鏡のレンズは粉々に砕けて、もうとっくに役割を果たしていいが、ゼノの癖が治ることはなかつた。

彼女はいつものように眼鏡を持ち上げると、落ち着き拵つた声で言つた。

「その力……やはり、危険。ここで完全に止めねば」

砕けたレンズの欠片がぱらりと落ち、ゼノは双剣を逆手に持つた。

それに呼応するかのように、リュウもまた剣を逆手に構える。

絶命剣。一人が持ちうる最高の剣技であり、また戦いの最終局面に打たれるべき終止符。

師として、ゼノは。子として、リュウは。この戦いを終わらせようとしていた。

「行くぞ、リュウ」

彼女の身体が蝶のようなたおやかさで飛翔する。リュウは振り上げた剣の先に力を収束させる。

爆裂。鮮紅色と紫の稻妻が交じり、広がり、止め処ない輝きの奔流となつて大気をつんざく。

輝きは次第に失せていく、底抜けの沈黙が土煙とともに舞い戻つてきた。

立つていたのは

* * * *

大勢のレンジャー候補生が肩を並べて帰ったあと、一人の少年がぽつんとミーティングルームに残っていた。

少年はしおぼくれた様子で立っている。講習は終わりだ、彼らと遊びに行かないのかと、ゼノは声をかけた。

「みんな……ぼくのことを、ローディだつて、弱虫だつて……」

少年の目からすうつと一筋の涙が流れ、やがてどつと泣き出した。

「よしよし、泣くな。私がお前に剣の稽古をつけてやる」

ゼノは彼の頭を優しく撫でた。

少年の涙は次第に収まり、彼は上目遣いに問いかける。

「ぼくも、強くなれるかなあ……？」

「ああ、なれるさ。D値なんて関係ない。お前の努力次第だ」

少年の顔に笑みが弾ける。ゼノは彼の名前を呼ばうとして、しかし、とつさには出てこなかつた。

今日が彼の属する第五十六期レンジャー候補生たちとの初めての顔合わせだつたからだ。

「リュウ、です。リュウ＝1／8192

「私はゼノだ。改めて」

ゼノは少年の、幼く、無垢な手を取つた。

「よろしくな

* * * *

カラソ、とむなしい響きを立てて、ボッシュの前に一振りの剣が転がってきた。ゴクリと唾を呑んだあと、彼は負け犬さながら逃げ出した。

リンはリュウの下へ歩み寄らうとしたが、その背中が震え、大きな悲しみを宿していることに気付いた。彼は静かに涙しているのだ

ひとつ、リンは直感した。

「『』を抜ければ、工業区に辿りれる……」 そうしてリンが話しかけるには、長い沈黙を要した。

リュウは依然として背中を向けたまま。今にも断崖から飛び降りようとしているかのような、絶望に打ちひしがれた佇まい。

もうどうにも見ていられなくなつて、二一ナは彼の胸に顔をうずめた。力いっぱいに、ぎゅうっと、彼の心が消えてしまわなによつに。

「そうだ。おれは、決めた……。君を空へ連れてゆく。後悔はないんだ」

リュウは自分に言い聞かせるようにならやこして、おぼつかない足取りで歩き出した。

スロープのうえには刀身が紫色がかつた剣が一振り、横様に転がつていた。

ゼノの愛用していた紫音剣。リュウは彼女の眠れるまぶたにそつと触れるように、剣を手に取つた。

これまでの激闘で自分の剣はボロボロになつていて、同じ十字型と言えど、切つ先の長さや鍔の形状は微妙に違う。

しかし、紫音剣はリュウの鞘にぴつたりと収まった。そこがいつもの場所とでも言つみつて、あるいは、ゼノが彼とともにいることを望んだかのようだ。

リュウはキッと顔を上げて涙を払い、力強く前を見据えた。行こう、二一ナ。空へ。

(?) ネガティブ・前篇・

ほの赤く発光する蠅燭の群れ。

数あるうちの一本から、いま、ふつと火が搔き消えた。

「ゼノによる上級レンジャーの一団が、敗走した……」

コツリ、と床の大理石に硬質な足音を響かせ、エリュオンは言った。

「やはり……人の手にはあまる、と?」男女どちらか判然としない、幼い声が問いかける。

その横で黒い眼帯をした男 デモネドは、やるせなさそうにかぶりを振っていた。

「その時が来た、ということか……」

「いや、」エリュオンが一の句を継ぐ。

「?ネガティブ?を使う」

「ネガティブ? 他ならぬ、?人の暗部? ではありませんか!」

清らかな女性の声が、勢いを持つた水流のように場を打つた。ついでデモネドが猛然と立ち上がる。叩かれた机と、倒れた椅子、聖堂にはしばし残響がこだました。

「分からん……なぜ、こんな回りくどい手を!?」

エリュオンはうつむくばかりだった。

「すでに動き始めた流れのなかで……人は、あまりにも無力だ」

「何が言いたい?」

「だが、それは我々とて同じだ……デモネド」

およそ人間らしくない、彼の赤い瞳が眼光鋭く冴え渡った。

* * *

エリュオンは赤絨毯の敷かれた列柱廊を歩いていた。つと、背後に何者かの気配を感じる。まるで廊下に伸びる白らの

影に追われているかのような感覚。

しかし、振り返るなり辺りを見回すなり、エリュオンに「靈を探ろうとする様子はなかつた。氣配の正体が何か、彼はとっくに分かっていたからだ。

「会議の場にいなかつたが……どこへ？」

一拍、間を挟み、答えが返ってきた。

「見てきた。俺たちの敵が、どんなやつかをな

ジェズイット。彼はあたかも初めからそこにいたというように、アリジンに背もたれて腕を組んでいる。

「ゼノたちのレンジャー部隊はやられちまつた……。あのガキ、竜^{ラゴン}の力がある程度コントロール出来るらしい。

意識的なレベルかは分からないが、暴走することはなかつた。やつのD値、1／8192じゃ、適格者にはなり得ないはずなんだがな

「それで、私に何を問いたい？」

「別に？ ただ、あんたは楽しみにしているみたいだからな。あのガキがここへやつてくるのを」

「クピトに勅命書を持たせて、現在ネガティブに対象の殲滅を命じるところだ……。彼の命運も尽^{アツ}きるだろ？」

「それならそれで、」ジェズイットはおもむろに歩き出す。

「あいつはそこまでの器だつたってことだ。それと……隠し事はあまりするもんじゃないぜ、？ オリジン（始原の唯人）？」

振り返りざま、彼はシニカルな笑みを浮かべる。

一方、エリュオンの表情は固く閉ざされたままだ。

お手上げだな、というように肩をすくめると、ジェズイットの姿は暗闇に紛れて消えた。

『何のつもりだ、オリジン』

闇の底で轟くよつた残忍な声が、つと彼の頭のなかでよみがえつた。

『昔を懐かしみに来たか？ 失せろ、オリジン。戯れに費いる時間などない』

彼は長らくぶりの再会を喜びはしなかつた。牙を剥き、朽ちた翼を躍動させて怒りを露わにしていた。

どくん、と鋭い痛みが走る。エリュオンは心臓の辺りを押さえたが、すぐに痛みは遠のいていき、また落ち着いた足取りで歩みだした。

『時間がないのは同じだ、アジーン』

そう、かつての？戦友？との対話を思い出しながら。

* * * *

リュウたち一行は工業区を進んでいた。

工員の姿はなく、辺りを領する闇のなかで何かが蠢く気配と、取り留めもない静寂が広がっている。照明は所々生きているが、数が少なく、この不気味な空気を払うには頼りない。

クレーン装置や何基ものベルトコンベアが配備された作業部屋、通りがけに見てきたそれらの設備から察するに、ここは製鉄工場であるらしい。だが、最下層区にあつた施設と同様放置、あるいは一時的に稼動が停止しているようだ。

通路のあちらこちらにディスクの排泄物が散らされ、アブラクイがのさばつているところを見ると前者だろう。前回の施設よりもタチが悪いのは、四足歩行型巡回ロボットであるチャペックが警備の目を光らせていることだ。

単純に考えて彼らを稼動させたまま工場を閉鎖させたのだろうが、ロボットは命令に忠実だ。施設を守る意義を失つてなお、背中に一門のガトリング砲を備え、触手のように伸びた丸い瞳からサーチ・ライトを放射し侵入者はいないかと気張っている。

リュウたちはレンジャー戦の傷が癒えぬ身体で、彼らの動向に注意を配らなければならなかつた。発見されたところで倒すのは難しいことではないが、余計な戦闘は避けるにこしたことはない。

暗闇に同化してサーチ・ライトの警戒網を逃れつつ、一行はよう

やく工業区の中間地点までたどり着いた。横幅一人分の非常通路、チャペックの監視もここまで届かない。

辛うじて息を喘がせるリュウ、二一ナを見て、リンは休憩を取らうと提案した。うなづく間もなく、リュウはどさりと床に腰を下ろした。

「道があつていいかどうか、私は先を見てくるよ」

言って、リンは足早に通路を抜けた。

辺りに人気がないのを確認すると、彼女はポーチから通信機を取り出した。

しばらくの呼び出し音のあと、低くしわがれた男の声が耳元に聞こえる。

メベト＝1／4。トリー＝ティのリーダーだ。

「はい……レンジャーの防衛線がありましたか、何とか」

リンは努めて声を殺し、Ｌ字型に曲がった通路の向こうをしきりに伺つた。この会話をリュウと二一ナに聞かれてはならない。

「先刻、下層区街から報告したとおり、あの少年、リュウは……？竜？の力を持つています。本人が自覚しているのかは分かりませんが、二一ナを助けるために？空？を目指す、と……」

リンの顔が次第に不穏の色を帯びる。「リュウを組織に、ですか……。現状、確かに彼は政府に楯突く形となつていますが、それはあくまで自分の意志を……」

「はい、はい……。見込みは薄いかと思われますが、了解しました」

通話はそこで途切れた。指令は引き続き、対象とリュウをアジトに連れて行くこと。通信機をポーチにしまう折、紙幣の束が目に付いた。

二一ナの靴を買いに行くからと、リュウに頼んでもらつたものだ。それはただの口実で、自分は組織に連絡を入れていたのだが　もう少し時間があれば、本当に靴を買ってやるつもりだった。

二人の下へ戻ってきたリンだったが、二一ナの笑顔を見ると後ろめたい気持ちになる。いつもと何ら変わりないはずなのに、リュウ

の眼差しが疑いをはらんでいるふうに感じられた。

「どうだつた？ 道、あつてた？」

「氣のせいだつた。リュウは疑つぢにうか、本当に自分のことを作間だと思つてゐる。

リンは普段のように振舞おつとしたが、笑顔が少しけじむくなつた。

* * * *

鉄ぐずやスクラップが積まれた集積場。

鋸び鉄を含んだ汚らわしい空氣、弱々しく明滅を繰り返す白熱灯。この世の外道たちがのさばるに相応しい闇が、そこにあつた。

「ほお、最高統治者の御印……」

赤いタブレットに目を通しながら、男が言つ。

その声は不自然に濁つた響きを持ち、まるで獸が無理をして人語を喋つているかのようだつた。

「？勅命？……といふことですか？」

細やかな少女の輪郭を持つた子供 クピトは、淡々と話しあじめた。

「そうです。あなたたちには、あなたたちに見合つたことを……して頂きます」

くく、と男が不気味に笑う。？あなたたちに見合つた？こと。

クピトと対する男は、闇に見開く瞳がペイントされた趣味の悪いマスクで目と鼻を覆い、口はハオチーのそのようにすり鉢状となつてゐる。

レンジャーが身につけるようなジャケット、ズボンに包まれて肉体こそ見えていないが、男は人間と呼ぶにはあまりに異質な姿を持つていた。

その後ろに並ぶ二名も一切の人間らしさを持ち合わせていない。

一人は腕と足のバランスが著しく崩壊した巨人で、もう一人は鉄球

から手足と頭が生えたような肥満体。

彼ら三人を前にクピトは慄くどころか、その眼差しは一抹の哀れみを含んでいた。

「結構、たいへん結構です……。とても、いいですよ。世界を統べるオリジンが私たちを必要とし、私たちに好きにしようとおっしゃる……くく、とてもいい……」

ネガティブ。人ならざる彼らは、ただただ、愉快そうに笑っていた。

休憩地点を出発して三十分ほどは経過しただらうか。本来なら中層区に到達してもおかしくはないが、チャペックの目を避けるために遠回りを余儀なくされている。

薄暗い通路を進む一行に口数は少ない。二ーナは息を喘がせ、しきりに立ち止まつては辛そうに顔をしかめる。そのか細い足は悲鳴を上げていた。

しかし、彼女はリュウとリンに置いて行かれまいとして、距離を開いては一人の後をペタペタと追つた。

いくら怪物じみた再生能力があるとはいえ、戦闘に次ぐ戦闘、どこの角を曲がつても尽きることのない窮屈で暗い空間はリュウの心身を確實に磨耗させていた。先頭を真っ先に進むリンも、疲れを見せまいとしているものの、その額には玉のような汗が浮かんでいる。一行の集中力はかなり散漫な状態にあった。

だから異変に気付くのがいさか遅れたのかもしれない。第一工業区に足を踏み入れてからというもの、チャペックの姿が見当たらぬ。発見したとしても、それは大破しているかスクランブル同然の有様だった。

施設の老朽化が原因だろう。しかし、それではこれまでの道程にいたチャペックが疲れも知らず働き続けていることに説明がつかない。ただ、今の一には勤勉なロボットたちの死について考える余裕はないのだった。

漠然とながらもリュウが危機感めいた不穏さを察知したのは、四角くて広い作業部屋に入った時だつた。これは……血の臭い？ きやつ、と後ろで二ーナの声が聞こえた。壁面に取り付けられた照明が届かないところで人が倒れている。

更に辺りをうかがつてみると、ベルトコンベアにもたれかかる形で一人、操縦盤が設けられた司令室らしき小部屋の中で一人、衣服

と床を血に染めて事切れている。

剣やシールドなどの装備を見るに彼らは自分たちを追つてきたレンジャーだ。それがすでに何者かの手によつて殺害されているという事実に、一行は首を傾げた。

小部屋から出ると、リュウは視界の隅に何かを見つけた。この時間すら凪いでいるような静寂のなかで、そのシルエットは人の形をし、呼吸に合わせて右に左に微動しているかに見える。

リュウは剣の柄を握りながら、部屋の中央部に至る短い階段を下りていった。近づけば近づくほどに、不気味な影は次第に輪郭を帶びてリュウたちの前に姿を現していく。

二一ナはとつさに顔をそむけた。

「はじめまして、リュウさん……レンジャーたちは邪魔なので、ふふ……私が片付けておきましたよ……」

リュウは始め、自分は一体何を目の当たりにしているのだろうと思つた。人間？ デイク？ いや、そんな生易しいものじゃない。強いて言うなら、この世の暗部だ。見てはならないもの、触れてはならないもの、悪魔死神の類。それが目の前でノイズだらけのしゃがれた声で喋り、すり鉢状に細かく生え揃つた牙が虫のようにぞろぞろと蠢いた。

口からうえは前面に赤い蛍光色で一つ目が描かれた円形のマスクですっぽり覆われ、禿げ上がつた頭には所々釘のようなものが突き刺さつている。かすかに見える男の肌はくすんだ灰色だ。

そんな人ならざる異形の姿が傍らにある大型機械に付けられたランプの光を受け、男に備わつた異質、不気味さを何倍にも助長させている。リュウとリンは武器を構えたまま半ば硬直していた。

男は両手に持つたダガー・ナイフを勢いよく振るう。その切つ先から飛び散つた赤い零が男の後ろで倒れているレンジャーの血液であることは明白だった。

「それじゃあ、始めましょうか 」

言つや、男はリュウに切つてかかつた。それは体内に骨があるの

かどうか疑問に感じられるほど常軌を逸した動作ではあつたが、見
た目に反して振り下ろしは早い。

リュウはとつさに飛びのいて事なきを得る。同時に、彼の背後からリンが駆け出した。弾丸が後ろから男の左肩を貫き、鮮血が虚空を舞つた。

「い……痛い……いい……いい……いい……いい……！」

リュウたちは思わず両耳を塞ぐ。男の金切り声は痛々しいほど哀れな響きを持っていたが、同時に『もつといたぶつてください』とももいうような余裕も感じられる。

事実、男はかすかに笑っているのだ。リュウは直覚する。『いつは？狂つて？いる、と。』

男の禍々しさに気圧されてか、二ーナはぬいぐるみをきつく抱きしめたまま立ちすくんでいた。この戦闘はリンと二人でどうにかするしかないだろう。リュウは袈裟懸けに剣を振るつた。

しかし、男の軟体生物のような奇怪な動きに翻弄され、なかなか的を射ることが出来ない。それはリンも同じだつた。

ときには常人には到底無理な角度まで身体を丸めたり、機械やパイプ管を足場に宙を飛びまわつたり、そして回避にばかり専念しているかと思えば、あらぬ所から攻撃が飛んでくる。

まったく予測がつかない。リュウたちの戦意はことじとく空回りし、一方で男の攻撃は徐々に速度と重みを増してくる。これまでにはウォーミング・アップだつたというわけだ。

「一人がかりでこの程度とは……拍子抜けですかね？」

男は足にバネでも仕込んでいるかのような跳躍で天井すれすれまで飛び上ると、下に向けて両手を広げた。

リュウとリンの間に紫がかつた黒い球が出現し、急速に膨張するや盛大に弾けた。属性不明の魔法、ブンパ。

とつさに防御の構えを取つたものの直撃を被つた二人はそれぞれ壁に激突。舞台には男と二ーナが残された。

「逃げなくていいんですか……？」それとも怖くて動けないんです

か……？」

不自然に首をぐらつかせながら、男はじりじりと二ーナに迫る。死を目前にしながら彼女は立ち尽くしたままだ。

「ふふ……今、ラクにしてあげましょうねい！」

男は刃を振り上げた　が、刹那、男の足元で赤い輝きが放たれた。

二ーナはただ怯えていたわけではなかつた。リュウとリンが戦っている間、彼女はいくつかのポイントに？魔法陣？を描いておいた。あとは魔法陣のうえに男を誘い込む。そう、見るからに弱々しい女の子を演じて。

魔法陣から爆発的な勢いで生まれた炎はたちまち男を火達磨にし、皮膚の焦げる匂い、聞くにも耐えないうめき声が撒き散らされた。低級魔法陣の一つ、グラナパダム。

二ーナの行動にはリュウたち自身も驚かされた。そして窮地から一転、絶好の好機。リュウとリンは『行くぞ』と視線で言葉を交わし、男に向かつて一直線に走り出した。

「乱れ舞え！」

リンは新たにカートリッジ・インした弾丸をありつたけ男に撃ち込む。

弾丸が身体を貫くたびに男の右手が、左足が、上半身がうねるよう躍動し、さながら破滅の輪舞曲でも踊っているかのような有様だった。

そして最後はリュウの横一閃。男はびたりと踊るのを止めて、その場に倒れこんだ。決着。

リュウは剣を鞘に収めた後、真っ先に二ーナの元へ向かった。頭を撫でられると、彼女は満足そうに笑つた。一人の役に立てたことが嬉しいのだ。

しかし、リュウには気がかりなことがあつた。今しがた討ち倒した男の正体についてだ。

「なぜ、こいつはレンジャーたちを……政府の戦闘員じゃないのか

？」

薄い白煙を上げ、黒こげとなつた男の亡骸を遠巻きに眺めながら、リンは険しい面持ちで答えた。

「非合法活動を専門とする？ ネガティブ？ と呼ばれる部隊があると聞いたことがあるが……」 それが？

「ネガティブ？ なんで、そんなやつが？」

「あんたや二ーナは、いよいよ政府やつらにとつて？ あつてはならない？ ものになつたみたいだね……」

リュウは改めて自分の置かれた状況を知つた。上級レンジジャーだけでなく、政府は人外の者まで使って自分たちの殲滅に乗り出したのだ。

ネガティブが部隊だというのなら、他にも敵が襲つてくるかもしない。名前も定かではないが、あの男のように寢悪で？ 狂つた？ 連中が。

一行は足早に部屋を後にした。激しい戦闘の余韻すら嘘になつた静けさのなかで、男の手足はあらぬ方向に曲がつてしまつて、身体の至るところに風穴、ついで胸には肩にかけて大きな刀傷がつけられていた。

しかし、一行が部屋を去つてからまもなく 男の首が不意に、ぐるりと、勢いよく天井を向いた。

「フハハ……強い、強いですねい……」

(?) 狂おしい心・前篇・

ボッショウはバイオ公社の通路を歩いていた。

その額に巻かれた包帯や頬につけられた刀傷が憎くてたまらない
というように、怒りに満ち満ちた表情だ。

「よつ、ボッショウ」

研究室の前ではボッショウと同年代と思しき若いレンジャーが立つ
ていた。

ひょきんというよりは皮肉っぽい表情で、氣をくどいよりは
厚かましい態度で、彼はへらへら笑いながらボッショウに近づいた。
「聞いたぜ、ゼノ隊は全滅だつてな……オレはこいつらの警備に回さ
れて命拾いしたぜ」

ボッショウは少年を一瞥、まるで相手にする気はないといつよつ
歩き出した。

「待てよ、腰抜け！」

ぴたり、とボッショウの足が止まる。

「お前、一人だけ逃げてきたんだつてな。腰抜け！」

少年の手がそっと肩に下りる。「お気の毒にな、エリート様。今
回のは取り返しのつかない失態だ」

腰抜け？ 失態？ ボッショウの額に浮かんだ血管がぴくりと動く。
両拳が怒りに震える。

彼は思わず大声を出した。

「逃げた……？ 僕が？ 剣聖に連なるこのボッショウが！？」

「そう、お前は負けたんだ。？リュウ？にな……」

少年の口元が卑しい笑みを作った。

笑われている。見下されている。ここには少年、彼一人しかいな
いのに、ボッショウは何百という人間に白眼視されているような心地
になつた。

彼らはありとあらゆる罵詈雑言をボッショウに浴びせた。負け犬敗

者二セエリート様。それら激しく交錯する大音声で頭がいつぱいになるとボツシユのなかで何かが壊れた。

「ボ、ボツシユ、何を……つ！？」

少年の首からはおびただしい量の血が噴き出している。

ボツシユの右手にはレイピア。その切つ先からは赤い零が滴り落ちていた。

「そうだよ……リュウだ……」

彼の瞳はほとんど焦点が合つておらず、言葉はほとんど「わ」とのようだった。

「俺、あいつを殺さなきや……」

* * * *

リュウたち一行はL字型の狭い通路を一列になつて進んでいた。先頭はリン、次にリュウ。二人の話題はもっぱら先ほどの男のことで、二ーナは輪に入れずにふてくれされたような顔をしていた。「トリー・ティの方でもネガティヴ（やつら）のことはあまり分かっていない……さつきも言ったように、非合法な活動を専門とする政府の暗部だという以外はな」

「同じ政府の人間でもあいつはレンジャーを殺してたし、それに人間の姿をしてなかつた……あれはなんだ？」

「恐らくはバイオ公社で肉体の強化改造を受けたんだろう。ディクの生体工学を応用した改造手術さ、それで超人的な力を得ることが出来る。人間の面影をなくしちまうぐらいにね」

リュウは得体の知れない歯痒さを感じた。人間であることを放棄してまで、彼らは何が欲しいというのだろう。強さ？ 尽きることのない命？

分からなかつた。ただ、言えることは、もし強化改造が彼らの意志ではなくて、巨大な権力の下に無理やり実行されたことだとしたら、リュウは政府を、世界を許すことが出来ない。二ーナの時と

同じように。

「うー！ うー！」

通路を出たところで、二一ナが声を上げた。リュウの袖を引っ張つて何事か訴えようとしている。

大型機械だろうか、部屋の隅に丸っこくて歪なシルエットがあつた。近くの照明が切れているために一体何なのか判然としないが、それは仰々しい足音を立てながら向こうから正体を現した。

ディク。それもリュウがバイオ公社で倒したアーム・ストロングと似たタイプで、先端に三つ指のアームがついた砲塔のような腕に、胸の中央に埋め込まれたコア。顔半分を覆つた鉄兜からはそり立つ角が一本生えている。

でっぷりとした巨腹を支える足は短く、がに股氣味に開いている滑稽さは相変わらずだが、いましがた出てきた通路の入り口をすっぽり塞いでしまうほどの大きさにはかなりの威圧感がある。

リュウたちは後ずさりながらも武器を手に取つたが、不意に背後からうめき声が聞こえた。暗闇に溶け込むようにして、身の丈一メートルを超えるサイクロプス型のディクが長い腕を垂らして立つていた。

「挟み撃ちか……」

リンは舌打ちした。

壁伝いに張り立つように建立された橋梁型通路はせいぜいが横幅二人分、半機械の怪物が出入り口を塞ぎ、行く手には力と素早さに自信があると見える巨人。

絶体絶命というには充分すぎる状況だ。リンと二一ナは怪物を、リュウは巨人を、それぞれ対峙し、あとは戦いの火蓋が切つて落とされるのを静かに待つていた。

「二一ナを頼んだぞ、リン！」

先手を打つたのはリュウ。双眸に燃え盛る炎を宿し、真紅のオーラをまとつて弾丸のように突進する。初めから全力で勝負をつける気だ。

巨人は両腕を斜め十字に構えてリュウの体当たりを受け、足場の鉄条網に激しい金属音を立てながら突き当たりの壁まで後退していった。

リュウは決着をつけようと巨人の顔めがけて突きを繰り出そうとしたが、急に右腕が動かなくなつた。巨人の手に鷲掴みにされたのだ。

まもなくリュウのみぞおちに内臓が弾けんばかりの衝撃が走つた。巨人の拳打をもろに浴びた。強烈な突き上げにリュウの足は地面から離れ、巨人は続けざまに次の攻撃に移る。

それは至つて動物的で、しかし最も威力のある攻撃だった。リュウの首を左手に掴んで力こなしに壁に叩きつけ、対象が力を失つたあとは無造作に投げ捨てた。

リュウはしばし前後不覚に陥つていたが、細い鉄棒で出来た橋の欄干を掴んで懸命に立ち上がろうとした。オーラはすでに焼き消えている。かすれた視界のなかで、はるか上方からこちらを見下ろす冷たい眼差しがあつた。

そのうち爆発するんじやないかと思えるほどの痛みが全身を蝕んでいるが、何せこつちは？バケモノ？だ。悲鳴を上げていた内蔵はやがて静まり、意識もはつきりしてきた。まだ戦える。

リュウはキッと巨人をねめつけて、いざ斬りかかろうと構えを取つた。が、おかしい、視界が急にぐらついた。足にも腕にも力が入らず、意識は半ば混乱状態にある。

身体に受けたダメージなら例の再生能力でとつくに回復している。巨人が何かしたのだ。相手の脳みそに毒薬を流し込む魔術でも使って。

立ち尽くしたまま動けなくなつたリュウの身体は巨人にとつて格好のダミー（的）。腹を、胸を、顔面を、リュウは鉛のように重い拳で徹底的に打ちのめされた。

ボロ切れ同然のようになつたリュウの首を掴み、巨人は欄干の外に宙吊りにした。ふと手を離してしまえば、リュウは深い闇のな

かをどこまでも落ちていく。地底に達した頃には再生能力も役に立つてはくれないだろう。

しかし常人ならとっくに意識を、いや生命尽き果てている状態で、リュウにはまだかすかな意識があつた。剣を握る手に力を感じる。

紫音剣。これにはゼノ、彼女の魂が宿っている。

そうだ。この剣を手にした戦いで負けるわけにはいかない。リュウは裂帛を上げながら、がむしゃらに剣を振った。半円状に閃いた剣は巨人の両腕を切断した。

リュウは落下の寸前で欄干を掴み、舞台に返り咲くと再び剣を振るう。巨人の足元から壁にかけて走った刃の亀裂から電撃が生じ、そしてリュウは高らかに振り上げた剣を地面に炸裂させた。

無数に生じた雷の刃が巨人の全身を斬り刻み、一秒と待たず肉片に変えた。

紫音絶命剣。ゼノが有する最高の剣技で、リュウはこれに打ち勝つて彼女との戦いを制した。本来なら滝のように降り注ぐはずの巨人の返り血を一滴残らず吹き飛ばすほどの威力を、リュウは身を持つて味わい、いまや自分のものにしたのだった。

ありがとう、いや、さよならか。つと脳裏に過ぎつたゼノの姿に、リュウはどんな言葉をかけてやれば良いか分からなかつた。

一方、ニーナとリンは苦戦を強いられていた。

巨体がまとつた鋼の装甲を前に下級魔法程度では歯が立たず、せいぜいが足止めぐらいにしかならない。

拳銃から放たれる小さな弾丸などはもつと役に立たなかつた。生身の部分を狙つて弾丸を撃ち込もうにも、あの大きな両腕を広げられてはお手上げだ。まさに鉄壁。

しかし、それよりもリンを焦らせていたのは 残りの弾がわずかしか残つていないからだつた。レンジャーの防衛線、ネガティブ、これまでの戦いで予備カートリッジのほとんどを使い切つてしまつてている。

そんな貴重な一発一発を、あの忌々しい怪物は容赦なく弾いてしまった。リンは舌打ちをしながら、最後のカートリッジを装填した。リュウが戦列に加われば勝機も見えてくるだろうが、これまでずっと彼一人に負担を強いてきた。

まがりなりにも彼女も戦士、プライドがある。この戦いはどうしても自らの手で決着をつけたかった。それは二ーナも同じ様子で、初めて会ったときのような怯えやすぐにリュウを頼ろうとする弱さはなくなっていた。ウォンドを両手に敢然と立ち向かい、今の自分が持ちうる全力で相手に挑んでいる。頼もしい限りだ、彼女と一緒になら作戦を遂行できるだろう。

リンは二ーナの耳元に何事かささやくと、相手に向かって右側に走り出した。天井付近に張り巡らされている水道管には流れ弾が当たり、先ほどから水が噴き出している。

リンは穴の近くに弾丸を浴びせ、するとパイプは真っ二つに割れた。ひしゃげたパイプの切り口からどどどと滝のように水が流れしていく。床は水浸し、敵はずぶ濡れ。

相手の振り払いをかわし、リンは通路に飛び込むや叫んだ。

「いまだ、二ーナ！」

二ーナはウォンドを旋回させて魔法を発動させる。雷撃魔法・パル。

下級魔法なので威力は微々たるものだが、大量の水を味方につければ話は違う。小さな稻妻が鉄兜の上で光を放つと同時に、敵の身体は激しい痙攣に見舞われた。

まるで足が床に突き刺さったように硬直し、腹の重さに引きずられていた背筋がピンと伸びきっている。やがてスパークが収まると、身体の節々から黒煙があがり、敵はがっくりと頭を垂れて沈黙した。

「やつたか……？」

リンはおそるおそる歩み寄りとしたが、鉄兜の下の眼に鋭い光が灯った。更にコアが強く輝き、何やらモーターが高速回転するような音が響き始めた。

そして咆哮。敵は自らを奮い立たせるように兜を引き裂くと、リンに躍りかかつた。不意を突かれる形になつたものの、リンは寸でのところでアームの猛撃をかわした。

二一ナが立て続けにパルを放つも敵の勢いは止まらない。リンは危ういところで敵の攻撃を回避していたが、とうとう壁際に追い詰められてしまった。

着地に失敗して尻餅をついた際に、ポーチから銀色のケースが飛び出してきた。弾丸を収納している箱だ、中にはもう一発もいや、ある。それも通常とは違う特殊な弾丸が。

これは中に爆薬が仕込んであり、相手に着弾すれば爆発するといういわば超小型ミサイルだ。使い所が難しいのと、暴発の危険を考えて今まで使つてこなかつた。

しかしこの状況下でそうは言つていられない。リンはケースの中から爆薬弾丸を一発握りしめると、敵が腕を振り下ろすよりも早く飛び上がつた。

相手の左肩に足をつけ、大きく開いた口のなかに弾丸をねじ込む。そのまま飲み込んでしまうことのないよう舌の裏に、だ。

「二一ナ……こいつの口に火をつけてやんな」

リンはさつと飛び降り、勝利を確信したような足取りで悠々と歩く。

顔の周囲に赤い光の粒子が収束し始めていることなど意にも介さず、敵はリンの後頭部に鉄槌を振り下ろさんとしていた。

「爆ぜろ」

二一ナのパダメムが炸裂したのに半秒遅れ、小さな破裂音が空を轟いた。爆発は一瞬、それもごく小規模なものだったが、脳みそを吹き飛ばすには充分な威力だつた。

決着。やがて通路の先から、リュウが足を引きずるようによろとやつてきた。

「大丈夫か？ リュウ」

「こつちは何とか倒したよ。そつちも終わつたみたいだな」

「ああ、楽勝だつたね」

リンは「一ナの頭に手を置いて、こりと言つてみせた。

所々破けたジャケットに、痣と傷だらけの顔。いかにも満身創痍のリュウだが、こちらの冗談に苦笑いを浮かべていられる余裕はあるようだつた。

「なんだ、あれは……？」

リュウの後方に光の塊が見える。それは黄金色に煌き、尾を引きながら頭上を旋回していく。

続いてリンの後ろでも同じ現象が起きた。大の字に倒れた敵の口アからぼうっと光の塊が浮かび、それらは一つに溶け合つようぐるぐると渦を巻きながら、やがて消えた。

一行はしばし啞然とし、リンが口を開いたのは随分と後のことだつた。

「聞いたことがある。数ある魔法の中には、死者の魂を扱う？『魂

術？』といつのがあると……」

「今のもそれなのか？」

「分からぬ。私だつて魂を見るのは初めてなんだ」

何か背筋が凍るような思いに駆られた一行は、足早にその場を後にした。

中層区へと続く最後の部屋で、リュウたちはまたしても異変に直面していた。自分たちを待ち伏せていただろう上級レンジャーたちが血溜まりに伏している。

血が凝固していないところを見るに、まだ死んで間もないのだろう。先ほどの男のような頭の狂つた輩が近くにいるのかもしぬない、リュウたちは辺りを見回した。

何かいる。広間の中央で不気味に踊る影。わざわざ危険を冒してまで正体を確かめる必要などないのだが、生憎と中層区へのゲートは影の背後にある。

そしてリュウの不吉な予感は現実のものとなつた。倒したはずのあの男、あの男が、右に左に身体を揺らしながら平然とそこに立つていたのだ。

「やあ、リュウさん……またお会いしましたね」

リュウは我が目を疑う。いくらまぶたをこすつて目の前の悪趣味な幻は消えてくれない。男は確かに存在しているのだ。切れかけた天井の照明を背に、この世のあらゆる醜悪の権化といった風情で。

「改めて自己紹介をさせていただきましょう……私の名はタントラ。そして？隣にいる一人？は、」

タントラがゆらりと腕を上げると、どこからともなく光の塊が黄金色の輝きを振りまきながら舞い降りてきた。

それらはタントラの左右で停止すると、徐々に形を成していく。見覚えのある姿だ。アーム・ストロングに似たディク、長い両腕を膝頭までだらりと垂らした巨人。

黄金色の光を全身にまとつた彼らの姿はおよそこの世のものではない。まるで立体映写機が見せるホログラムのように身体が透けて見える。

「大きいのはディゴン、丸っこいのはギーギガス……。ふふ、リュ

「うさん、よくぞ私の大切な仲間を倒してくれました」
タントラは両腕を広げて天井を仰ぐ。「さあ、私と一つになりましょうねい……」

彼が？大切な仲間？といった者たちの姿が再び光の塊に戻り、ぐるぐると渦を巻きながらタントラの口のなかへと入り込んでいく。リュウたちはただ啞然とするほかなかつた。これが死者の魂を肉体に取り込んで力を得る亡魂術、すなわちれつきとした魔術の一つだと説明されたとしても、にわかには信じがたい光景だつた。

二つの魂を吸収し終えたタントラの身体は神秘的な輝きを帯び始めた。内側から発せられる強い光のおかげで、すり鉢状の口、ネジが突き刺さつた頭部がより鮮明に見える。

魂が放つ聖なる輝きに照らされたところで、彼の醜さ不気味さが払われることはなかつた。

「ふふ、ふ……ありがとう、リュウさん。彼らを倒してくれて……これでまた一つ、私は強くなることが出来ました……」

タントラは小指から人差し指まで順に折り畳んで手招きする。戦いを、いや彼にとつては？パーティー？を始めようといつらしい。

「リュウ、こんな肝心なときに申し訳ないんだが……」

リンが罰の悪そうにかぶりを振つた。「弾切れだ。今回は役に立てそうにない」

「大丈夫。おれ一人で充分だ。二ーナを頼んだよ」

言つて、リュウは剣を構えて前に出る。タントラを鋭くにらみつける。

そんな彼の鬪気を受け流すよつた、くねくねとして憎らしい動きをタントラはやめない。

「それじゃあ、始めましょうねい……！」

消えた。タントラが立つていた場所は暗闇になつている。

「リュウ、後ろだ！」

リンの言葉に反応し、リュウはとつたに身体を反転させる。

剣を構えたところに刃が飛んできた。速い。先刻手合させした時

とは段違いだ。

タントラは更に攻撃を繰り出す。リュウは反射神経だけでそれらを凌いだ。相手のどの手が、どの足が何をしているかまでは判別できない。

放った拳の一つが腹を捉え、リュウは大きく後ずさつた。ぐつと足を踏ん張り、リュウは剣を掲げて突進をかけた。このまま黙つてなどいるものか。

逆袈裟に勢いよく振り上げた剣はことごとくかわされたが、リュウは続いて剣を地面に向かつて突き刺す。紫音絶命剣。

「食らえっ！」

上空に逃れた敵を雷の刃が追う。タントラは腹をねじらせ、手を引き、足を回し、見るも鮮やかに身体を躍動させて全弾回避した。そして身軽く地面に着地。リュウは愕然とした。

「今のはティゴンの全身を斬り刻んだ技ですよねい……彼の魂が死に際の記憶を見せてくれるんですよ……これは痛かっただろうなア……」

タントラはダガー・ナイフを逆を持ちにした両手を幅広いに広げる。「おお、ティゴン。この恨みを今すぐ晴らしてあげますからねい！」

またしてもタントラの姿が空白に消える。リュウは防御の構えを取る暇もなかつた。顔面を、みぞおちを殴られ、瞬く間に全身を切りつけられた。

一撃で殺しに来ないのは、これが細切れにされて死んだ仲間への手向けのつもりなのだろう。彼と同じように、タントラはリュウをじわじわと肉片に変えていくつもりだ。

リュウの瞳に真っ赤な炎が灯る。千切れ飛ぶジャケットの纖維、敵の息遣いまでも捉えるようになつた目を使い、彼はタントラの攻撃を受け止めた。

すかさずリュウは剣を薙ぐが、タントラは上体を大きく仰け反らせてブリッジの態勢を取り、そのまま強烈なサマーソルト・キ

ックをリュウの顎先に浴びせた。

直後の攻撃をリュウはしのいだが、相手の動きを止めるには至らない。わき腹に蹴り、更に顔面に後ろ回し蹴りをもろに浴びてリュウは吹き飛んだ。

強い。リュウは上体を起こしながら、改めてそう感じた。だが勝てない相手ではない。これまでだって、いくら追い詰められてもその都度窮地を覆して勝利を収めてきたのだ。

リュウは立ち上がる、その足元から真紅のオーラを沸き立たせて。真正面に相手を見据える、剣を握る手に力をこめる。そうだ、絶対に勝つてやる

「ふふ、ふ……？ フォルカッショーン？」

ゆらりと広げた掌から、紫がかつた霧がふつと放たれた。それは今にも全力疾走を始めようとしたリュウの身体を通り抜けて、ブーメランのようにひらりと旋回してタントラの下へと戻った。

がくり、とリュウは膝から崩れ落ちる。真紅のオーラは消失し、リュウの意識はひどく混濁している。これは例の巨人、ディゴンと戦つたときにも起こった現象だ。

「その力はあまりにも危険すぎるんでねえ……？ 没収？ させていただきましたよ、リュウさん」

言葉半ばに、タントラは右腕に力瘤を作つてみせる。「おお、これは凄まじい力だ……ありがたく使わせていただきますよ……」

リュウの力を？ 吸収？ した。タントラの口ぶりはつまりそれを示している。リュウはうまく力が入らない足に鞭を入れ、よろよろと立ち上がった。こうするだけで精いっぱいだ。

「さてさて、パーティ一も大詰めですかねえ……」

タントラは再びリュウに向けて掌を広げた。「行きますよ、リュウさん」

リュウの周囲にいくつもの黒い球が生じる。ブンパだ。リュウは懸命に逃げようとするが、かつての機敏さは見る影もない。

黒い球は次々と肥大化して爆発、どろりとした液体が雨となつて

降り注いだ。黒い雨が晴れたあと、リュウは床に平伏しながらもまだ生きていた。

紫音剣を支えに、彼は長い時間をかけていよいよ立ち上がった。二ーナが思わず目を覆つてしまつほど、その姿は胸が痛むほど悲壮さで満ちている。

「さすがにしぶといですねえ……ですが、これで終わり」

タントラがゆっくりと両腕を広げていくと、リュウの身体を幾筋もの白い光条が取り巻いた。

それらは操り糸で操作されているかのよう、矛先をリュウに向けたままピンと虚空で静止している。

「?ハンドレドギアス?……」

タントラがふつと手を下ろす。まるで処刑の合図のよう。

白い光条はリュウの肩、胸、腹、足、手、首、全身くまなく突き刺さり、拳句の果てには爆発を起こした。

リュウは脳天を銃弾で撃ち抜かれたように力なくその場に倒れ込む。この意識が、時間が凍えていく感覚は何だらう。そうだ、?死?だ。

「さて、お次はこちらですか……」

踵を返し、タントラは二ーナとリンに足を向けた。

リンは二ーナの前に立つて彼女をかばう。ここでどんなに抵抗したところで、それは全てが報われることのない悪あがきに終わる。それを本能的に察してか、二ーナが魔法を放つことはなかつた。ただリンの後ろに隠れてびくびくと肩を震わせている。

「まったく、ひどいじゃないですか……人の口に爆弾を突っ込んで頭を吹き飛ばすなんてねい……人間のすることじゃないですよ」「何が人間だよ、薄汚い化け物どもめ」

「おやおや、威勢が良いですねい……あなたたちにも同じ苦しみを受けていただきますよ。パーン。脳みそが吹き飛ぶ苦しみをねい！」

タントラの指がくいっと動くのに合わせて、白い光条がリンたち

を取り囲む。ハンドレドアギアス。

二一ナは暗がりに倒れるリュウを見て泣き叫び、今にも駆け出そうとしていた。リンはそれを腕で制し、諭すように語りかける。

「大丈夫だ。リュウは生きてる。信じろ、二一ナ」

再び、彼女は自分に言い聞かせるように呟いた。「信じろ」

終わりが、命の終わりが近づいてきている。リュウに、そして彼が大事に想う一人に。

深い闇へと溶け込んでいく意識のなかで、リュウは必死の叫びを続けていた。ここで息絶えるわけにはいかない、二一ナを空に連れて行くのだ。そう約束した。

磔にされた両翼、朽ちた半身、白骨と化したかつての威容。リュウはあの場所でドラゴンを見上げていた。この心が、身体がどうなつても構わない。頼む。

?力を貸してくれ、アジーン?

身を焼き尽くすような炎がほどぼしり、リュウの肉体は異様なる変化を遂げる。

逆立つた銀髪、血溜まりのよつた双眸、鋭利な爪、炎のゆらめきが具現化したような緋色の体毛。

竜人。彼はいま一度降臨する。何かを破壊するためだ。

「これが、噂の、ですか……」

竜人の瞳がタントラを捉える。鮮紅色の粒子が彼の背中で燃え爆ぜた。

「え……?」

突風を感じたと思いきや、竜人の姿が眼前にある。

その右手の爪からは赤い雫が滴り落ち、そしてタントラは気付いた。自分の右腕がないことに。

「い……痛いじゃないですか……え、やめ……」

勢いよく金切り声をあげようとした矢先、タントラは突然に黙り

込んだ。唇が？抉り取られて？しまっている。

竜人は今しがた抉り取つた獲物を右手で潰し、今度はもう片方の手を振るつた。次々に。間断なく。血しづきが、肉片が、不気味な液体音を立てて虚空に舞つた。

今やタントラに意識はない。腕をなくし、足をなくし、おびただしい量の血をうしなつていく過程で、彼はとつぐに事切れていた。

竜人はタントラの頭を片手でわし掴み、その達磨と化した胴体を宙に吊り上げた。

ぶちつ。それが、彼の脳みそが弾け飛ぶ音だつた。あとには得体

の知れない肉の塊と、息が詰まりそうな沈黙だけが場に残された。

竜人はちらと二人を見やる。恐れ慄き、今にも吐き出しそうな一人の表情。それがまぶたに焼きついたところで、彼の意識はふつつりと切れた。

* * * *

自動ドアが小気味よく開かれる。研究室に入つてきたのはボッシユ。

その胸元にはつい今しがた斬り裂いて来た少年の返り血がかすかに点々としているが、研究者がそれに気付く様子はない。

ぶくぶく、ぶくぶくと、彼の傍らにある培養装置が音を立てる。緑光色の液に漬かっているのは、人間ともディクとも違う、禍々しい黒さを帶びた何者かの？腕？だつた。

「結論から言つて無理ですね。D検体^{オールド・ディープ}とのリンクは……」

研究者は培養装置を手で指しながら、あまり気乗りしないといった風に言つた。

その頬はこぶが出来たように腫れている。先刻、あのリュウという少年に殴られた傷はまだ癒えていない。

「何故そう言いきれるんだ？」

「成功的保障が出来ないんですよ。記録にあるだけで三例ですが……」

……うち一例は、リンクの初期の段階で暴走……」

くいっと、男は眼鏡のテンプルを持ち上げた。「最もD値の高い適格者だった最初のリンク例でも……制御しきれず、強制終了した、と聞いています……」

ボッシュはおもむろに培養装置を見やつた。リュウに一度は完膚なきまでに敗北を喫し、二度目は戦うことも能わず逃げ出した。だが、それはリュウがドラゴンの力を手に入れたからで、リュウ自身の強さではない。

ボッシュは不敵な笑みを浮かべる。

「そうだよ、リュウ……お前が？バケモノ？なら、培養液に浸つっていた腕の指先が、ぶくぶくと湧き上がる泡に押されてピクリと動いた。まるで彼を手招きするよつこ。俺もバケモノになつてやるまでだ」

(?) テコート・ペラト・前編 -

霧がかかつた視界に、薄ほんやりと誰かの顔が浮かぶ。それは大きな眼をきょろきょろさせて心配げにこちらを覗きこんでいる。

「一ナ、だ。リコウは破碎鉗で殴られたよつた頭痛をこらえつゝ、ゆづくりと上体を起こした。

「うー！ うー！」

「もう大丈夫だよ、一ナ……。ところで、ijiは？」

リコウは辺りを見渡す。目の前には太い円柱が天井を支え、床は

黄と土色のモザイクタイル、工業区とは違つた景色だ。

やがて曲がり角からリンがやつてきた。ブレッドや水壠を載せたトレーを持っている。

「やつとお田覚めかい」いたさが呆れたような口調ではあつたが、ほんのりと安堵の響きが含まれている。

リンは床にトレーを置くと、一人に食料を渡し始めた。

「おれ、またおかしくなつてたんだな……」

「そのおかげで私たちは助かつたけどね。ま、結果オーライで」

「ijiがトリニティのアジトなのか？」

「いや、アジトまではもつしばらく歩く」とになる。ijiは商業解放区……言つなりや闇市さ。政府の配給品だけじゃ暮らしていくいいから、じついう場所があるつてわけだ

リンは大きく口を開けてブレッドに噛り付く。それに遅れて、リコウと一ナもぼそそとブレッドを食べ始めた。ほとんど毎日のように食べていた物なのに、この易々とは噛み切れないブレッドの弾力が懐かしく思えた。

「あんな戦いのあとだ、しばらく休んでこい。ijiで装備を揃えるのもいいかもな」

リンは最後の一切れを口に放り込むと、それをもぐもぐと咀嚼しながらポーチのなからしわくちやになつた紙幣の束を取り出した。

「ほら、これでそのボロボロになつたジャケットをどうにかしてきな」

「ありがとう……つて、これ前におれが渡したお金じゃなかつた?..」
リンは悪戯つぽく微笑んだ。「私はここで少し寝させてもらつよ。用が済んだら起こしてくれ」

組んだ両手を枕にし、彼女は壁に背もたれるようにして楽な姿勢を取る。寝るとは言つたものの、本当にここでグース力するつもりはない。

三人のいる場所は商業解放区の出入口に当たる円形の小さな広場。目の前の円柱越しに、工業区と繋がる長い連絡通路が見える。いつ追つ手が来ても分かるように、リンはここで見張りを立てることにしたのだ。

一方、リュウは二一ナの手を取つて露店が並ぶアーケードを歩き始めていた。例の再生能力のおかげで身体は何ともないが、衣服まではそうもいかない。これまでの戦いの遍歴が全身くまなく傷となつて刻まれている。

市場というからにはもつと賑々しい雰囲気を想像していたが、人の流れはまばらで、露店の数も思つていたよりはずつと少ない。どれもシャツターや閉じきられているものの、アーケードの両隣は商店がずっと先まで軒を連ねている。

この一帯がかつて商業区であった名残だらう。中層区の水没により人が離れ、長らく放置されている間にローデイたちがこつそりと市場を開いたというわけだ。

ガスマスクですっぽり顔を覆つた作業員とすれ違い、また天井から漏れる水滴を避けて歩いていると、リュウは見覚えのある顔を見つけた。赤いほんほんのついた縞々の帽子、真っ白なTシャツ。

クリオだ。見た目に地味な格好をしている者が多数を占めるなかで、彼女の身なりは異彩を放つている。しかし下層区街の食堂で看板娘を務めている彼女が、どうしてこんな場所で露店を開いているのだろう。

「ん……？ なんや、兄ちゃんどつかで見た顔やな」

「リュウだよ。ほら、ボッシュとよく食堂に来てた……」

彼女は壁のくぼみにテーブルとパイプ椅子を置く形で店を構え、スペースいっぱいに古着やらズボンやらジャケットやらの衣類を取り揃えている。

田まぐるしいほどに色彩豊かな布に囲まれ、リュウはこの一坪にも満たない場所が現実から浮いた異空間のように思えた。

「ああ！ あのクソエリートの腰巾着さんか！」

クリオはほんっと掌を打つて田を丸くする。だが「さん」付けされたところで腰巾着と言われてうれしいわけがなく、リュウは反応に困った。

「下層区街は大変だつたんやで！ 毒ガスが回つて人がばつたばつた倒れるわ、ほんとにトリニティはしょーもないことしてくれる！」

「え？ トリニティがやつたことになつてるのか？」

「違うんか？ まあ、誰でもええわ。それで何買うてくれるんや。うちみたいなあきんど商人が気にするんは治安とか平和とかじやなくて？ どれだけ儲かるか？ やからな！」

「はつはつは！」と彼女は大っぴらに笑い始める。リュウは一ナと顔を見合せたあと、「じゃあ……」とテーブルや壁に並べられた商品を見ていった。

「ジャケットが欲しい。出来ればこれと同じやつが良いんだけど」「おお、レンジャーースーツやな！ あるであるで。レンジャーさんはうちの得意先やからな、そういうのは抜かりないんや」威勢の良い声を発しながら、クリオはハンガーでぎつしりと並べたジャケットの列を慣れた手つきで漁り始める。

「ところで、君は食堂で働いてたんじゃなかつたつけてここまで来たんだ？」

「？ 想像力？ を使って」

「想像力？」

「はつはつは、冗談やつて。先祖が作った？秘密の抜け道？を使うてここまで来た。うちの一族は代々商売人で、下層区から上層区まで手広くやってるんや。

食堂で働いてたんは単に知り合いの手伝いをただけで、こっちが本業。そんで、ほい。赤から緑から黄色から青から好きなのを選びつ！

田の前に立つと並べられたレンジャーースーツから、リュウは迷うことなく赤色を選んだ。下級レンジャー向けに大量生産された衣服であるため、今着ているものとまったく同じデザインだ。

更にクリオはそれとセットのズボンを出してくれた。「？豊富な品揃え料？込みやで！」ということで全財産が吹き飛ぶことになつたが、思いがけず衣服が一式揃つたので悪くはない買い物だろう。心残りなのは、またしても二ーナに靴を買ってやれなかつたことだ。そのことでクリオに申し出ではみたが、生憎とレンジャー相手に商売をしているため子供用の服などは置いていらないらしい。

また市場にある他の店でも子供服を扱つたところはないとのことだ。リュウたちの残念そうな顔を見て、商売人の血が騒いだのか、クリオは「今度会つたときはちゃんと用意しといたる！」と息巻いた。

「さすがにもう会つことはないだろ」

帰りの道で、リュウは購入した品を胸いっぱいに抱えながら苦笑混じりに言つた。二ーナはにっこりと笑顔を浮かべ、「そうだよね？」と語りかけるように左腕に抱えたぬいぐるみをぎゅっとしてみせた。

リュウの心にすうつと清らかな風が吹き抜ける。こんな安らいだ気持ちになつたのはしばらくぶりだった。

「もう用は済んだのかい」

リンは銃の手入れをしているところだつた。専用の工具を使って銃を解体し、火薬で汚れきつた内部を綿で拭き取つてはいる。

それが終わると今度は足元にばらばらと置かれた弾丸をカートリ

ツジに詰めていく。この闇市ではこうした物騒なものまで扱っているらしかった。

リュウは「着替えてくる」と言つてどこか人目がない場所を探しに行き、二ーナはその場に残つた。

「こら、危ないから触るんじゃないよ」

「うー？」リンは二ーナの手からさつと弾丸を取り上げ、弾薬入れ（バレット・ケース）に仕舞い込んだ。

銃底にカートリッジを入れ、指先でぐるりと一回転させたのち、リンは銃が解体する前と同じ状態かどうか試すためあちこち銃口を向けてみせた。

銃の先端につけられた凸型の照星^{フロントサイト}越しに二ーナの顔がでかでかと浮かぶ。リンは慌てて手を引っ込めようとしたが、やにわにリュウの怒鳴り声が響いた。

「リン、何やつてるんだ！」

まさに今、リンは二ーナの鼻先に銃口を突きつけている状況。当然これは二ーナの好奇心がもたらした誤解だが、リンは呆れたように肩をすくめた。

「参ったね。あんたの過保護ぶりには……」

リュウの誤解を解くにはしばらくの時間を要した。

* * * *

一行はアーケードを抜けて、階段を使い水没被害の最も深刻な区域へとやってきた。

数年前に起きた地下ダムの決壊事故が原因だ。何万トンという水量が一挙に中層区へと流れ込み、ビルも家屋も何もかもなぎ倒して賑わいあつた街を廃墟にしてしまつた。

近年の復旧作業によって水はかなり引いたものの、一行の前に広がる光景は見るも無残だ。

激流にめくれあがつた地面が、ビルの一構成物であつた鉄柱が、

コンクリートが、みなぎしゃぐしゃの瓦礫となつて横たわり積み重なり、かつての街の喧騒も、人々の生活の跡も、全てが冷たい水の下に沈んでしまっている。

かるうじて水に没してない場所がリュウたちの足場だ。照明はそこにしか設置されていないので、光の届かないほとんどの場所は暗闇に閉ざされている。寂しいところだ、とリュウは思った。

「そこから先が、トロニティのエリアだよ」

リンは正面にある地下通路への出入口を指差した。その場所までは水面から顔を出す瓦礫の連なりが橋代わりとなつていて、リュウが何気なく石段に足をかけようとすると、後ろから小さな悲鳴が聞こえた。反射的に一ナカと思つたが、声の主はリンだった。

「リン？ どうした！？」

「な……何かが、私の……つ！」

リンは汚らわしい物でも払うかのような慌しさで、辺りをきょろきょろと見回した。

「私の……何？」

「いや、なんでもない……」

リンは自分たちが上ってきた階段の向こうをじつと見つめるものの、そこは暗いばかりでハオチ一匹の気配もない。

ただ、風のいたずらにしてはあまりにも生々しい？ 感触？ があつた。そもそもここにはそよ風一つ吹いていない。リンは首を傾げながらも、先に地下通路へと入つていった一人の後に続いた。

そして一行の姿が消えてからしばらく。硬いブーツの音をこだまさせながら、一人の男が階段を上ってきた。

「なるほど、聖女様のに比べると少しばかりハリが足りないが……」

針山のように逆立つた赤い髪、正気なのかふざけているのか掴みどころのない態度。ジェズイットだ。

「ま、悪かない？ 尻？ だ」

寒々とした静寂が広がる。どこからともなく水滴が床に弾ける音がこだましている。

ここは中層区で最も栄えていたショップモールだ。闇市があつた場所と似た造りのアーケードが、一行の前にすうっと伸びている。言うまでもなく人の姿はない。あるのはネイビー色の脚光に照らされた空白と、剥落した天井の破片が織り成す瓦礫のモザイクばかりだ。

リンを先頭に一行はかつて小売店であつたと思しき店舗に入り、レジカウンターのなかにある裏口から物資搬入路へと進んだ。横幅二人分の狭い通路。

そこではかすかな足音さえも敏感に響き渡り、所々水没しているため一行はその都度膝から下をズぶ濡れにさせなくてはいけなかつた。一つ梯子を昇り、一つ水面に建立された仮設橋梁を渡り、幾度となく右へ曲がり左へ曲がりを繰り返す。

ここはさながら迷宮だ。リュウは赤と白のスプレーで壁にペイントされたトリー・ティのロゴを何度も見かけた。それは決まって道の分岐点にあり、組織のメンバーにアジトの方向を指すサインとして機能していた。

「大丈夫かい？ 二一ナ」

つと立ち止まってリンが後ろに呼びかける。二一ナは必要以上に大きく頷いてみせたが、その額には玉のような汗が浮かんでいた。羽もぐつたりとしおれて力ない。

だがリュウがおんぶしてやろうとすると、彼女はかぶりを振つて早足に一人を抜き去つた。彼らの足手まといにだけはなりたくないのだ。しかし勢いよく駆け出したはいいが、二一ナは当然アジトの在り処を知らない。

すぐに袋小路へと迷い込んでしまつて立ち往生。困り果てた彼女

の肩をぽんと叩き、リンが励ますように言った。「もうひと踏ん張りだ、二ーナ」

いよいよ田にするのも苦痛になつてきた迷宮の景色を更にまた十分近く、ゆるやかに下り坂となつていてるスロープを、梯子を、一直線に伸びる通路を進み、一行は固く閉ざされた大きな鉄のシャッターを前にする。

「到着だ」

重たい肩の荷を下ろすようにリンが言つと、他の二人の顔に小さな歓喜が踊つた。ディクと鉢合わせにならなかつただけ幸運だが、やれやれ、テロ組織の秘密基地へ来るのも乐じゃない。

リンは脇に設置されたシャッターの開閉ボタンを押した。シャッターはガタガタといまにも壊れそうな音を立て、三人はそれが完全に上がり切る前になかへと入つた。

「ここがトリニティのアジト……？ 誰もいないみたいだけど」

「おおっぴらには歩けない身分だからね、ネズミのように息を殺してんのさ」

リュウはきょろきょろと辺りを見回しながら先を進む。この場所もショッピングモールにあるアーケードの一つだ。窓にブランディングが降りた店舗の残骸がひしめくように連なつてゐる。

「お、おい、リュウ！」つとリンの大声が聞こえる。何やらただならぬ気配だ。

驚いて振り返つてみると、二ーナが力なく床に横たわつてゐる。

「二ーナ！？」

リュウは半ば反射的に飛び出し、ぐつたりと頃垂れる二ーナの顔を抱きかかえた。息は溺れかけのように不規則で荒く、口元からうめき声が漏れでいる。

突然の出来事にリュウは何をすれば良いか分からず、ただただ彼女を強く抱きしめるほかなかつた。その間にも、リンはアジトじゅうに聞こえる声で助けを求めていた。

＊
＊
＊
＊

ペラペラビビビ……。赤くみみつな速さの間隔で、心電図が一一下の命の鼓動を伝えてくる。

彼女は分厚いビニールに覆われたベッドの上で、口には呼吸器を、腕には点滴を繋げられている。

その胸が少しく腫らむたびに、リコウは悲劇の予感めいた不吉さを感じていた。いまにも彼女の呼吸が止まってしまうのではないか。だが架空の悲劇に怯えたところで自分が彼女の代わりになつてやることは出来ない。

一ーナの枕元に寄り添うように置かれたぬいぐるみもビービーと同じ心境らしかった。

一命に別状はないそうだ……

腹の上に鎧王が乗ってしるよくな重苦しめ沈黙のなか リンが巖かに口を開く。だがそれでリュウの険しい表情が和らぐ気配はなかつた。

「さっきまであんなに元気そだつたのに……」「この子なりに無理をしてたんだろう。それに、あの研究主任が言

辛い思い出を語るやつは、彼女は一の句を継ぐ。「一一年はあま
り先が長くないと……」「

再び息の詰まりそうな沈黙の緞帳じとちやうが降りた。リンは努めて冷静さを装うように両腕を組んで壁に背もたれ、リュウはただ二ーナを見つめて立ち尽くしていた。

「ところで、リュウ。私たちのボスがあんたに話があるそうだ」「おれに何の話が……？」

「さあね、一ーナには私がついてる。あんたはボスのところへ行つてきな」

コンはおもむろに窓の向こうにある通りを指差す。しばしためら
いはしたものの、ココウはやがて部屋を出ていった。トコ一テイの

アジトに医療設備があるとは予め聞かされていたが、ここまで手厚く二ーナを保護してもらつた恩義がある。テロ組織を束ねるリーダーがたかだか十六の少年、それもいまや政府に追われる身となつた元レンジャーに何の話があるのか疑問だが、礼の一つは言つておくべきだろつ。

廃屋のなかにトリニティのメンバー数人の姿が見える。壁や扉といつた仕切りが一切ないので、その様子は外からでもありありと分かる。

部屋には極端に細長い橢円形のテーブル、置むのに一苦労しそうな壊れかけのパイプ椅子、ブラウン管テレビ、ホワイトボードがあり、ほか卓上に置かれた図面などを見るにこの場所はトリニティの作戦会議室になつてゐるようだ。

二ーナこそ親切に迎えてくれた彼らではあるが、リュウに対しては親しみを込めた会釈なり挨拶なりをすることはない。ただ冷たく頑なな眼差しで彼を睨み、ボスの居場所はどこかと尋ねねば仮頂面を崩すことなく身振りだけで案内する。

そうして行き着いたのは会議室の奥にあつた手押しの扉。ノックをすると低い声で返事があつた。

「入りました」

部屋に入ると、スチール製の執務机を挟んで白色のツナギを着た男が静かに立つていた。その横にも一人、部屋の隅でひつそりと猫背の男が佇んでいる。

彼は窓際に置かれたトランジスタラジオのスイッチに手を伸ばした。先ほどからどこからともなく聞こえていたノイズの正体はこれだつた。ニュース番組の途中だつたらしく、『政府に反抗していた大魔導師の一人が処刑、』のところで音声が止まつた。

男は横目でそれを確認すると、また視線をリュウに戻す。

「リュウ君、だな。話は聞いている。私は……、いやもう知つてい
るかな、レンジャー君」

褐色の肌、傷のか皺のか判別しかねる目元の線。表情は硬く、

緊張感に満ち、リュウにはこの男が笑うところなどまったく想像がつかなかつた。

「ああ、知つてゐる。メベト＝1／4、反政府組織のリーダー、おたずね者だ」

「そう、だがその点はいまや君も同じ……追われる身だろつ？」

つとメベトは口ぶりを変える。「いや、君を責めるつもりはない。君がよく戦つてくれたおかげで、我々は一ーナを保護することが出来た……」

手を後ろに組んだまま、彼はじれつたいほど緩慢な言葉の律動に合わせてリュウに歩み寄る。そして一体何の意図があるのか、ポンつと彼の肩に手を置いた。

「知つての通り、あの子は汚れた空氣の中では生きていけないが……」こなら薬もある。もう大丈夫だ」

「何が言いたいんだ？ 外へ、空へ連れて行けば、一ーナは助かるんじやないのか……？」

「空が本當にあるのならば……の話だ」

それに、と続けて彼はリュウに背を向ける。

「もう彼女を連れまわす必要はない。ここにはちゃんととした医療設備があるし、第一あるかどうかも分からぬものに彼女の命を賭けるのは危険だとは思わないのかね。

よく考えてみるとことだ、リュウ君……。君が我々の同志となつて、共に一ーナを守りたいと言うならば、我々はもちろん歓迎するよ」

いつもこうことだったのか、とリュウは内心毒づく。つまり一ーナの命を保障してやる代わりに、自分たちの仲間になれと言つてゐるのだ。

リュウはいささか失望した気持ちになる。元からトリーーティのリーダーに希望を抱いていたわけではないが、大人というのはいつだって腹に一物抱えているのだ。それは？ 反政府？ という一見たいそうな正義を掲げた人間も変わらない。

結局何の返事もしないまま、リュウはさつさと部屋を後にした。

ひどく憤慨した足取りで治療室へと向かうココウの姿を、あの猫背の男が下品と言えそくなぐりいやほつたいたつつきでブラインド越しにつかがっていた。

「どうして彼を我々の仲間に……？　元レンジャー、政府の人間ですか？」

「いささか好奇心を捨て切れないでね。竜^{ドラゴン}とリンクした少年、？適格者？か……」

メベトは治療室に消えていくリュウの背中を見つめながら、静かに呟いた。

リュウとリンはアジトを出で、商業区へと向かっていた。思い出すにも胸糞悪くなるようなメベトとの面談のち、リュウが治療室へ戻つてみるとニーナの容態が悪化していた。

元から色素の薄い彼女の肌がいつそう青みがかり、唇と爪には毒々しいほどの紫がうずまき、痛苦の息を切らせながら両手で心臓付近を押さえている。まるで体内に巣食う魔物と戦っているかのように、彼女は汗という汗を浮かべて身悶えていた。

彼女の看護に当たつた男の言葉では『ウーロサイオン』という薬剤があれば症状も幾分緩和されるとのことだが、生憎と予備を切らせてしまっている。医療設備はあるのに薬はないとはいからにも笑い話だが、リュウとリンは商業区に降りて薬の探索をすることにした。

商業区へはアジトへ来るのに使つた搬入路、すなわち複雑怪奇に入り組んだ迷宮を引き返さなければならない。行きにも膝から下を濡らした水溜りに再度足を浸し、梯子を下り、ぐしゃぐしゃに水気を含んだブーツからは歩くたびに気の抜けた音が出た。

悪戯心を起こしたニーナに水を引っ掛けられたり、小石を踏んづけてしまわないよう彼女をおんぶしてやつたことが妙に懐かしく感じられる。つい一時間前のことだ。彼女は自分で？き揚げた水しぶきのなかできらきらと笑つていて、病魔に侵されているふうには見えなかつた。むしろ安心していた、初めて逢つた時よりも元気そうにしていたから。だがその笑顔が自分たちを心配させまいとして無理に作られたものだと知つたいま、リュウは罪悪感に駆られるまま鬼気迫る表情で足を動かしている。

「無闇やたらに進むもんじやないよ。道はこっちだ」

彼の焦りを悟つたのか、リンは諭すような聲音で彼を呼び止めた。

「これから行くところには本当に薬があるのか？」

「商業区にはいくつも薬局やメディカルセンターがある……。他の

食料やら何やらだつて、私たち（トニー＝ティ）はいつも商業区から調達してるんだ」

だから落ち着け、薬は逃げやしない。リンは最後にそう付け足したが、リュウの足取りは勢いを増すばかりだつた。

「随分と熱心だね。そんなにあの子が大事かい」

「リンは大事じゃないつていうのか？」

「そういう意味で言つたわけじゃない。ただ……」

彼女の声が心持ち気弱になつたのを察し、リュウはぴたりと立ち止まつた。

「不思議でならないんだ。あんたはここまで來るのに大勢のレンジャーを倒してきた。

そのなかには友人だつて、大切な人だつていたはずなのに……どうしてあんたは突き進んでいけるんだ？」

「リンは……おれが間違つたことをしているように見えるの？」

「リュウ自身はどう感じているんだ」

これがいつもの冗談や軽口でないことはすぐに分かつた。キッとこちらを見据える彼女の瞳には、ある種思いつめたような光が宿つている。

「自分のやつてきたこと、やるつとすることに確信なんてない。いつもそうだったし、いまも同じだ。

だけど……」ふつと、リュウは腰に携えた紫音剣の柄に手を伸ばした。

「引き返すことはもう出来ないんだ」

彼の真摯な言葉を受け取り、リンは納得したというよりは、何やらもう観念したという顔つきになつた。

やがて歩き出した二人は水没地帯に伸びた仮設橋梁に差し掛かる。壁の最下部に設置された脚光は水に没しながらも点灯しており、その光は澄んだ水面のゆらめきに屈折しながら、反射しながら、ぼやけながら、一人の行く場所を青く静かな輝きで満たしている。

「ずっと訊きたかったんだけど……」振り返ることなく、リュウは

おもむろに口を開いた。

「リンはどうしてトリー＝ティに入つたの？」

途端、リンが後ろで苦笑いしたのが分かつた。

「生意氣なガキだね。 いっぽしの女に過去を尋ねるもんじゃないよ」「「」、「ごめん……話したくないなら、別にいいんだ」

「冗談で言つたつもりが真に受けられてしまい、リンはいたさか面食らつたように目を白黒させた。

そして短いため息を一つ、彼女はふと立ち止まって水面を見やる。そこではほの青白い光の焰^{ほひ}が音もなくゆらめいていた。

「私の昔話なんてつまらないから、代わりに馬鹿なレンジャーの話をしてやるよ」

「レンジャー……？」 リンは最後まで聞けと言ひよひに、リュウの質問に構わず続けた。

「馬鹿である以外に、？ そいつ？ に特別なものは何もない。両親とはD値の違いで引き裂かれ、物心ついたときにはもつレンジャーとして育てられていた。

だが別に寂しさを感じたり両親を恋しく思つたことは一度もない。そいつには大勢の仲間がいた。みな似たような境遇で、互いに手を取り合つて生きていた。

グループの中には一人の男がいて、そいつはみんなのまとめ役だった。冗談が面白くて、優しくて、みんなそいつを慕つていた」 ぼんやりと天井を仰ぎながら、彼女は続ける。

「そいつは男と仲が良かつた。毎日色んな話をした。今日の任務は突つ立つてばかりで退屈だつたとか、あの上官は実力もないとせに口づめるとか……どれも生きていく上で特にする必要のない話ばかりだ。

だけど、そいつは男と話をするのが何よりの楽しみだつた。何せみんなの人気者だからね、一人占め出来る時間は「」く限られてるんだ。だから男に食事を作つてやつたり、編み物をプレゼントしてやつたり、馬鹿だね。

そいつが色々頑張らなくても、男には自分を世話してくれるやつが
他にいくらでもいたのに。でもそいつはそれで幸せだつたんだ」

不意に彼女が黙り込む。垂らした右腕をもう片方の手で包むよう
に押さえて、足元に視線を落とすその横顔は冷たい影に覆われてい
た。

「ある日、そいつはいつもみたいに男と話すのを楽しみにしていた。
だけど、部屋に行つても、仲間がよく集まる広場に行つても、男の
姿がない……。

そいつは男を探して街じゅうを走り回つた。別に男の命が危機に晒
されているわけでもないのに、ただ姿が見えないというだけで大き
な不安に駆られてたんだ。

で、やつとの思いで男を見つけた。下層区のリフトポートでね。そ
こで男は……小さな子供をバイオ公社の連中に引き渡してたんだ。
分厚い札束と引き換えに。

あんたも聞いたことがあるだろ、研究の実験材料として使うために
バイオ公社が子供をかつさらうって噂。それは本当だつたし、男は
誘拐の実行犯だつたつてわけさ。そいつはリフトポートを去つてい
つた男を捕まえて問い合わせた。

すると『俺はいつもこれで金を稼いでた』だの『おまえからもらつ
た手袋は博打で負けてもうない』だの白状し始めた。四、五発ぶん
殴つたあとだつたから情けないぐらいに泣きわめきながらね。いつ
もの優しい面影なんて微塵もなかつた。

結局のところ、男は外面が良いだけのどうしようもない奴だつたつ
てことさ。で、信頼しきつっていたほかの仲間も男とつるんで色々悪
いことしてるのが分かつて、そいつはもう何を信じたらいいのか分
からなくなつた。

そしてある日、トリニティの存在を知つたそいつはレンジャー基地
から機密文書を盗んで脱走。笑つちまうね。あれだけ裏で悪さをし
ていた男とその仲間たちが、正義漢ヅラしてそいつを捕まえに來た
んだ。

追つ手を巻くためにある時は戦つたり、最下層区の薄汚い廃棄処理施設に身を隠したり、色々必死こきながら、そいつはトリニティのアジトにたどり着いた……。どうだい、中々笑える話だつただろ？「…」

リンはくすつと微笑む。寂しい笑顔だ、とリュウは思った。

「いま、その人はどうしてるの？」

「トリニティの一員として立派にやつてるよ。レンジャーが乗つた高速リフトにミサイルを撃ちこんだり、陰でこそターゲットの情報をボスに伝えたりしながらね。

そうやつて反政府活動に没頭していれば、嫌な思い出もきれいさつぱり忘れられるかと思ってたけど……そいつは気付いた。レンジャー基地であれだけこき使われてたのに、自由を求めて入つた組織でまた同じようにこき使われてる。

何も変わつてない。自分の意思で生きてない。もううざりだ、とか言つてたつけな……」

さつと手すりを離れてリンは歩き出した。その毛むくじやらの尻尾が素早くうねつて床を叩く。

「なあ、リン」

しばらぐして、リュウは彼女の背中に呼びかけた。

「なんだい」

「その人に言つておいてくれないかな……。君は、独りじゃないって」

リンはまた例の、寂しさを紛らわすときに浮かべるような笑みを肩越しに作つてみせたが 今度の笑顔はちゃんとうれしそうだった。

「ああ、機会があつたら伝えておくよ」

* * *

かつてはモール街として絶え間ない喧騒に包まれていた中央商業区も、いまや薄ひんやりとした暗闇が広がる沈黙の街と化している。

天井の照明が所々点いているのはトリーティがこの一帯の店をよく物色するからだ。食料品から衣類、雑貨、医薬品と、ここで揃わないものはない。

それも店主は水害の際に逃げ出したきりだ、棚にきちんと並んでいなかつたり埃まみれでいささか不衛生だつたりする点を我慢すれば、店の商品は全て無料で持つていける。

且当てのものはある薬局の倉庫で見つかつた。リュウは薬剤の入つた黄土色の瓶を棚から取り、しばらく思案げにじっと見つめた。瓶の正面には『ウーロサイオン』と薬品名が記されたラベルがでかでかと貼られている。

「それが探してた薬だね。二ーナの身体が弱るのを食い止められerつて……」

リュウは静かにかぶりを振る。「でも、完全に二ーナを治す」とは出来ない……。いや、二ーナを治せるといひなんて、この世界にはどこにもないんだ

「リュウ……」

「これから分かつて。だから、一刻も早く二ーナを空に連れて行かなくちゃ」

リュウは素早く立ち上がる。瓶を無理やり詰め込んだ小さなポシエットはぎゅうぎゅうに膨らんでいた。

剥落した壁の破片、無造作に転がる瓶やダンボールをまたいで行きながらアーケードへ出ようとした折、銃声が響いた。

リュウは右足に激痛を感じて思わず片膝をつく。あまりに突然の事態に思考が一瞬止まつたが、これは奇襲以外の何物でもない。

やがて柱の陰からひどくやぼつた目つきの男が出てきた。リュウに向けた銃口からは白い硝煙が一筋たなびいている。

「でかしたぞ、リン」

先刻メベトと一緒にいた男、ひどく猫背でいかにも品の悪そうな男。それとまったく同じ顔がシーリングライトの薄汚い黄色のなかに浮かんでいる。

更に一人、また一人とトロニーティの面々が場に集い始めた。リュウは直覺する。

自分は罠にかけられてしまったのだと。

トリニティとはあらゆる手段を講じて政府転覆を図るテロ組織だ。彼らの存在を知ったとき、リュウは素朴な疑問を抱いた。

仮に政府を潰せたとして、彼らは何をするのか？ D値という恥まわしい制度を廃絶し、世に光をもたらす救世主にでもなるつもりなのか。

組織を率いるメベト＝1／4の真意はようとして知れない。だが歴然たる事実として、リュウはたつたいま予告なしの銃撃、すなわち奇襲をその右足に受けた。

そして弾丸を放つた張本人 リンがゼブルと呼んだ は、いかにも「してやつたり」というような顔である。多勢に無勢、卑劣な不意討ち。これが救世主のやることか。

しかしゼブルや彼を取り巻く連中の性根がいくら腐つていようがリュウには関係なかつた。問題なのは、リン。

もし彼女が初めから自分を罠にかけるつもりでこの場所に連れてきたというのなら、怒りを通り越して奈落にでも突き落とされたような心地になる。

「リン、おまえは本当によくやつてくれるよ」
クク、と歯の隙間から下衆っぽい笑いを交えながら、ゼブルが言う。

「おかげで易々と対象を抹殺できそうだ……」
ターゲット

リンが鋭く男をねめつける。「騙していたのか。初めからこうするつもりで、『薬がない』なんて」

「敵を騙すにはまず味方から……。当たり前じゃないか」

「これはリーダーの命令なのか？」

「非人道的な研究の対象にされた二ーナを民衆に見せつければ、いかに飼い慣らされてる犬といえど飼い主（政府）に反感を抱く……。いいかね、彼女は政府の暗部を証明するための大事な道具なのだ。」

それを小僧なんぞに持つていかれるわけにはいかない

「だからって殺すのか。トリニティも墮ちたもんだね……」リンは

悔しそうにかぶりを振りながら独りごちた。

「さあ、そこをどけ。これ以上そいつをかばうつもりなら、」銃口がリンに向けられる。

「裏切り者としておまえも排除する」

リンはしばらく立ち尽くしていた。自分を殺す銃声がいつ轟くか怯えているわけではない、打ちひしがれているのだ。

また仲間だと思っていた人間たちに騙された事実に。そして迷つてもいた。このまま組織に従うか、自分に従うか。

「リン」たまゆら思考の海に沈潜していた彼女の肩に、ふとリュウの手が降りる。

「安心したよ。おれ、リンに騙されてたと思ってたから」

こんな状況にあってはあまりに不釣合いな微笑み、言葉。呆気に取られているうちに、リュウは一步前に出て剣を抜いた。

「小僧、どうして立つていられる……？」

「悪いけど、おれは普通じゃないんだ」

今になつてようやく自分の手に負える敵でないと気付いたかのように、ゼブルの表情が一気に強張った。

続いてくいと顎をしゃくって仲間に合図を出す。戦闘態勢。いつ鮮血が噴き出すか分からぬ緊迫感が漂う。

「殺せつ！」

怒号が静寂の殻を突き破つて開戦を告げる　が、それは彼らにとって敗北の始まりでもあった。

二人を追い詰める円形の包囲陣。リュウは最も身近にいた一人を斬り倒すや、即座に鮮紅煌く彗星と化して飛び出した。

次々と。加速度的に。紅色の軌跡が弧を描いていく。ものの一分だつただろうか。あれだけ場を荒らしていた銃声や雄叫びはその一切が痛みに悶えるうめき声に変じている。

リュウはさつと剣を一振り、鞘に収めてリンの下へ歩む。まるで

待ち人を迎えていくような軽い足取りだ。

「大丈夫。誰も殺していない」

その一言はリンを安堵させた。いくら騙されようが、見下ろす瓦礫の狭間で絶え絶えの呼吸を繰り返す彼らが仲間であつた事実に変わりはないからだ。

「リ、リン……」場を去ろうとした一人は半ばノイズのような声に呼び止められる。

ゼブル。高慢で皮肉げだつた面影はとうになく、地面に這いつくばつて狂おしそうに腕を伸ばす姿はさながら屍人シシビだ。

「おまえ、組織を裏切つつもりか……？」

「違うね。自分の進むべき道を見つけただけだ」

そしてリンは歩いていった。振り返ることなく、また力強く。

* * * *

リュウとリンは来た道を取つて返した。右に左に何度も角を曲がるのがいかにもじれつたい、いまは一刻も早く二ーナの下へ向かわなければならないのだ。

トリニティの目論見は二ーナを利用して反政府の気運を高めることがある。これまで噂でしかなかつた政府による非道な人体実験が、二ーナという決定的な証拠によつて暴かれるのだ。

加えて民衆、特に貧民層は元から政府に良い印象を持つていない。D値制度に地獄を見せられ、いくら待つても食料の配給はなく、あつても反吐バチが出るほどまずく、一言曰くには「クソ政府め」と言つような連中だ。

彼らは勇気がないか身体が悪いかして反政府活動に参入してこないだけで、心の中ではトリニティの戦闘員と同じぐらい「打倒政府」に燃えている。

そんな彼らの眠れる獅子に火をつけ、ともに体制を打ち壊そうといふのがトリニティの考えるシナリオだ。したがつて二ーナを傷つ

けたり、万が一にも殺すということはまずないだろ？

だがリュウは走る。制御が利かなくなつた高速輸送車両の「」とく、瓦礫を、水溜りを、道中出くわしたトリニティの連中を、踏み越え斬りつけ振り払つて一心不乱に駆け抜けた。

後に続クリンは息も絶え絶えだ。無尽蔵にエネルギーを作り出す永久機関でも備わつているんじやないかと思つぐらい、リュウはたつた半秒も休むことなく突き進んでいく。

ハッチをぐぐつてアジトへ帰り着き、彼はそのまま裏通路を伝つて治療室に駆け込んだ。

「二ーナツ！？」

ベッドの上に彼女の姿はない。あつたのはぬいぐるみだけだ。リュウはその頭をぐいっと掴むと、アーケードに飛び出した。

辺りを素早く見渡し、後ろを振り返つたところで 銃声だ。リ

ュウはとっさに身をかがめる。敵はトリニティの作戦会議室から攻撃してきている。

リュウは右足を踏み込むと同時に紫音剣を抜いた。ぬいぐるみが手からこぼれおち、リュウに当てるはずだつた弾丸の一つがその腹を貫いた。

「二ーナをどこへやつた……？」

ものの十秒で黙らせてやつた五人のうち、一人の胸倉を掴んでリュウは問い詰めた。

しかし先ほど見舞つたハイキックがあまりに強烈すぎたらしい。これでも手加減したつもりなのだが、やがて男はがっくりと頭を垂れて何も言わなくなつてしまつた。

他の四人もある者はテーブルにもたれ、ある者は大の字になつたまま動かない。どんなに卑劣な人間だろ？とリンの仲間だ、殺してしまわないよう紫音剣の柄尻で殴つたり、慣れない徒手空拳で応戦してみたが 人間とはこんなに脆いものだったか？
あるいは、自分の力が強大すぎるのか……。一瞬、彼の心に恐怖が巣食つたが、それもすぐに忘れる出来事が起きた。

物陰に隠れていたトリー＝ティの戦闘員が背後から襲いかかってきたのである。いや厳密に言えば、？襲いかかろう？としていた。

敵は完全に気配を絶ち、もし邪魔が入らなければ今ごろはリュウの脳天を撃ち貫いていたことだろう。リュウ自身、物陰から男がばつたりと倒れこんできて初めて自分が狙われていたことに気付いた。ほどなくしてリンがやつてきて、きっと彼女が敵を倒してくれたのだろうと思ったが、どうもそうではないらしい。そもそも彼女が攻撃する時に決まって聞こえる銃声もしていないし、男を見れば胸にざつくりと引っかき傷のような二本線が刻まれている。

「誰がやったんだ……？」阿呆らしい問いだと思いつつも、リュウは口に出さずにはいられなかつた。

やがて二人は足音に気付く。コツ、コツ、というブーツがコンクリートを打つ硬質な音。

現れたのはメベトだった。その傍らには二ーナがあり、一人を見つけるや一田散に駆け出した。

メベトは彼女の後を追おうともしなければ、三人のうち誰かに銃を向けることもしない。ただ後ろに手を組み、その様子はまるで立つたまま鎮座しているかのようだ。

「メベト……」リンはメベトに向かつて一、三歩進んだところで足を止めた。

「なぜリュウを襲つたのです？ それに二ーナも……彼が組織に参加することを拒んだからですか？」

メベトはじつと彼女を見据えたまま答えない。

「二ーナをさらい、リュウを殺すことがあなたの正義なんですか……？ だとしたら、私はもうあなたについていくつもりはない」

「こいつらと一緒に行きます」初めからこう言われるのが分かつていたかのように、メベトはしばしまぶたを閉じていた。

一方、リュウは胸に飛び込んできた二ーナを片腕に抱きながら、目を白黒させてリンを見つめていた。組織を抜けるという決断がどんな苦悩の末に行われるか、彼は身を持つて知つてはいるからだ。

「一緒に行く……。つまり、君もまた空を目指すというのか」

メベトの低くしゃがれた声が厳かに響く。

「ここで君たちを止めることは出来ない。いまの私にはその力も、また資格もない。

だがせめて見定めさせてもらひ。君たちの進む道を、その行く末を……」

言ひて、彼はコートのジャケットから何かを取り出した。反射的に身構えたりユウたちを見て、メベトはふつと小さな笑いをこぼした。

「爆弾などではないよ。これを持つていくとい」

言葉と一緒に放り投げられたそれを、リュウは慌てて伸ばした右手で受け取った。

鍵、だらうか。しかし一般的なものではなく、銅製の取っ手からキーウェイ（差込部）が伸びてダガーナイフのような形をしている。キーウェイ部分はアクリル板のように透き通つており、内部に発光装置でも仕込まれているのか表面に彫られた溝に沿つて赤い光の静脈が広がっている。

「君が真に空を手に入れようというのなら、それと同じ物があと三つ必要になる……。だが、残りの鍵も自然と君の物になるだろ」「じつと目を凝らしてみると鍔の部分に小さく『M』というアルファベットが刻まれている。

Mの鍵。リュウは心の中でそう名づけた。

「さあ、行きたまえ。二ーナには時間がないことを忘れるな

* * * *

メベトは他のメンバーがアジトに戻つてくる前に、三人をライフラインの入り口まで案内した。送電線、水道管、ガス、通信設備、都市機能を維持し人々が日常生活を送る上で必須のネットワークが張り巡らされた場所だ。

またそこは表社会を歩けないトリー・ティたちにとつて各階層に通じる裏道でもあつた。少々時間はかかるが、ここを伝つて上層区へと行ける。現時点で深度はハ〇〇メートル。空はまだ遠い。

三人を見送つてからしばらく、メベトは背後に人の気配を感じた。この自分の影に追われているような感覚はどことなく懐かしい。

「隠れて覗き見とは、相変わらず悪趣味だな……」

メベトは誰にともなく語りかける。すると空白の一 PART が次第に色を帯び、輪郭を持ち、やがて男の姿となつた。

ジエズイット。フットライトの青白い光に照らされる彼の口元は薄ら笑つてゐる。

「バレちまつたか。だが文句を言われる筋合いはないぜ、俺は自分に与えられた能力を存分に生かしてるだけなんだからな」

「アーケードに倒れていた奴をやつたのはおまえだろ？ よりにもよつて統治者が敵を助けるとはな……」

「こつちが思わず助太刀に入つちまつぐらい、あんたらのやり方が卑怯だつたつてことだ」

「それで……？ その覗き見能力でどれだけのことを知つた？」

「大したことはない。ただつい先日、あんたとうちのボス……オリジンが会つてゐるところをうつかり見ちました」

うつかりな。とジエズイットはわざとらしい声で強調した。

「あんた、表向きには反政府だの正義だの大層なことを言つてゐるが、オリジンとの間に約束があるんだろ？」

トリー・ティと政府の争いは言つてみりやフェイク・ファイト。どれだけ真面目にやつたところで予め勝ち負けが決まつてゐる出来レースだ。

何でこんな馬鹿みたいなことをしてゐるのか俺なりに考えた。答えは単純。民衆のほとんどは政府に怒りを感じてゐる。

それが爆発してヤバいことになる前に、偽のテロ組織を作つて野郎どもの怒りを発散させよつて腹だ。違うかい、？ 元・統治者？ さんよ

メベトは彼に背を向けたまま黙つてゐる。偽のテロ組織。出来レース。

彼の言つてゐる』とは、表現『そ穏やかではないが内容そのものは正解だ。

「それが人々にとつて必要なことならば、私はやる」「ご立派だな。自分に与えられた使命は最後までやり遂げますつてか」

「おまえはどうなんだ？ リュウを、敵を助けたりして……。統治者として問題があると思うが？」

「あれは俺個人の意思でやつたことだ。統治者だの何だの肩書きは関係ない。

あんた、そういうのに縛られすぎなんだよ。ちょっとはあいつらを見習つたらどうだ？』

メベトの脳裏にリンの言葉がよみがえる。『私はこいつらと一緒に行きます』

リュウが世界を敵に回してでも二ーナを空に連れて行くと決めたように、彼女もまた決断した。自分の意思で組織を抜けたのだ。『だが、あんたもよく分からんことをするな。リュウを殺すよう命じたり、かと思えば？ 扉？ を開けるための鍵をあつさり渡したり……。』

あいつらの敵になりたいのか、味方になりたいのかどっちなんだ？』

「私はリュウを殺せなどとは言つていない。彼は私の誘いを断つた。だから二ーナを人質に取つて強行策に出たが……部下が勘違いしてしまつたようだ」

「勘違いじゃなくて、あいつらは元からそうするつもりだつたんだろ。新米がボスに優遇されてりや腹が立つからな。

しかし、いまのであんたの真意が分かつたぜ。あんた、本当はリュウと一緒に空が見たいんだろ？』

メベトは首も振らなければ口も開かない。ただその眉尻が一瞬びくつとしただけだった。

「さてと、俺はあいつらを追うぜ。これから何をしでかすか楽しみだ」

「……およそ世を統べる者の言葉とは思えんな」

「じゃあ統治者は常に自分の気持ちに嘘をついたことを言えってか？ そりや無理だ。俺はあんたと違つて正直者だからな」

「あばよ」その言葉とともに、彼の姿は空白に消えた。すると静寂の見えざる手が辺りを包み、十秒と待たず空間をすっぽり覆つてしまつた。

その異様な静けさは、確かにこの場所を時間が、人が通り過ぎたことをメビトに直感させた。まだだ。いつもこうして取り残されてきた。いつも見送る側だった。

そして気付けばがらんとした静寂の中に一人佇んでいる。どこへ行こう、何をしようという当てもないまま。

「自分の意思、か……」

彼は言葉の意味を噛み締めるようにひつそりと呟いた。

「うー……」

二ーナはひどく悲しそうな声を出した。それに呼応するように背中の羽も力なくしおれたが、体調が悪化したわけではない。むしろトリニティのアジトで治療してもらったおかげで今はすっかり回復した。理由はブキ。どんな時も欠かさず傍にいてくれた大事な友だちのお腹に痛々しい傷が出来てしまったからだ。

「じめん、二ーナ。あのときは戦うことで頭がいっぱいだったから……」

リュウは申し訳なさそうに頭を下げる。トリニティの戦闘員と交戦したとき、流れ弾の一つがブキの腹部に直撃したのだ。

ヘその上に出来た直径何ミリかの穴から、硬いプラスチックの粒ペレットがぽろぽろと砂のように落ちていく。これは人間に例えれば血だ。ブキは大怪我を負ったのだ。

「それぐらい、私が編んで直してやるよ」

そう言つて二ーナの肩を優しく叩いてやつたリンを、リュウは「信じられない」という顔で見つめた。

「リン、出来るの……？」

「なめるんじゃないよ」コツ、ではなくボコ、という音がリュウのこめかみで炸裂した。

「つつても、今は針も糸もないからまた今度だ。とりあえず今はこの中に入れときな」

いつてえ……と顔を覆うリュウを後ろに、リンはアジトから持参してきた黒一色の大きなバレル・バッグの口を開いた。

中はハンドガン、マシンガン、手榴弾、……他諸々物騒なものでいっぱいだ。リンはその上にブキの身体をねじ込むように押し入れ、それでも收まりきらないので最終的に足で数回踏みつけた。二ーナは少し泣いた。

そんなことをして手榴弾が爆発を起こさないか、穴が開いたままのブキを入れてはバッグ中がペレットまみれになるのではとリュウは心配になつたが、彼女は先ほどから妙に気が立つてゐる。

考えてみれば無理もない。トリニティのアジトを発つて十分程度、つまり彼女が組織を抜けてからわずかな時間しか経過していない。本当に自分の選択は正しいのか、そんな不安や後悔が一緒くたになつて彼女を苛立せているのだろう。

後戻りは許されない、ただ前へ前へと突き進むしかない。これは一種の極限状態だ。

だから彼女はアジトから持てるだけの銃器をバッグに押し込み、これから戦争でも始めんばかりの重装備でいまここにいる。追い詰められた彼女の心模様がバッグの中身に投影されている。だが手遅れにはなつていない、今ならまだ引き返せる。

リュウは訊ねた。

「本当に、おれたちについていいのか……？」

決まつてゐる、といふよくな顔で彼女は短く息を吐いた。

「ついていくんじゃない。進むんだよ。私が、この足で」

彼女の声には自らを無理やり説き伏せるような強引さがあつたが、その瞳に宿る決意は固かつた。

いざれにしろ、彼女がともに来てくれるのは頼もしい限りだ。その激しい気性のどこにぬいぐるみを修繕するだけの纖細さがあるのかは甚だ疑問だが、リュウにはとてもじやないが出来そうにない。リンは必要なのだ。一ーナにとつても、リュウにとつても。

「よし、じゃあ行こう」

場所はライフライン下層部。深度は八〇〇メートル。

「空へ！」

力強く、彼らは一步を踏み出した。

* * * *

人を待っている。この、呼氣一つ立てるのさえ憚られるような静肅さのなかで。

やがて足音が聞こえてきた。だがそれは革靴が大理石の床を打つ音ではなく、鞘に収められた剣が歩度に合わせて鳴る金属音である。会議室に入ってきたのはヴェクサシオンだつた。またの名を？剣聖？と呼ばれる男。彼は閑散とした会議室を見渡し、六つ並べられた席の一つに小ぶりな人影を認めると厳かに口を開いた。

「他の者はまだか？ クピト」

彼、あるいは彼女 クピトと呼ばれた人物は男女どちらか判然としない中性的な姿をしている。その青い瞳や口元は少年のように物言いたげで、きめの細かい白い肌やほつそりとした身体の輪郭は少女のように儚い。

外見の年齢は十歳前後の子供で、両耳が下向きに垂れている。獣人の特徴だ。ヴェクサシオンの声に反応し、背中に一対の羽を生やした小動物がクピトの掌のなかからひょこつと顔を出した。

「まもなくやつてくると思います。ジョズイットさんは分かりませんが……」

あの人はいつも気まぐれですから、とクピトは澄んだ水のように透き通つた声で付け加えた。

次にクピトの目は自らの席に腰を下ろそうとするヴェクサシオンの動きを追つた。ちやき、ちやきと彼の腰に携えられた大振りな剣が鞘鳴り音を立てる。

剣聖・ヴェクサシオン。その威厳、その静かなる迫力を前に、人の全ては彼に道を開けるだろう。たとえ運命が行く手を阻んだとしても、彼はその剣で斬り伏せる。

事実そうしてきた証が、黒い眼帯で覆われた十字傷として右目に刻まれている。肌は褐色、髪は金色、顎や口元はいとも端正で、鼻の下にはよく整えられたどじょう髪がたくわえられている。

「差し支えなければ、ですが」

ヴェクサシオンが自らの席

クピトとはちょうど対極の位置だ

についてからしばらく。クピトは言った。

「あなたのご子息、ボッシユ＝1／64が消息を絶つたとのことでした……いまは？」

ヴェクサシオンは口を開く代わりにかぶりを振った。壁龕へきがんに並べられた蠟燭の揺らめく赤を受けて、彼の所作一つ一つがより貫禄を帯びて見える。

「目下のところ、リケドとナラカに行方を捜させている……。この二人とは以前顔を合わせたことがあるだらう、私の部下だ」

「まだ見つかっていないのですか……。聞くところによれば、ボッシユは適格者の少年と戦い、」

敗れた、と言いかけた声を慌てて喉に押し戻す。クピトは相手に悟られないうちに、素早く「戦ったのちに、行方が分からなくなつたそうですが」と言い直した。

「なに、心配することはない……。あれぐらいの年頃の者はみな予想だにしない行動に出るものだ。だがいずれ帰つてくる。それも大いなる成長を遂げてな。

ボッシユは私が与えた幾多の試練を乗り越え、一度たりともこちらの期待を裏切つたことがない。私は確信している」

ふと、彼は天窓の奥で輝く人工太陽を仰いだ。その『聖なる』と冠するに相応しい純白の輝きと、一人息子の面影とを重ねるよつに。

「あれは、私を超える者だ。世界に光をもたらす者だよ。

我が血に連なる者が私を超えて……世界を開く……」

ヴェクサシオンの見つめる両手は、歓喜を感じたように打ち震えていた。

「最高の栄誉だと、思わないか……？」

ふつと沈黙が降りた。やがて蠟燭の一本から、予告もなく、また音もなく火が消えた。

それに不吉な暗示を見たかのよう、クピトはかすかに不安げな声で言った。

「早く、見つかるといいですね……」

「なんだよ、これは……」

リンは思わず息を呑む。『仲間同士で殺りあつたのか?』

場所はライフライン上層部。さしたる障害に出くわすこともなく順調に歩を進めていた一行は、角を曲がつたところで忽然と現れた光景を前に立ちすくんでいた。

道幅一人分の狭い通路いっぱいに邪公の惨殺死体がひしめいている。床にぶち撒かれた生の五臓六腑が発する強烈な臭氣に、リュウたちの心身は吐き気と混乱に襲われた。

この邪公たち、いやかつてはそうであつたこの物言わぬ肉塊たちは、ライフライン上層部を根城としていた野生群だろ。下層区のリフトポートにいた者たちと種類は同じだ。

胸に深く顔をうずめてくる一ーナを抱きながら、リュウは手前に倒れている一体を見やつた。それは壁にもたれた状態で頭を垂らし、額に穿たれた穴からはどうす黒い血が一筋流れ出している。

リュウは愕然とした。『違う、仲間同士で殺しあつたんじゃない……? ボッショ? だ』

『これはボッショがやつたんだ』と、彼はにわかに怒りを含んだ声で強調した。

リュウの脳裏に過去の映像がフラッシュバックされていく。

ボッショとともに輸送車両の護衛任務を受けた。バイオ公社実験棟まで向かう道のりで三体の邪公と遭遇した。

『おまえは照明係だ』こちらをからかうように言いながら、彼は自慢の? 獣剣技? で易々と敵を倒してみせた。

心臓を、脳みそを、目玉を、レイピアは彼らの命の在り処を正確に射抜いた。蛇が獲物に食らいつく時のような速さで。

この傷はそれだ。レイピアにつけられた傷だ。紫音剣のような幅広刃ではこんな小さく鋭い傷は出来ない。

リュウは確信すると同時に、この血みどろの景色が何らかの言葉を含んでいるように思えてきた。すなわちボッショからのメッセージ。

それは『仲直りしよつ』だの『俺も仲間に入れてくれ』だの生易しいものでは当然ない。？挑戦状？だ。

「きっと、この向こうにボッショがいる……」

「ちょっと待て。ここを突つ切ろうってのかい？」

「どっちにしろ前に進む道はこれ以外にはない。あいつはそれを知つてて、わざとこんなことをしたんだ」

ボッショ＝1／64。統治者という未来が約束されていた彼は、小石につまづいたのを境にその精神を大きく歪めてしまつたらしい。血の海、あるいは肉片の集積場ともいいくべき田の前の光景は、ばらばらになつて元に戻れなくなつた彼の精神世界そのものだ。

だが一つ不可解な点がある。壁や床、天井に、何か鋭利な爪で抉つたような引っ搔き傷がいくつか見受けられる。邪公たちの死体の損壊度はひどく、まるで巨大な人型獣が力任せに無理やり引き裂いたかのようだ。

レイピアは『突き』に特化した分、物体を斬るにはあまり向いていないし、記憶に残るボッショはそもそもこんなむごたらしい殺し方はしない。それはもちろん慈悲ではなく、単に薄汚い獣の血で服を汚したくないからだ。

ではこれはボッショの仕業ではないのか……？ だが死体の中には明らかにレイピアで刺し殺されたと思しきものもある。

進んで確かめるしかない リュウは二ーナを背におぶつて、狂い果てたボッショの精神世界に足を踏み入れていった。

* * *

ほどなくして、一行は開けた場所に出た。

通路は直線で、五メートルも進むと死体の姿はなくなつたが、そ

こを手負いの者が歩いていったとばかり血の跡はどこまでも続いた。壁に刻まれた引っかき傷と一緒に。

リュウは一ノナを背から下ろし、さりげなく紫音剣に手をかけた。タラップを降りたところは正四角形のまっさらなコンクリートデッキとなつており、その中央にはボッシュが立つていた。

ここはライフラインと上層区街の中間にある連絡通路だ。アプローチ燐虫が青白い光をたなびかせて宙を舞い、ボッシュはそれに見惚れたように天井を仰いだまま動かない。

「よう、相棒！」

皮肉のつもりなのか、彼は白々しいぐらいに陽気な声で言った。だがこちらを見ようとはしない。不自然に身体の右側をこちらに向けたままだ。

リュウを先頭に三人は慎重な足取りでタラップを一段一段降りていぐ。先回りされているのだ、罠が仕掛けられているかもしない。「さつさと降りて来いよ。変な小細工はしていないからさ……」

妙に含みを持たせた言い方をしつつ、彼はおもむろに振り返る。リュウはぴたりと足を止めた。リンはとつさに顔をそらし、一ノナは小さく悲鳴を上げた。

「ボッシュ、その？ 身体？ は……？」

ぐるり、とボッシュの左手が素早く弧を描いた。人間の手ではなかつた。

「俺の相棒がさ……ローディのくせになまいきだから……」

いま目の前にしているものがボッシュなのかどうか、いや人間なのかどうか、リュウには分からなかつた。

彼の身体はその左半分が異形と化している。黒々とした、この世に悪魔がいるというのならその類の、五本の指全てに鋭い刃が備わつた魔手。

それは肩から手首に至るまでの部分が極端に細長く、掌だけが肥大化しており、表面には橙色に発光する光の静脈が広がっている。その腕がとつくに彼のものではないよう、顔の左半分もまた、彼

のものではなくなっていた。

剥がれ落ちた皮膚。一切の光が失われ、いまや髑髏のよつにうつろな空洞となつた左の瞳。彼の姿はあたかも成長の途中でつまみ出された胎児のように、不気味で、ある種の残虐さすら感じさせた。「そいつを殺してやる」と思つて、俺も、強くしてもらつたんだよ……

「強くしてもらつた？　違う。？　バケモノ？　にしてもらつたんだ。彼は『ディクとの生体融合^{ブースト}』を受けて超人的な力を手に入れた。タントラたちネガティブのように。」

リュウは言ひようのない怒りを感じ、ただただ拳を握りしめた。「どうしてだ、どうしておまえはそこまで？　勝ち？　にこだわる……？」

「教えてやつたつてしょうがないだろ……これから死ぬやつこそ」ボッショの左手が再びぐるりと一回転し、こちらを手招きした。リュウは紫音剣を抜き出して彼の宣戦布告に応える。リンが身を乗り出そとしたが、リュウはそれを手で制した。
「これはおれたちの問題だ。リンは二ーナを頼む」
彼の言葉をしぶしぶ受け入れ、リンは二ーナを連れて引き下がつた。

リュウたちはコンクリートデッキの中央で対峙している。手抜き工事のためか、普段は誰にも使われない仮設構造物であるためか、二人のいる場所に手すりや柵はない。一歩外に出たらそのまま奈落の底だ。

「さつきの通路にいた『ディクは全部おまえがやつたんだな……。その左手で』
「まあ、ちょっとしたウォーミングアップをかねてな。まだ移植されたばかりであまり馴染んでないんだ、ちょっとでも気を抜くと勝手に動きやがる。

言つとくがな、これはディクなんかの腕じゃないんだ。？　D検体？　……言つなりや、ドラゴンの腕だ

「ドーラゴン?」リュウの眉尻がぴくつとつりあがる。

「そう。だが? D・ダイブ? していない今のおまえは単なるローディ。」この左手を使うまでもない。だから……」

ボッショは優雅とさえ言える鷹揚さでレイピアを抜き、突きの構えを取つた。

「初めはこれだけで相手をしてやるよ

オールド・ディープ。D・ダイブ。リュウには聞きなれない単語だが、どうやらボッショはドーラゴンについて調査の手をぬぐしたらしい。

リフトの護衛任務のときはあれほど馬鹿にしていたというのに……そのドーラゴンの力を借りたおかげで彼はすっかり変わり果ててしまつた。相手を下に見る高慢な性格は相変わらずのようだが。

「ボッショ、おれは出来れば戦いたくなー……。二ーナを空こ、一刻も早く連れて行かなくちゃいけない。

レンジャーの任務でおれを追つてきたわけじゃないんだろう? だつたら、勝負はおれの負けでいい。」ここを通して、「

途端、リュウは突風を感じた。レイピアの切つ先が閃く。リュウはひとり身をそりし、続く一撃田、二撃田を紫音剣でのいだ。

「ふざけるな。勝敗はおまえが決めるんじゃない、俺が決めるんだ」衝突した刃から火花と金属音が散る。両者はしばし鎧を競り合せ、やがて後ろに飛びのき距離を置いた。

「やるようになつたじゃないか。俺の獣剣技をかわすなんて

「ボッショ、おれは……」

「だが、これならどうだ?」

彼は一切聞く耳を持たず、レイピアを鞘に戻して居合いの体勢を取りつた。

リュウは悟る。ボッショにとっての『勝利』とは、相手を殺すことなのだと。

「獣剣技……」

ボッショウは腰を低く落とすや、一足飛びに間合いを詰め 刃を

繰り出した。

「？ 麒麟翔？！」

逆袈裟に勢いよく振りぬかれた剣先から轟音とともに真っ赤な波動がほとばしる。リュウは剣を盾にして攻撃を受け止めたが、あまりの圧力にテックの縁まで追いやられた。

構えを解くとボッショウが顔を憎悪に歪ませて突進してくるのが分かる。後ろは奈落。リュウは前進を余儀なくされ、両者は再び刃を交えた。

一度二度、三度ならず四度、その全てがボッショウの攻撃で、リュウは防戦一方だった。もちろん相手が強いわけではない、むしろゼノやタントラと比べれば彼は隙だらけだ。これまでにも何度も相手を仕留めるチャンスがあった。

リュウは迷っていた。かつて一瞬でも友人だと思っていた人間を斬る、言い換えれば殺すということに、彼は怖気づいていたのだ。

「リュウ……おまえ、やる気あんのか？」

攻撃の手を止めて、ボッショウは訊ねた。

リュウは答えに詰まつたように黙り込んだのち、つと口を開いた。

「D・ダイブ、オールド・ディープってのは……一体なんなんだ？」

「はあ？」 寝言は寝て言えと言わんばかりに、ボッショウはあざけつた。

リュウ自身もなぜこんな質問をしたのか分からぬ。ふと話題をそらせば、自分たちの関係がまた元に戻るとでも思っていたのか。これ以上無益な殺し合いをしなくて済むと思ったからか。

「バケモノ歴はそっちの方が長いはずなのに、おまえは何にも知らないんだな。

リンクだよ、リンク。古代の超兵器であるドラゴンと精神的、あるいは肉体的に繋がる（リンク）ことで……俺たちはずっと強くなれ

る。

おまえは既に活動を終えたドリゴンと……アジーンだつたか？ どういう原理かは知らないが、あの護衛任務のときにリンクを果たして、そしてリフトポートで俺に地獄を見せてくれたわけだ。あのときの姿が？ D - ダイブ？ だよ。

いいか、リュウ。俺はあのときのおまえ、バケモノのおまえを倒さなくちゃ意味がないんだ……ほら、D - ダイブしてみろよ「出来ないのか、ヒボッショウは鼻で笑った。続けて横田に「一ノナたちを見やる。

「そうか、きつかけか……」

「何をする気だ？ 二人は関係ないはずだろ」

「いまのおまえはただの弱虫ローディだからな。バケモノになつてもらわないと」

ボッショウは魔手を高々振りかざし、タラップの上にいる一人めがけて走り出した。「意味がないんだよ！」

だが彼の疾走はすぐに勢いをなくす。目の前に、つい今しがた後ろにいたはずのリュウが立ちふさがつたからだ。

「確かに、おれは自分の意思ではD - ダイブ出来ない……だけど、いまのおまえなんかバケモノにならなくとも倒せる」「なんだと……？」

瞬間、リュウの足元から一気に鮮紅色のオーラが噴き上がった。続いてゆっくりと剣を胸に構え、血だまりのような双眸で相手をねめつける。

「かかつてこいよ、ボッショウ」

リュウはもう躊躇わなかつた。迷いがあればあるほどヒーナリオンに危険が及ぶことに気付いたからだ。

ボッショウはもう友だちじやない。敵だ。空への道を阻む敵だ。

「なまいきだ……」ボッショウは悔しさに口元を歪め、ぎりっと奥歯を鳴らした。

「なまいきだ、ローディのくせに！」

ボッショウは狂乱の態になり、再度『麒麟翔』を繰り出した。

続けて突きの連打。

連打。

連打。

連打。

だがいくら放ってもレイピアの切つ先が相手を捉えることはない。裂帛を上げながら、ボッショウは魔手を力任せに横薙いだ。その手が紫音剣をわし掴む。力の拮抗が生じる。やがて魔手の力に負け、リュウは大きく吹き飛ばされた。

床に刃を突きたて、リュウは寸でのところで落下を免れた。ただちに体勢を整えて反撃に転じる。

ボッショウは居合いの構えを取り、三度『麒麟翔』を出そつしたが刃が振り上げられた瞬間、リュウはレイピアを剣で上から押さえつけた。

そこから手首を返してレイピアを頭上高く弾き飛ばす。刃先をボッショウの首筋にあてがう。

「おまえの負けだ」

がくり、とボッショウの両膝が崩れ落ちた。

額には玉のような汗が浮かび、瞳孔は開ききり、口元は静かに震えている。

「なんで……届かない……？　おまえに勝てない……？」

屈辱的な現実を否定するかのじとく、ボッショウは威勢よく魔手を振り回した。

「俺はまだ負けてない！　負けてないんだよ！」

彼の口から出るどんな言葉も、いまや負け犬の遠吠えにしか聞こえなかつた。

だが笑いたい気持ちの一つ起こらない。リュウにはただただ哀しかつた。武器を失つてなお勝利に固執する彼の姿が。

リュウはゆっくりと紫音剣を逆さに持ちかえていく。絶命剣。

これで終わらせてあげよう。彼を苦しみから解き放つてあげよう。

「ごめんな、ボツシユ」
そして終の一撃が、二人の間に閃いた

。

少年は怯えていた。怯えて怯えて、息ひとつ満足に出来なかつた。巨獸。あるいは生命の絶対的脅威ともいふべき存在を前に。その赤い双眸は獰猛にぎらつき、右手には戦斧、両端に牙を揃えた口辺は荒々しい息吹を繰り返している。

少年は『死』を自覚するにはまだあまりにも幼かつた。だが『恐怖』は分かる。一本の足で立ち、筋肉でふくらんだ胴を鎧で固めているとはいへ、目の前の者が人間のように話を聞いてはくれないということも分かつてゐる。

これは獣なのだ。血と肉に飢え、獲物の首を撥ね飛ばす以外に戦斧の使い道を知らない殺意の塊。これと対峙したということは、すなわち自分が生きるために、この獣と戦つて勝たなくてはならぬ。

そのために少年が持つてゐるのは、『ごく小さな鉄の両刃剣のみだつた。母の温もりも、父の強さも、また世話人たちの優しさも、この場では何一つ少年に味方をしてくれない。少年は絶望のあまりに嘆いた。

「こわ……い……とうさま……」

足は震え、顔からは血の氣が引き、その幼い身体は戦慄に打ちのめされてとつぐに動かなくなつてゐた。彼のために特注されたブロードソードを力いっぱい構え、刃先を相手に向けるだけで精いっぱいだつた。

「恐れるな、ボッシュ。常に冷静でいろ」

どこからか父の厳格な声が響く。「戦場で恐怖に囚われれば、敵を見誤る。そこに待つのは、下劣な死闘だけだ……」

少年は思つた。近くにいるのなら、どうして助けてくれないの?「ボッシュよ、おまえには力がある。だが……その使い方をまだ知らぬ。見せてみろ。武人としての、おまえの力を」

これは試練なのだ。少年は悟った。

巨獸は肩を震わせ、鼻を鳴らし、いまにも戦斧を振り下ろさんと
している。

「こわい。」「わい」「わい」。だけど「ここ」で力を証明しなければ、父さまはぼくを認めてくれない。

少年は裂帛を上げて獸に踊りかかっていった。その声はたくましい戦士のそれとこりより、死に逝く者の嘆きに近かつた。悲痛な金切り声だった。

「やりました、父さま」

「はあ、はあ、と息を喘がせながら、少年は言った。
塔のようにそびえていた獸はいま自分の足元で沈黙している。脳天にはブロードソードが突き刺さっている。

具体的に自分がどう戦い、何を遂げたのか、過程はすっぽり頭から抜けているが、生きている。ぼくは生きている。

「よくやつた、ボッショ。今日はここまでだ……」

ブーツが大理石を叩く音が次第に遠のいていく。

「やりました、父さま。やりました。やりました……」

父が去つたあとも、少年はうわ」とのようく言葉を重ねた。彼の左半身はたつたいま血だまりから上がってきたとばかり獸の返り血で汚れている。

その翠緑色の瞳が鮮血の下でうつろに輝き、唇は笑っているとも泣いているともつかない格好で、壊れた機械のように同じ言葉を繰り返し続けている。

勝たなくちや。力を証明しなくていい。そうでないとだれもぼくを見てくれない。
だれも……。

* * * *

「くそ……っ！ ちくしょう……っ！」

がばつと勢いよくボッシュの口から血が噴き出した。

先ほどの一撃で腕や足、額や胴、全身がくまなく切り刻まれた。

痛い。苦しい。腹の奥底で魔物が暴れまわっているかのようだ。

一方で、あいつの涼しげな顔はなんだ？ なぜ傷一つ出来ていない？

蛇噛へびがみ、獅子碎ししきだき、麒麟翔、獣劍技のあらゆる技を駆使したといつのに？ 身体の半分を魔物に捧げたといつのに？

なんてザマだ、なんてザマだ！

脳天を突き抜けるような激しい屈辱が全身を蝕み、それはいまにも彼の精神を食い破ろうとしていた。

「リュウ ッ！」 ボッシュは戦いをやめない。足はとっくに言うことを聞かず、立っているだけで精いっぱいだというのに。

「リュウ、おまえに……おまえに負けるわけには、いかないんだよ

……っ！」

だが限界だった。ボッシュはまた血を吐き出し、がっくつとその場にひざまづいた。

嘘だろ？ 動け、動けよ。リュウに、格下のローディに負けると、いつことがあつてはいけないんだ。

誰も見てくれなくなる。父は俺の元を去り、世界は俺を見捨てる。そんなことがあつてたまるか！

「さあ、こじよ、リュウ！ 殺してやるよ！」

リュウは憐れむような目でこちらを見つめていた。まるで透明な壁一つ隔てた向こう側から、いまにも溺れていく者の行く末を静観するかのように。

なぜ俺がこいつち側なんだ？ 逆だらう？ ボッシュは言ひようのない、燃え爆ぜるような怒りに駆られた。そして自分とリュウとを隔てる壁を打ち壊しにかかった。

が、ふと左腕が 自分の腕ではない魔物の腕が 急に力を備え、ぐるっと躍動し、彼を後ろへと引っ張った。両足が無抵抗にもつれる。身体が傾ぐ。

「ボッシュ！」

リュウが事の顛末を察してとつたに駆け出した。ボッシュの足がデッキの縁を踏み越え、やがてその身体は情け容赦のない重力の井戸に飲まれた。

落ちる。落ちていく。寸でのところで手を伸ばしたリュウの顔が急速に、しかしゆるやかに遠のいていく。それは明確な一個人の姿から、やがて判別の出来ない点となつて、最後は闇に消えた。

ぶちゅ。あるいはぶちゃ。言葉にしてみればいとも安っぽい液体音、骨の、内臓の碎ける音を、彼は激しい衝撃のなかで耳にした。うなじから背筋へと血が流れしていくのが分かる。右手と両足があらぬ方向を向いてしまっているのが分かる。身体のどこにも力が入らず、息は出来ず、意識はリュウの顔を見たのを最後に止まつている。

死。

その瞳から光が失せ、彼はこのまま 生温かいのか冷たいのかもう分からなくなつた血だまりのなかで 静かに息絶えるはずだった。もし彼が？人間？のままであつたのなら。

？憎めるか……？？

知らない声だった。父のように厳格で、思わず平伏してしまうような声だった。

ボッシュは思う。リュウが自分の身体を傷つけたことを。同時に心までも深く痛めつけたことを。

俺は父に、人々に期待され、世を統べる者になるべく生まれてきた。それをリュウはいとも容易く、かつ徹底的に踏みにじつた。憎い。あいつが憎い。俺の生きる意味を奪つたあいつが。

？いいだろう……選んでやる？

悪魔の巢食う左腕が、急に意志を持ったかのように動き出し、高

々と掌を天に向けたあと、その鋭い爪でボッシュの胸を深く突き刺した。

そして破つた。心臓を、彼の精神を。血しづきが辺りに散り、彼は完全なる死を遂げた。新たな存在に生まれ変わるため。

間に合わなかつた。ボッシュを助けられなかつた。彼は凍えるような深い闇の、その底へとビビリまでも落ちていつた。悪魔に捧げた左腕に誘われるかのように。

だが落下の間際、彼にはリュウの手を掴む時間があつたはずだ。一秒、いやその半分にも満たない時間かもしれないが、リュウには分かつっていた。

彼は敢えて手を取らなかつたのだと。ローディに助けられるぐらいな孤独な死を選ぶと。

リュウは唇を噛み締めた。血が滲み出るぐらいに強く。右手が勝手に握り拳を作り、頸動脈が小刻みに震え、身体は異常なまでに熱を帯びていた。

怒りと悔しさがないまぜになつていまにも千切れそうな彼の心を抱きしめるように、二ーナがそつと身を寄せた。リンはボッシュが落下した先をちらと覗き込んだあと、途方に暮れたように短く息を吐いた。

「ボッシュは、おれの友だちだつたんだ……」ふとリュウが口を開く。

「短い間だつたし、完璧にそう言えるかは分からない、……だけど、」友だちだつたんだよ。彼は叩きつけるように語尾を切り上げ、やにわに踵を返した。その動作はおよそ暴力的で、静かに寄り添つてくれていた二ーナを押しのける格好になつてしまつた。

リュウは一瞬申し訳なさそうな顔をしたが、またすぐ一人に背を向け、黙り込んだまま歩き出した。ある見方をすれば逃げるようだ。またある見方をすれば障害の何もかもを蹴散らすような足取りで。一行が曲がりくねつたタラップを上り、上層区街へと続く通路へと進んだのち、コンクリートデッキに一人の男が忽然と姿を現した。それはデッキの縁に右足をかけ、手でひさしをつくつて深い闇の

底を覗き込んだ。「こりやあ……死んだな」

ジョーズイット。彼は暢気とさえ言えるような口ぶりで独りしゃれたあと、顎に指を添えて思考をめぐらすように天井を仰いだ。

彼が決断を下すべき事柄は一つ。

その一。いよいよ統治者たちの本丸へと迫ったリュウ一行についていくかどうか。

その一。誰ぞに「趣味が悪い」と言われた尾行はここまでにして、自分に与えられた使命を果たすべく中央省庁に帰還するか。

恐らくは統治者たちの間で再び会議の場が設けられるだろう。リュウはゼノ率いるレンジャー隊を蹴散らし、ネガティブを叩き潰し、成り行きながらトリニティまで解体寸前に追いやった。そしてその手には空を開くための鍵を一つ持っている。

田に瞠る快進撃だ。勇敢なる彼に対し、我々統治者は最高のもてなしを用意しなくてはならない。今度の会議で決められるのはもてなしの内容、すなわちジョーズイットが最も心躍る事柄が議題にされる。

「いひからが本番だな……」

ジョーズイットは堪えきれない笑みを口の端からじりじりと、上着のポケットから小型端末を取り出した。

モニターに現れたバーチャルコンソールを手早く操作し、すると彼の足元、コンクリートデッキ全体に青白い光を放つ魔法陣が出現した。

これは現在位置と中央省庁とを繋ぐテレポート・ゲート（転送装置）。彼が統治者になつて良かつたと思うのは、何より移動に不自由しなくなつたということだ。

まもなく彼の全身が青白い光の収束とともに跡形もなく消えた。彼は決断すべき事柄その一を選択したわけだが、密かにもう一つ思い悩んでいることがある。

それはかの剣聖・ヴェクサシオンに「あなたの息子は死んだ」と伝えるか否かだった。

* * * *

「ヴェクサシオン？ どうかしましたか？」

クピトに呼びかけられ、ヴェクサシオンの鋭い瞳がハッと動き出した。

「すまない。一寸、気が抜けていた」

「疲れているのでしょうか。適格者のこと、じう息のこと、近いいろは悩みの種が多すぎますから」

会議の場にはすでに五人の顔があった。半円状に湾曲するアンティーケ調の面長机には、端からヴェクサシオン、オルテンシア、一つ空席を挟み、デモネド、クピトの順で列している。

統治者の長たるエリュオンの椅子は用意されていない。彼は椅子に座らず、他の者たちの面前に立つて会議を執り行うのが慣例となつているからだ。

静かに腕を組んで佇んでいた彼は、ちょうど真正面に見える空席をにらみつけてから口を開いた。

「相変わらず、無作法なやつだ……」

「誰が無作法だって？」エリュオンの言葉にかぶせるよつて、どこからか声が飛んできた。

見れば空席が男の姿で埋まつていて。「俺は初めてからここにいたぜ？ 姿を隠してただけで」

ジエズイットは特に悪びれた様子もなく、むしろおどけるよつて両手を挙げた。

「ふん」白々しい言い訳に付き合つてしまはないとばかり、エリュオンは鼻を鳴らした。

他の者たちもジエズイットの突然なる登場に眉一つおどりかせることなく、また呆れる素振りさえなかつた。至つて日常的な光景だとばかりに。

「しかし、そろそろ会議の頃合かと思つて戻つてみたら……まさ

が始まる寸前だつたとはな」

「みんなには前もつて召集をかけていたんです。だけど、ジェズィットさんの行方が分からなくなつてたから……」とクピト。

「俺の勘はよく当たるつていうのが、今回のでまた証明されたわけだな。で、今回の議題は……？」

直後にエリュオングロを開く。「此度の適格者が、我々が戦うに

値する？敵？であるかどうかだ」

木槌を高々打ち鳴らしたあとのような沈黙が、しばし場を占めた。「また俺の勘が当たつたな」とジェズィットが得意げに言つたのを除いて。

「お察しの通り、俺は奴らの動向をうかがつていた。つまりしつかりと統治者としての努めを果たしていただけだな。だからサボつていただの、統治者失格だの言われる筋合いはないぜ？」

で、俺がこの田で直に適格者を見てきた感想を率直に述べると「それまでだらしなく椅子に背もたれていた彼が、ぐつと前に身を乗り出した。

「あいつは俺たちなんかあつさりと倒して、空を開いちまうぜ」「およそ統治者とは思えない発言に、場が音もなくどよめいた。すかさず隣から反駁の声が上がる。「口を慎みなさい、ジェズィット。ここは神聖な会議の場であるのです」

オルテンシア。またの名を聖女。彼女はまぶたを閉じ、祈るように両手を胸の前で組み、その声、その姿にはいつも静謐な輝きがある。

肌は陶器のように白く透き通り、前をぱっさりと切り詰めた髪は金。それがジェズィットと並ぶと、白と黒、人と獸といつような性質の真逆さがくつきりと浮かんだ。

「そう怒るなよ。綺麗な顔が台無しだぜ？」

「なんと不羨な……貴方は統治者と呼ぶにはあまりにも喋りすぎる」「同感だな」ふつと小さな笑いをこぼしつつ、デモネドが割つて入つた。

「だがジエズイットよ、おまえの無遠慮な口の聞き方は嫌いではない……。」

その者、リュウといったか。我々が直に手を下すに値する敵だと？」

「まず間違いなくな」

はつはつは、デモネドはいとも楽しそうに笑つた。

ついでその筋骨隆々とした首をパキパキと鳴らし、片方の掌に揚々と拳を打ち込み、彼は敵が見えないうちから臨戦態勢に入つた。

「このデモネドが初陣を飾ろう。そして勝利さえもな。他の者が出る幕はない」

彼は革の胴衣がはちきれんばかりに発達した筋肉に更なる力をみなぎらせたが、「待つてください。まだ僕たちが戦うと決定したわけではありません」とクピトが例の中性的な声を響かせた。

決定を下すのはエリュオン。にわかに熱を帯び始めた議論を収束に導くには、彼の言葉が必要不可欠なのだ。

一同の視線が最高権力者に集められる。彼は血が渦まくような双眸で睥睨するように座を見回し、「かつて、多くの者が……」と厳かに語り始めた。

「空を目指し、志半ばで死に絶えていった……。どれも我々が相手にするには及ばない凡庸ども。だが此度の適格者は違う。奴にはアジーンが味方している。

いや、違うな。アジーンこそが、我々の敵なのだ。やつは遙かな昔に達せられなかつた夢を、リュウという少年の身体を借りて果たそうとしている。世界を作り変えようとしている。

では、神に代わつて世を統べる我々が成すべきことは一つ。アジーンを食い止めることだ」

「では……?」とデモネド。

「最高統治者としてここに宣言する。?再生の試練?を、リュウに与えよ!」

デモネドはニヤッと口元を歪め、クピトはどこか物憂いしそうにエリュオンを見、オルテンシアのまぶたは変わらず開かれるることは

なく、ジェズイットは口笛を鳴らし、ヴェクサシオンは背筋をピンと張つて固い表情を崩さない。

その彼にジェズイットはちらと意味ありげな視線を向けた。ヴェクサシオンの横顔には何か別のことに対する想いを馳せていくような趣がある。恐らく行方が分からなくなつた一人息子のことを持つているのだろう。

だが哀しいかな、行方はこれからも分からぬまなのだ。彼が絶大な期待を寄せ、厳しくも大事に育ててきた一人息子は、もう光の届かない闇の底に深く沈んでしまつたのだから。

「よし！」デモネドが一打入魂とばかり拳をぶつけ、しばし物思いにふけつていったジェズイットはそれに叩き起された。

「先刻言つたとおり、このデモネドが初陣を飾る！ ジェズイットよ、おまえなら敵の居場所が分かるだろ？？」

「あ……？」デモネド、あんた自分で出張つていいく氣か？

「待つなど俺の性に合わん！ さあ教える！」

はあ、とため息を吐きながら、ジェズイットは簡潔にリュウの現在地を述べた。

「ほほう、上層区街か。この中央省庁の間近ではないか。やりある。やりあるな、これほど近くに来ているとは……」

デモネドはすつと勢いよく立ち上がり、その拍子に弾き飛ばした椅子のことなど視野にも入れず、出入り口に向かつて一散に歩き出した。

と、やにわに振り返り、鋭くエリュオンを指差した。

「オリジン！ おまえの前にやつの首を持つてくると約束しよう！」

「はつはつは！」そうして彼は会議室を去つていいき、一同の間にはやかましい楽器演奏が終わつたあとのような静寂が残された。

「筋肉バカも消えたことだし、俺も退散するか」椅子から立ち上がつたところで、ジェズイットの全身が現れたときと同様に忽然と消えた。

しばらくしてヴェクサシオンが鞆鳴り音を立てながら去り、その

後をオルテンシアが続いた。彼女はエリュオンの横を通り過ぎたあと、ぴたりと足を止めた。

「オリジン……私の見る未来に、？そのとき？は訪れていません。かの少年もまた、我々の前に果てることでしょう。

あれは単なる災いに過ぎないので。貴方が期待するような、空を開く者では決してない」

「それはこれから分かることだ」続いてエリュオンはちらと肩越しに顔を向け、「然るべきときが来たら、その開かれざる瞳を開き、しかと確かめてみるがいい。聖女よ」

彼女はしばらく物言いたげに佇んでいたが、やがてその場を去つていった。

聖女の寡黙なる瞳には未来を見る力がある。そのまぶたには未来の映像、人々が行き着く終局点が鮮明に浮かび上がっていることだろう。現に聖女の予言が外れたことは一度もない。

だが見るべきは現在なのだ。そしてそれは、瞳を閉じたままでは出来ない。

「よろしいのですか？ オリジン……」

クピトが心配げに声をかける。「事の真相、あなたの真意をみんなに知らせなくて……」

エリュオンは静かにかぶりを振つた。

「聖女は私の心を見抜き、ジェズイットもあれこれ裏で嗅ぎまつて事の真相に気付きつつある……。他の二人はわざわざ知らせてやるまでもなく、統治者としての使命をまつとうしてくれるだろう」「彼は天窓の奥で燐然と輝く人工太陽を仰いだ。その真つ白な光のどこかに？神？の存在を見つけようとするかのようだ。

「再生の試練。それは神が我々にもたらした？救世の儀式？だ。この世界はとつぐに腐敗している。人々は空を、見上げるべきものを失い、未来の作り方を忘れてしまった……」

「でも、その空は……前の時代の儀式によって失われたのではないのですか……？」

「救世の儀式は古の時代、人が地上に生まれたときから連綿と続いている。あるときは剣士とドラゴン、あるときは人と邪神といった終わりなき対立の構図をもつて。

それが今回は少年と統治者という構図になつた。我々は儀式を完成させるために用意された？駒？に過ぎないのだ。あの少年も……」だが、と彼は付け加えた。「私は楽しみにしている。リュウ。彼が私の前にやつてくるのを」

つと歩き出したエリュオンの後をクピトは追い、更にその後を、一対の赤い羽を生やした小動物が追いかけていった。

普段は整備作業員が使う通用口から出てきた一行を、壁に備え付けられたアーク灯の青く静かな輝きが迎えた。

現在は人工太陽の消灯時間。街は眠り、明かりに引き寄せられた羽虫たちが飛びまわっている以外には寝息一つ聞こえない。

リュウたちは特に言葉を交わすことなく、横幅一人分の窮屈な道を進み始めた。位置としては街の裏路地。警備や監視の目もこんな埃くさいところまでは届いていないらしい。

犯罪者が大手を振つて公道を歩くわけなどないのだから、むしろこういった場所の警備を強化したほうが良いはずなのだが、多くの富裕層たちが何不自由なく暮らす上層区街では血なまぐさい事件はまず起こらない。

中層区から下の劣悪な衛生環境、治安情勢と比較すればこの街はるかに優秀だが、一方で住人は平和ボケしているともいえる。警備兵は一日八時間の労働を半分は寝て過ごしているし、それで何か不具合が起ることもないため住人も気にしない。

そんな社会倫理的に問題のある態度が、しかしリュウたちには都合が良かつた。彼らはさしたる障害に出くわすことなく雑居ビルの合間から通りに出て、外壁コンクリート造りの共同住宅コンドミニアムにそびえる高層ビルに足を止めた。

「電力供給ビル……」リンがぽつりと呟く。

それは圧倒的な質量を持つて一段も三段も高いところから街を見下ろし、黒々とした背景幕に角と辺の輪郭をくっきりと浮かび上がらせていた。

随所に設置された赤い誘導灯が一定の間隔で明滅している。まるで建物が呼吸しているかのようだ。

「あそこで電力を作り出してほかの階層に送り込んでるんだ。何せこつから最下層まで全部だからね、膨大な発電量を考えりやあねぐ

ら」の大きさにはなるだろ？」

ビルの表層が視認できるのは街明かりが届くわずかな範囲で、ほかの大部分は光の境界から外れて闇に紛れている。不気味なブラッカ・ボックス。

下層区街で暮らしていたときはバイオ公社のビルが世界で一番大きな建造物だと思っていたのに、リュウは驚きを通り越して恐怖すら覚えた。そして自分が今どこにたどり着いたのかとこいつことを改めて自覚した。

空は近い。リュウは両拳を握り、勇んで歩き出そうとしたが、「どこへ行くつてんだよ。おまえ、ここより上層への行き方知ってるのか……？」

リュウはぴたりと足を止め、しばらくしてから「いや……」と氣恥ずかしさを無理にこらえた顔で答えた。思えば行く当てなじどこにもなかつた。

「ここから上は中央省庁区。^{ゲート}統治者たちのいる階層だ。空に通じる扉もそこにあるはず……。

だが、問題なのは？ 鍵？ だ。メベトから渡されたもののほかに、同じものがあと三つ必要になる」

「それはやつぱり、統治者たちが持つてるのか……？」

「だろうね。メベトは元々統治者の一人だった。だから私たちは政府と戦う気になれたんだ。

同じ統治者が味方なら、もしかしたら勝てるかもしれないってね。今じゃ馬鹿馬鹿しい幻想にしか思えないけど」

一拍、リンは何か思うことがあるようにまぶたを閉じて黙り込んだ。「とにかく、今は中央省庁区へ行く方法を探そう。あそこへはエレベーターはもちろん、ライフラインみたいな裏道もない。

選ばれた人間だけの領域だからね。気軽に往来できるような場所じゃないのさ。ただ、ひとつ……中央省庁区へ通じる転送装置があるという話を聞いたことがある」

「それはどこにあるんだ？」

「分かつてりや苦労しないんだよ。それをこれから探すつて言つてるんだ」

かといつて、何を手がかりに転送装置の在り処を探せばいいのか二人には分からぬ。

上層区に到着して早速の立ち往生だったが、ふと二ーナが「うー！」と指をさした。電力供給ビルの屋上に青い柱が出現し、一閃の強い輝きを放つと、そこはまた真っ暗な夜の天井へと姿を戻した。「渡りに船つてのはこのことだね。今のが転送装置だとは断言できないけど、あの場所に何かがあるのは間違いない」

「でもタイミングがよすぎる……。敵の罠かもしれない」

「今さら怖氣づくつてのかい？ 私たちはもつとつくに世界中を敵に回してゐるんだ」

「分かつてゐるよ。行くさ。罠でも何でも、おれたちは進まなくちやいけない」

リンの口元がふつとほりりぶ。「そう言つと思つたよ」

電力供給ビルを目指して歩みを再開した一行は、ぽつぽつと人が行き交う小さな広場に差し掛かった。

広場にいるのは終夜勤務の警備兵、仕事帰りのレンジャー、テレコーダーが一基並ぶところでは一人の女性隊員が何事か受話器に話しかんでいる。

リュウたちは特に隠密行動を取ることもなく、広場を堂々と横断していく。それはリンが「下手にこわこわしてゐるほうが怪しい」と言つたからだし、指名手配犯を見つけたところでこの上層区で騒ぎは起こせないと判断したためだ。

実際、広場にいる者たちは自分のしてゐる、考えてゐることに夢中で、数フィート前を横切つていく指名手配犯たちを誰も気にとめなかつた。

別に彼らがお尋ね者でなくても、背中から一対の赤い羽根を生やした少女が裸足で歩いてゐるという時点でかなり不自然だというの

に。もつとも、立つたまま眠り込んでいる警備兵たちにとつて、この三人は夢の中の人物に見えていいのかも知れないが。

広場を抜けて細い街筋に出た一行は、つと奇妙な光景に出くわした。赤いシルクを張つたテント風の小屋が鉄階段の脇に建てられ、その中で占い師の格好をした店主が客の男に品物を勧めている。このブラザーマッスルを使えばたちどころに筋肉がどうの、このゴースト石を毎日持ち歩くだけで幸運がどうの。店主はいかにも占い師然とした、うさんくさい口調で長広舌をふるついているが、リュウはこの声に聞き覚えがある。

クリオ、だ。つい数刻前に闇市で服飾の露店を開いていたかと思えば、今度は上層区で金持ち相手に珍品を売りさばいている。

このわずかな時間にどうやってここまで移動したのか、彼女が勧める商品は本当に役に立つのか、そんな数々の疑問を押しのけて、リュウはまず彼女の変わり身ぶりに啞然とした。

「何やつてるんだ……？」残念というべきか、じく当たり前というべきか、ぐだらぬ商談に割く時間はないとばかりに帰つていった客と入れ替わりに、リュウはクリオ扮する占い師の館へと足を踏み入れた。

「お！ あん時のレンジヤーさんやないか！」相も変わらず陽気で独特な口調だが、顔の下半分を紫のベールで覆つた衣装で喋られるとかなり違和感がある。

クリオとの会話は、第一にリュウたちが政府に追われている身であることを知つたという彼女の言葉に始まり、次に「商売人にとってはどうでもいい」ということになり、二一ナとリンの紹介を改めてしたところで、二一ナの靴の話になった。

すると急にクリオの顔が曇つた。「用意したことは、用意したんやけど……」

そこで彼女は、パンパンと小間使いを呼ぶ時にするような手の鳴らし方をした。テントの奥でシルクがまくられ、そこからクリオと色違ひの衣装を身に着けた少女が一人、片方はたいそうに靴箱を両

手に乗せてやつてきた。

「緑のほうはジャジュ。青はアルマ。うちの双子の妹や」クリオの言葉を受けて、長らくリュウの中で謎であった『クリオ移動術』の真相が解き明かされた。

これだけの大道具、品物の数々をクリオ一人だけで運搬できるはずがない。おおかた物静かで商売人の素質に欠ける妹たちに裏方をやらせ、姉であるクリオが客の前に出でているといったところだろう。というより、ジャジュとアルマが物資運搬その他雑事をやらずにここにいるというのなら、二人は片方は靴箱を乗せてリュウの前まで運び、もう片方がふたを開けて中身を見せるためだけにここにいるということになる。

さすがにそれはないだろ？、このやたらと手の込んだ品物の見せ方も一人に任された仕事の一環なのだ。

「まあ、見せるだけ見せたわけやけど……。正直、な。政府に命を狙われるあんさん方が生きてるとは思わなくて、その……。金持ちのお客さんに売るために、ちょっと『コーディアス』に改造してしまったというか……」

紫のサテンが仕込まれた高級箱に行儀よく収まっているローハーリルは、日常生活で使うには不便すぎる装飾といつ装飾で装飾されたいた。

表面は白銀の鱗が散りばめられ、先端部にはダイヤ、両面には羽がつけられ、また踵には幾本ものレースがつけられている。恐らくその一つ一つが限りなく本物に近い『セモノ』であることは、クリオの性格を考えれば明白だ。

リュウはしばらく靴を見つめ、二ナと顔を合わせたのち、黙つて箱のふたを閉じた。『裸足のほうがマシだ』といつ無言の反駁である。

「申し訳ない……」クリオはがつくりと肩を落として、肺の中の空氣をぜんぶ吐き出すように言った。

「何か、何か代わりをさせてや！　お客様との約束を裏切るのは

商売人の「ケンに関わる！」

「ふーん、代わりねえ……」リンが口に人差し指を当てて言つ。

「じゃあ、食い物とシャワーを用意してくれ。それと寝るところもだ

「リン？ 一体何のつもりだ？」

「言葉の通りさ。アジトの時も満足に休めなかつたし、正直身体が悲鳴を上げててね」

「だけど……」そこで言い淀むリュウの肩を、リンは軽く叩いた。「気持ちが急ぐのは分かる。だけどさっきの青い光が転送装置だと決まつたわけじゃないし、仮にそうだったとしても……私たちはいよいよ統治者たちの階層に乗り込むことになるんだ。

一、二時間でも休んでおいたほうがいい。二ーナの体調のこともありまするしな」

二ーナの名前を出されると、リュウは何も言い返せなかつた。

「で、クリオって言つたか。宿は用意できるのか？」

「そんならお安い御用や！」このテントの先は階段になつてて、そこを下るとアパートメントの裏口に突き当たる。そん中が先祖代々、上層区で店を出す時は決まつて使ううちらの秘密基地や。

こいついた按配で、一行はクリオの秘密基地で束の間の休息を取ることとなつた。

リュウはてつきり持つて来た品物やら小道具やらが山積みの、狭苦しい倉庫のようなどころを想像していたが、基地の中は思いのほか広々としていた。

その構造や内装はリュウが以前暮らしていたレンジャー宿舎を彼に思わせる。

またクリオは客人のもてなし方をよく心得ており、テキパキと妹たちに命じて空室の掃除、ベッドメイキングをさせ、更に風呂の用意から食事までとそれはもはや本物の宿屋のふるまいだつた。

というより、この「秘密基地」は露天商がうまくいかなくなつた時に元から宿として使うつもりだつたのかもしぬないが、余計な詮

索はやめておいた。

クリオの言う「プライバシーの観点」から男女別々に部屋を割り当たられ、リュウはいま簡素なシングルベッドのうえに腰を下ろしている。リンと二ーナは一緒にシャワーを浴びているところだ。

ジャケットをハンガーにかけた時に感じたことだが、自分の衣服、いや身体には生々しい血の匂いが染み込んでいる。このレンジャースーツはまだ買い替えたばかりだというのに。

その匂いに触発されて、リュウの中でこれまでの戦いの記憶がよみがえった。ゼノを殺した、ネガティブを殺した、ボッショさえも……。

どれもこれも、廃棄ディスク処理施設でドランの死体を見た時からだ。アジーーン。

彼の声を聞いてから、すべての歯車が狂い、運命は燃え爆ぜるような破滅に向かって騒進^{ばくしん}を始めた。怖い。自分が戦いの果てに死んでしまうのか。

リュウがたった十秒でも立ち止まることが嫌なのは、何も二ーナの命に時間的制約があるからだけではない。ふと戦いから離れて、一人考える時間が出来てしまふと、恐怖が、絶望があふれて、どうしようもなくなってしまう。

肉体がどんなに変わつても、自分のこうこうところは変わつてないんだな……そう思つたところで、しかしリュウは笑う気ひとつ起きなかつた。

やがてノックの音が部屋に響いた。「どうぞ」と言つ前に扉が開けられ、ドアの隙間からリンの横顔が見えた。

「シャワー、空いたぞ」

「二ーナは……？」

「私より先に出て、いまは部屋で休んでると思つ」

リンはシャワー室の帰りがけにリュウのところに寄つたらしく、まだバスローブ姿だつた。

かすかに湯気がのぼり、頭髪をくしゃくしゃに拭うタオルは、獣

耳の部分がちょこんと盛り上がっている。リンは男勝りな性格だが、その身体は立派に女性であり、リュウは田の置きどころに困った。

「何だか元気がないみたいだね。どうした……？」

「別に何でもないよ。身体が冷えると困るから、早く着替えたほうがいい」

「……三分立ち話するぐらい、何でことないさ。それに、『君は独りじゃない』って言ったのはどこでこいつだけ？」

リュウは「降参しました」というよくなため息をつく。「おれは死ぬのかな……」

「なんだよいきなり。そりや、人は誰だつてそのうち」リュウはかぶりを振り、彼女の言葉を遮る。

「分かるんだ。あの力を使うたび、命が削れていいくのが……」「例の力か……。思えば、詳しい話を聞くのはまだだつたな

「おれにもよく分かつてない。だけど、前に夢を見たんだ。ちょうど、ボッシュとバイオ公社のリフトを護衛する任務の前日に。

そこは真っ白い空間で、おれはとぼとぼと歩いてる。すると人影が現れて　たぶん男だと思つ　」

『お前は選ばれた。千年の世界を壊す究極の破壊者として』
ほかにも何か言つてたような気がするけど、覚えてるのはこれだけだ

「選ばれた、って……その力を使うことにか？」

リュウは「くちどうなづく。「そう考えれば、これまで起きたことに説明がつく。だけど、どうしておれなんだ？　この力を使つて何をしようと？　世界を、壊す……？」

もしそうだとしたら、と言いかけたところで、クリオが慌てた様子で部屋に駆け込んできた。

「大変やー。いま、あの子がうちの店を突つ切つて……！」

「あの子つて……」「一ノナが！」リュウは即座に立ち上がり、ジャケットも取らず飛び出した。

一ノナの姿は部屋になく、魔法杖と傷ついたぬいぐるみが床に転

がつて
いるだけだつ
た。

リンがちょうどリュウの部屋を訪れていた頃。

一足先にシャワー室から出た二一ナは、部屋で髪を乾かしていた。ドライヤーの使い方はリンが教えてくれた。「スイッチを押して、『オーッとやるだけだ』

彼女の言いつけ通り、二一ナは小さな化粧台の前に腰を下ろして髪に熱風を送り込んでいる。リンとリュウは二一ナのことを、何も知らない赤子のように考えている節があるが、ドライヤーの使い方ぐらいは教えられなくても分かっている。

幼い頃、彼女が父と母と一緒に暮らしていた時に、彼女は風呂あがりに決まってそれを使っていたのだから。父と母。

両親は二一ナを政府から匿った。D値の違いが判明すれば、我が子とはなればなれになってしまつからだ。二人とも娘のことを深く愛していたが、父は仕事で家を空けることが多く、二一ナはほとんどの時間を母と過ごした。

百冊を超える絵本をともに読み、お菓子を作り、編み物をし、もちろんお風呂にだって一緒に入った。シャワー室でリンに髪を洗つてもらつた時、「きれいな髪をしてるね」という彼女の言葉が、ふと母の声に聞こえた。

瞳の色も、髪型も、口ぐせも、喋り方も、好きな食べ物も、母のことなら何だつて思い出せる。「私のママは、私よりもずっときれいな髪をしてるよ」とリンに答えてやりたかった。

髪を乾かし終えると、彼女はふと部屋の中に友だちの姿を探した。なぜだか急に淋しくなつた。

友だちはリンが持つて来たバレル・バッグの中で、数々の黒くて物騒なもの下に埋もれていた。かわいそうに、お腹をけがしている。

二一ナはいたわるようにブキを手に持つたが 何か不自然に硬

い感触がある。友だちのお腹の中に手を入れるのは忍びなかつたが、二ーナは謎の感触の正体を捕まえ、出来るだけそつと取り出した。

鍵。リュウがメベトに渡されたものとは違い、ごく一般的な、キヤビネットを開けるときにつうような小さな棒鍵だ。

持ち手や鍵の部分はところどころ錆びついており、そのまだら模様が二ーナには不思議と懐かしかつた。彼女の家には、父の書斎ともうひとつ、母と一緒にでなければ入れない部屋があつた。

その部屋の扉を開けるとき、母はこの鍵を使つていなかつたか？

いや間違いない。この鍵だ。

二ーナは確信を得るとともに、鍵を握りしめて部屋を飛び出した。

この上層区は彼女の故郷。

かといって、彼女は家に帰るつもりもなければ、そのために駄々をこねるつもりも一切なかつた。リュウとリンの邪魔にはなりたくなかつた。

だが今は気持ちが抑えられない。廊下の曲がり角から一人の会話が聞こえる。幸いなことに、出口は一人のいる廊下とは別方向にあつた。

問題は、裏口から外に出る以上どうしてもクリオの店を経由しなければならないということだつたが、彼女は奈落に飛び込む思いで、階段から一気にクリオの店を駆け抜けた。

「な、なんや！？」そう吃驚するクリオの横を二ーナは素早くすり抜けていく。

クリオは反射的に彼女を追いかけよつとしたが、足元に置いておいたゴースト石につまづき、倒れた拍子にしたたか頭をブラザーマツスルに打ちつけた。

「ぐぬぬ……」痛みに悶絶しつつ、顔を上げたクリオは妹たちがその場にぽかんと突つ立つてゐることに気付く。

「何しとるんや！ 早よつあん子を捕まえて来い！」

二ーナはジャジューとアルマに追われる羽目になり、一度は息が切れたところをあわや捕まえられそうになつたが、裏路地に入つたと

じろで一人をまいた。

二人が見当違ひな方向へ走つていくのを物陰から確認し、二ーナはほつと胸をなでおろす。が、足を止めている暇はない。

鍵のことと頭がいっぱいになるあまり、魔法杖もブキも部屋に置いてきてしまったのだ。もしいま敵に襲われたらひとたまりもない。二ーナは右と左を注意深く確認したのち、かすかな記憶を頼りに自宅を探し始めた。家にいた頃はまともに外出したことがなく、街の地理は一切把握していないが、人工太陽が消灯したあの時間帯に何度も家の外を散歩したことがある。

もちろん母と一緒に。家は街の中心から離れた静かな住宅地にあつた。上層区民のほとんどが集合住宅コラボミニームで暮らしている中、二ーナは一戸建ての家に住んでいた。

赤い屋根が印象的な、門の脇に小さな花壇の庭を持つ家。その近くには何があつただろう。うまく思い出せない。

だが彼女は諦めなかつた。ただ帰りたかつた。家に、父と母のもとに。

* * * *

クリオの秘密基地を出てから、もう一時間近くは経つだろうか。リュウ・とリンは今じろり血眼になつて自分を探しているに違いない。

そのことを申し訳なく思う余裕は、しかし今の二ーナにはなかつた。彼女は赤い屋根の家を、門の脇に小さな花壇の庭を備える家を、目の前にしていたからだ。

街の案内図によれば、一戸建ての家が並ぶ住宅地は上層区にひとつしかない。社会的には富裕層に当たる上層区民の中でも、自分だけの家を持てるのはじく一握りの人間である。

そのため一戸建ての住宅地は上層区に一箇所あるのみで、二ーナは案内図をよく頭に叩き込んでその場所を目指した。何度も迷いながら、つまづきながら、街の至るところに彼女の赤い羽根から灰色

の粒子がまき散らされていった。

長い彷徨の末にようやくたどり着いた我が家は、一点の明かりもつけられていなく、ただ静まり返っている。近くの街灯が蒼白の光を浴びせ、そうして家が暗闇に浮かぶ様は何だか死体を見ているような気分にさせる。

誰もいないの……？ そう心の中で問いかけながら、二一ナは背丈の低い門扉に手を伸ばす。それは鉄の軋む音を立てながら開き、二一ナはおずおずと敷地の中に入つていつた。

門扉はいとも簡単に開いてくれたが、玄関の扉には鍵がかけられている。二一ナは自宅をぐるりと一周し、キッチンの窓が隙間ひとつ分開いていてことに気付いた。

彼女は狭い窓枠に身体をぎゅうぎゅう押し込み、しばしの苦悶を経たあと、何とか屋内に進入した。「おかえりなさい」と彼女を暖かく迎える声はなく、あるのは冷え切った静寂だけだった。

キッチンは調理器具から食器類まで、どれもきれいに整頓されているが、ふと手についてみれば埃でざらついていることに気付く。家族三人で食卓を囲んだダイニングテーブルも、リビングのソファも。

この家には長らく誰も帰つていらないらしかった。二一ナは泣き出したい気持ちだったが、寸でのところでそれをこらえ、両親の寝室から浴室、自分の部屋、扉という扉を開いていつた。

そして最後に、彼女は例の開かずの扉を前にした。掌の中にずっと持つっていた鍵は、その扉の鍵穴に難なく收まり、かちやり、と解錠の音が小さく鳴つた。

次に二一ナは手探りで照明のスイッチを押したが、明かりがつく気配はない。ここへ来るまででもう分かつていたことだつたが、電気の供給が止まっている。

しかし一步部屋に足を踏み入れたところで、二一ナは「ぐく小さな光の粒を暗闇の中に見つけた。それは彼女の目の前で風船のよつて膨らんでいき、室内を琥珀色の輝きで満たした。

父に書斎があるよつて、この部屋は母の書斎である。巨大な本棚が四圍を埋め、そこにすらりと並ぶ本の中身はどれも魔術に関することだ。

二ーナの母親は魔術士だった。彼女は魔術の初步的な理論を二ーナに教え、そうする時は決まってこの部屋が選ばれた。

『呪文を覚えたからって、むやみに使ってはいけません』それが母の口ぐせだった。

室内を照らす光は、ちょうどネガティブとの戦いで見た魂の輝きとよく似ている。

あの時はただ得体の知れない恐怖に身体が震えたが、今は逆だつた。誰かの胸に抱かれているような、優しい温もりを感じる。

母の机には先端が鉤状になつてゐる木製の魔法杖が立てかけられていた。その表面はうつすらと青みがかつたもやをまとい、二ーナは直感的に何か特別な力がこの杖には宿つてゐることを察した。

それを手に取つた途端、二ーナの目から涙があふれた。これは母が使つっていたものだ。これから覚える魔法がどのようなものか娘に実演して見せる時も、扉にかけた小さな黒板を指す時も。

それが自分の身体の一部であるかのよつて、母はこの魔法杖を肌身離さず持つっていた。ではなぜここにあるのか？ 持ち主の姿もなしに？

涙は止まるどころか勢いを増し、やがて二ーナはがつくりとくずおれてしまつた。すると部屋に満ちていた光が集い始め、彼女を包んだ。

ふと母の声が聞こえた気がする。彼女は我が子に注意を促すときは、怒つた顔ではなく、決まって優しい表情を浮かべていた。

『いつまでも泣いていてはいけません』

* * * *

「ふーむ、なるほどなるほど……」

アルマはクリオの耳に何事かひそひそと囁いている。

「いつそのこと自分が喋ればいいのに、ヒリュウは思った。

「アルマはうちら『クリオ・スマイル・カンパニー』の武器・防具担当でな。

鑑定人としての腕前はたいしたもんや。で、そのアルマが鑑定したことによると、二一ナが持つて来たこの魔法杖は……」

クリオは魔法杖を高らかと掲げると、「逸品も逸品！ 一見すると量産型のマジカルwandにそっくりやが、この柄の部分に渦巻きの模様があるやろ？」

これは伝説の杖職人が自分が作ったものに必ず入れる印で、量産型のものにはないんや。つまりこれは、マジカルwandのモ^デルとなつた大元^{オリジナル}……ウイザードwandや」

「そんなすごいものを？ 二一ナは一体これをどこで……」

「こんな伝説級の代物を持つてるのは、この世に一人しかいない。ハイウェルン大魔導士や」

するとクリオはリュウの頭をぐいっと掴み、自分のほうへ引き寄せた。

「おい、兄さんラジオのニュース聞いとるか？」

「え？ なんだよ、急に」クリオは顔を上げてちらと二一ナを見やる。

「つい一昨日の話や。反政府運動を続けていたハイウェルン大魔導士は、政府にとつ捕まつて……処刑された。この人は女性でな、自分の娘と引き離されたのをきっかけに、ずっとD値制度の廃止を呼びかけてたんや。

で、ハイウェルン大魔導士の娘の名前つていうのが、うちの情報収集担当のジャジューによると……」

「まさか、二一ナ……？」

「くり、とクリオはいつになく神妙な面持ちでうなづいた。

リュウは途端に言葉を失い、つい一十分前に帰ってきた二一ナを「どこに行つてたんだ！」と叱りつけてしまったことを後悔した。

それは一人の話を聞いていたリンも同じらしかった。

恐らく二ーナは自分の生まれ育った家に行つてきただろう。彼女が上層区の出身だとは思つてもみなかつた。

しかし両親が家にいたのなら、二ーナが自分のところへ帰つてすることはなかつたはずだ。それも母の形見を持つて。リュウはクリオから杖を取り上げると、それを二ーナに渡した。かける言葉が見当たらない。

でも、不思議と、二ーナの顔に絶望や悲しみの色は見えなかつた。むしろこぢらがハツとするような気迫を感じる。

二ーナは杖を受けると、胸のところでぎゅっと握りしめた。ついで彼女の小さな唇が静かに動く。ありがとう、と言つたのか、さよなら、と言つたのか。リュウには分からなかつたが、慰めの言葉なんて必要ないと思えるぐらい、彼女は強くなつていたようだつた。

(? ?) 現れた統治者 - 前編 -

一行はクリオの店を出発した。リュウのシャワーを浴びたばかりの頬に、街の冷たい空気が染みる。クリオの店を訪れてから四時間近くが経過しているが、人工太陽の点灯、すなわち夜明けまでにはまだ時間があった。

三姉妹の情報収集担当・ジャジューからも転送装置や統治者に関する手がかりは得られず、一行は当初の予定通り電力供給ビルを目標にすることにした。

道すがら、リンは『バムバルディ』を人差し指に引っ掛けたままぐる回し、看板やビルの窓に照準を合わせたりして新たに調達した銃の具合を確かめている。

これはリンが長らく愛用している41マグナム口径シリーズの最上位種で、店を発つ折にクリオが彼女に勧めた品だった。

「これからお偉いさんと一発やりあうんやろ？ 強力な装備が必要かと思うてな……」

「何だ？ こんなもの、タダでくれるのか？」リンは目を丸くしたが、

「そんなわけないやろ！ これは『靴のお返し』とは別勘定やで！ そしてクリオの怒涛のセールストークが始まったのだが、わざわざ熱弁されなくともリンにはこの銃の価値がよく分かっていた。

バムバルディは小柄な邪公なら一発で粉々の肉片に変えてしまうほどの残虐的な威力を誇り、その薄ら金色がかつた長方形状の大きな銃身は拳銃というよりかはもはや『小さな大砲』といったほうが正しい。

しかし破壊力の点では申し分ないこの逸品も、拳銃に本来求められる扱いやすさ、負担の軽さをすべて無視しているため、十年前の発表から半年足らずで生産中止になってしまった。

現在ではガンマニアの間で幻の名品と呼ばれている銃の一つであ

り、リンもまさか实物を目にするとは思つてもみなかつた。

これがレプリカでないことは、この銃を仕入れた本人アルマがクリオを通じて間接的に証明してくれ、手にとつてみた感じではリンにもそう思えない。これは本物だ。

「この金を使う時がきたか……」バムバルディに法外な値段を提示していくクリオに、リンはバレル・バッグの口を開きながら呟いた。銃火器の山を書き分け、彼女が取り出したのは黒いひも袋。それは口の部分がひもできつく結ばれているが、傍目には今にもはちきれんばかりに膨らんでいる。

中から出でてきたのは硬貨といつ硬貨、札といつ札だつた。曰く、組織を抜ける時に『武器と一緒に持つて来た』らしい。

「まいどー！」クリオは満面の笑みを浮かべてよろこびに沸く。

これで調子づいたのか、彼女は「あ、言つとくけど銃と弾は別会計やで」と更なる金銭搾取に打つて出た。

有り金を全部はたいて手中に収めた幻の銃に、リンはさつそく自前の弾丸を込め、それをクリオに突きつけた。

「調子に乗るんじゃないよ。何なら、あんたの顔を試し撃ちのためにしてやつてもいいんだよ」

「すいませんでした……」

これでバムバルディの正規弾薬も支払つた金額内で購入することが出来 というより半ば強奪だが リュウとニーナに遅れて道を行くリンは、いつになく上機嫌であった。

「ふーん。やっぱり、リンも自分の使う銃にこだわりがあつたりするんだ」

「あ？ それって普通のことじゃないのか……？」

「おれは別に、使いやすければ何でもいいって考えてたけど……」

「お前はまあ……武器にこだわらなくても、例の力でなんとかなるからな」

一瞬嫌みかと思ったが、リンの表情からすると単に冗談で言つたらし。

「使いやすければ、つていうのは昔の話だよ。今は違う。これからたとえどんな名剣が手に入つたとしても、おれはこの紫音剣以外の剣を使うつもりはないんだ」

リュウはふと紫音剣の柄に触れる。アルマは武器のメンテナンスも請け負つてゐるらしく、二ーナが無事帰つてきたあとに紫音剣の刀身を丁寧に磨き上げてもらつた。

この剣にはゼノの魂が宿つてゐる。それは二ーナのウイザードワンドも同じだ。

彼女はその偉大なる魔法杖を入手したいきさつを、紙に図を描き、いつもの「うー！ うー！」に身ぶり手振りを加えてリュウたちに説明した。

壊れたぬいぐるみの中から鍵が出来たこと。その鍵を使った扉の先にウイザードワンドがあつたこと。

二ーナの母親は、はなればなれになつた我が子にウイザードワンドを託すために、ぬいぐるみの中に部屋の鍵を仕込んでおいた。自らの死を予期していなければ、こんな遠まわしな物の渡し方はしない。二ーナの母親は大魔導士だ、掌に浮かべた水晶の中に自分や世界の未来を見ることが出来たのかもしれない。

そして信じていたのだろう。余計な手紙など添えなくとも、きっと娘は自分の想いを理解してくれると。

事実、そうなつた。二ーナはいま、ウイザードワンドをしつかりと胸に抱えて歩いている。ぬいぐるみは約束の通りリンが直してくれたが、出来がいまいちだつたため再度バッグの中にしまわれることとなつた。

電力供給ビルが間近に迫つてくる。その闇夜にそびえる天頂の更なるうえ、世界の頂。統治者はそこから自分たちがよじ登つてくるのを見物しているかのように何も仕掛けでこない。

だがこれからは全力で潰しに来るだろ。またネガティブのよくな人外を送り込んでくるのか、それとも本人が直々に手を下しに来るのが。

こずれにせよ、望むところだ。リンはバムバルディを、一ーナは
ウイザードワンドを、リュウは紫音剣を。

戦いの準備は、もう出来ている。

* * * *

電力供給ビルの正面扉フロントハウチへは、それぞれ通路が三又に伸びていた。リュウたちは中央の扉へ向かって歩を進める。ほか一つの扉は閉じきられているのに、この扉だけがまるで彼らが来るのを待つていたかのように開けられていた。

「妙だね。この建物は政府が管理しているはずなのに、警備兵一人見当たらない。扉も開いてるし……」道幅一人分の通路を進みながら、リンがいぶかしげに言った。

「統治者はきっとおれたちが来るのを待つてるんだ。意図は分からないけど」

そうして一行は施設の中へ足を踏み入れた。フロアは吹き抜けで、ビルの真ん中を貫くように巨大な鉄塔がそびえている。その天頂はビルの屋上まで伸びているのか、ある一定の高さから上はすっかり闇に紛れて見えなくなっている。

一行は謎めいた塔の威容、だだっ広いフロアに漂う不気味な静寂に息を呑んだあと、塔のふもとに一人の男を見つけた。褐色の肌、逆立つ髪は渋みの利いた銀色で、右目に黒い眼帯をつけている。

彼は両腕を組んだまま、後ろの鉄柵にもたれる形で寝息を立てていた。

「ここに警備兵か……？」リンが男を遠巻きに眺めながら言つ。

しかし男は遠目から見ても威圧感を覚えるほどの偉丈夫で、その筋肉の鎧ともいいくべき肉体はおよそ単なる警備兵のそれとは思えない。首もとに青いスカーフを巻いた衣装も独特で、まるで戦装束のようだ。

見るからに干の修羅場を生き抜いてきた感のある男が、なぜこんな

なところで眠りについているのかはなはだ疑問だが、さわらぬ神にたたりなし。一行は男を刺激しないよう注意を払いながら、次のフロアへ続く鉄造りの橋状通路を渡つていこうとした。

が、ステップを上るところでリュウのブーツが不意に甲高い音を立てた。それは決して大きな音ではなかつたが、眠れる獅子を振り起こすには十分だつたようである。

男はぱちりと目を覚まし、一、二回首を鳴らしたあと、一行の存在に目を留めた。次にその口元がにやりと歪んだかと思つと、男は一息に跳躍して三人の前に降り立つた。

「休息は十分取れたようだな。人待ちなど本来俺の性に合わんのだが、さりとて疲れきつた獲物を仕留めるのはあまりにもつまらない……」面食らうコウたちを前に、男は余裕綽々の態度を崩さずに言つ。

「救世の儀。その聖なる死闘は厳正かつ公平に行われるべきなのだ。ネガティブのような人外どもを使う、相手が消耗したところを突くなどは戦いへの冒涜はなはだしい。故に待つた。神聖な戦いの場を造り上げるために」

「いきなり訳の分からぬことをペラペラ喋りやがつて……。あんた、頭の中まで筋肉で出来てるのか?」

「ははっ！」男は豪快な笑声を発する。

「威勢が良いな、女！だが貴様なぞに興味はない。俺の狙いはただ一人……貴様だ、ドラゴン適格者！俺は再び貴様とあいまみえるためにここへやってきた。統治者たるこのデモネド自らなッ！」

デモネドは振り下ろすように両足を踏みしめ、両の拳骨を打ち鳴らし、「まずは眠気覚ましにひとつ……！」と言つて大きく息を吸い込んだ。

次に放たれたのは叫び声、いや？咆哮？だった。それは大気を震わせ、両手で耳を覆つても鼓膜を突き刺してくる。

「まさか、統治者が直々にやってくるとはね……」

「行くぞ、二人とも！」

リュウが勢いよく紫音剣を抜くと、一人も続けて武器を構えた。

「前置きはここまでだ……」

拳を構えたデモネドの肉体いっぱいに闘気がみなぎり、陽炎のようにゆらゆらと煮え立っている。

先陣を切ったのはリュウだった。通路の手すりに足をかけて、相手の頭上から斬りにかかる。

対するデモネドはまるで防御、回避の姿勢を取ろうとしない。リュウのスピードに追いついていないのか、その表情は先ほどと同じ余裕の笑みが貼りついている。

もはや！ 潜身の力で振り下ろされた剣は、相手の首筋に向かつて鋭角に突き進んでいく。が

「アブソリュート・ディフェンス（絶対防壁）……」

瞬間、デモネドの身体から見えない波動が発せられた。

剣は弾き返され、リュウのまったく無防備な身体が宙に浮かぶ格好となつた。

「ぬんつ！」棒の先に巨岩が取つてつけられたようなデモネドの拳が、リュウのみぞおちを打つ。いや、その衝撃の度合いを考えれば？ 貫く？ といったほうが正しいかも知れない。

リュウはバットで打ち返された球のように宙を斜めに吹き飛んでいき、鈍色の無機質なコンクリートにしたたか背中を打ちつけた。「リュウ！」とつさにリンが叫ぶ。

地面上手をつき、リュウは二人に「大丈夫だ」と微笑み返すつもりだったが 出来ない。

例の再生能力が通常通り発揮されているならば、痛みはとっくに癒えているはずなのに、それどころか増している。

リュウは激しく咳き込むのと同時に血を吐いた。口の中が切れたからではない。これは腹の中から、内臓から滲み出てきた血だ。

「あなた、リュウに何をした……？」わずかに後ずさりながら、リンが思わずといったふうに口を開いた。

「ドランの真の脅威とは、その？ 再生能力？ にある……。いくら

銃弾を撃ち込んでも、魔法で焼き払つても、奴らは何度でもよみがえる。

故にドラゴンを狩る時、まず必要なのは再生能力を無効化する？呪符？だ。それは銃弾にも魔法にも使えず、ただ剣とそれに属する武器にのみ効力を宿すことが出来る。それを我が拳に応用したまでだ」デモネドの手の甲では紫色の魔法陣が小さく光を発した。それが彼の呪符であることは間違ひなかつた。

リコウは再生能力の効かない身体、すなわち十六歳の少年の身で先ほどの一撃を受けたことになる。案の定、彼は立つことが出来ず、ただ苦しそうにもがいている。

リンは固唾を呑んだ。これが統治者の力。圧倒的で、かつ一分の隙も見当たらない。

すると途端にデモネドの姿が、眼前に高くそびえる絶壁のようと思え、リンはただ二一ナをかばいながら後ずさるしかなかつた。
「他に質問があれば何でもしてくれて構わない。こちらの手の内をすべて晒したところで、俺は何一つ困らんのだからな」
デモネドの顔にまた不敵な笑みが浮かんだ。

「くそつ！」

リンは一ーナを抱え、『デモネドとの距離を置くために空高く舞い上がつた。

降り立つたのはリュウの近く。『デモネドは7、8メートル先、通路の手すりごしにこちらが見上げる格好となつてゐる。

「リュウ、大丈夫か？ 仇はすぐに取つてやる」

リンはバレル・バッグを足元に落とし、続いて素早くバムバルディを構える。弾丸は装填済み。あとはトリガーを引くだけだ。

「食らえ！」 ほとんど弔砲のよつた銃声が立て続けに一回鳴り響く。

空を切り裂いて直進する弾丸は、しかし 『デモネドの手前で急に軌道を変え、はるか後方の壁に大きな穴を穿つた。

「弾が…… それた！？」

先ほどリュウの剣を弾いた見えない壁が、今度はバムバルディの弾丸さえもしのいだ。

そもそも命中しないのであれば弾にどんな破壊力があつたところで意味がない。リンは露骨に苛立つた舌打ちをひとつ、バムバルディをホルスターにしまいこんだ。

バムバルディ専用の大口径弾の数はごく限られている。無駄弾は避けなければならない。

「リン…… 気をつける。あいつの身体の回りには、見えない壁があるんだ」

「無理して喋るな！ あいつは 私たちが何とかする」

リンはバレル・バッグの中から一挺の5・7mm短機関銃を取り出す。

手際よく弾倉を挿入し、それを両手に持つてリュウの前に立つ。また彼女の横には一ーナが立つた。今度は私がリュウを守る番だ、

と言わなければかりに。

「デモネドは大きな身体とは裏腹に、軽快な身のこなしで二人と同じ地面に降り立ち、この状況を楽しんでいるかの」とくじりじりと歩いてくる。

一挺のサブマシンガンが一斉に火を噴いた。毎秒1.5発、銃口初速715m/sで放たれる弾丸はことごとく対象からそれていき、デモネドは弾雨の中でさえ悠然とした足取りを保っている。

やがて弾が尽きた。この5.7mm短機関銃はサブマシンガンとしては多い50発の装填数を誇り、一挺合わせて計100発。それが一発も当たるどころかかすりもせず、ただ後方の壁を蜂の巣にしたのみ。

デモネドは依然ゆるやかな足取りで、しかし着実に距離をつめてきている。

「最後の悪あがきは楽しめたか?」

「くつ……」万策尽きたかに思えた時、デモネドの足元に真っ赤な魔法陣が出現した。

そこからうなりをあげて火柱が上がる。ウイザードワンドから放たれたニーナの攻撃だ。

彼女はワンドをくるくると旋回させて次々と魔法陣を出現させる。その赤、黄、青の円は見る間に数を増やし、デモネドの四圍を完全に覆い尽くした。

「うー!」彼女のかけ声に合わせて魔法が発動する。火柱を氷の風が取り巻き、幾筋もの雷が閃く。傍目にはさながら魔法のパレードだつた。

リンはデモネドの足が止まっている隙に、バッグを抱え、リュウを連れて後退した。ニーナも攻撃の手を止めて二人に続く。

濛々と立ち込める粉塵が一瞬にして打ち払われた。デモネドが例の見えない波動によつて焼き消したのだ。

「俺の足を止めるとは……。あの娘、ただの非力な魔導使いではないということか」

「ん？」デモネドははるか前方にリンがいることに気が付く。彼女は携帯用の小型ロケット・ランチャーを構え、つい今しがたトリガーに指をかけたところだった。

「爆ぜろ！」

先端鋭いロケット弾頭が風切り音を立てて直進していく。だがそれもやはりデモネドの直前で軌道がずれ、後方へと流れていった。問題はそれが単なる銃弾ではなく、当たれば火を噴く？爆弾？であるということだった。

轟音とともに爆風がフロアに吹き荒れ、ミサイルの直撃を受けた鉄塔は支柱の一本が寸断。態勢を大きく崩すこととなり、塔の先端部が横倒しなったのかビルの高層で鈍い金属音が鳴った。

まもなく天井から大小様々な瓦礫片が降り注いできた。リンは更にもう一発弾頭を装填し、今度はデモネドの足元めがけて弾を発射した。これなら弾が上方向へ流れていかないと判断したためである。

しかしデモネドはもう氣取るのをやめ、一行に向かい飛び出していた。

「小賢しいぞ、女！」彼の右手が斜めに空を切ると、弾はその動きに合わせて軌道を変え、またも鉄塔に着弾した。

この一撃がかろうじて原型を留めていた塔の基壇部を完全に爆碎することとなり、根元からもぎ離された塔は不気味な音を立てデモネドの頭上に崩落してきた。

リンはロケット・ランチャーを投げ捨てる、今が好機だとばかりリリュウを連れて反対側の通路へと移った。このまま次のフロアへと逃げる魂胆だが、負傷者を抱えていては移動が鈍くなる。

まもなくデモネドが瓦礫の山から飛び出ってきた。そして憤怒をたたえた顔で、通路の手すりを飛び越えこちらに直進してくる。このまま突っ立っているのは銃弾が飛んでくるのを待っているようなものだが、かといって歩度を早めて避けることもままならない。絶体絶命。そこでリンは、ふと天井の最深部、暗闇の真ん中で紫色の光

が閃くのを見た。

そうだ。ここは電力供給ビル。ここに立っていた鉄塔は、天井から送られてくる電力を受け、地階に流すための送電塔。それがへし折られた今、天井から発せられた雷はそのまま地上へと突き刺さる。デモネドは依然として獣のごとき猛進を続いている。自分がまさか雷が落ちてくる場所を進んでいるとは知らずに。

瞬間、フロアいっぱいに紫色の電光がほとばしつた。例の見えない壁は常時デモネドの周囲に展開されているものではないらしく、彼は雷に焼かれてその場に倒れこんだ。

都市ひとつ動かす膨大な電力だ、デモネドがいかに強靭であるとはいえ只ではすまないだろう。リンはその生死を確かめるべくしばし彼を見つめていたが、やがてうめき声とともに、デモネドはゆっくりと身体を起こし始めた。

リンは慌てて二人を連れて次のフロアへと逃げ込む。冗談じゃない。あの男は不死身か？

鉄塔の下敷きになり、雷の直撃を受けた。でも生きている。その事実にただただ圧倒され、リンは止めを刺すのも忘れて逃げていた。「おい、リン……どこへ行くつもりだ？」リュウがかすれた声で訊ねる。

「逃げるんだよ。今の私たちじゃ、あいつには勝てない」「さつき何とかするつて言つてなかつたか……？」

リュウは肩を貸してくれていたリンから離れ、壁に手をついた。「大丈夫だ。一人で歩ける……」

いま三人は赤い非常灯に照らされた一本の長い通路にいる。突き当たりにあつたエレベーターの前にたどり着くと、リンは上階行きのスイッチを押した。

すべての銃器類はあの見えない壁を前に意味をなさず、頼みの綱であるリュウは深刻なダメージを負っている。二一ナはウイザードワンドにより飛躍的に魔力が向上したようだが、デモネドを倒すまでは言えないだろう。

現状自分たちが出来ることとは、一刻も早くあの男から逃れる」。理性ではなく、本能がそう言つている。

「あの男……アブソリュート・ディフェンスと呟いていた……おれの剣を弾き返す時に……」

「例の、見えない壁の名前か……？」リュウはこくりとうなづく。まるで全身が毒に蝕まれているかのように、彼は壁に背もたれでぐつたりとしている。

たつた一撃受けただけなのに……。二一ナは泣き、リンの心にも絶望が芽生え始めていた。

「なあ、リュウ。私たちはもう……」そこで彼女は自ら言葉を遮った。

通路の奥にゆらりとこちらに向かう人影が見える。デモネドだ。あの不死身の男がやつてきたのだ。

エレベーターはまだやつてこない。リンは唇を噛み、ほとんび絶望的な思いで前に出た。

バムバルディを構えようとした彼女の横を二一ナが駆け抜けていく。それを呼び止める暇もなく、二一ナは杖をかざして魔法を詠唱した。

パダメとレイギル。ほぼ同時に発動した炎と氷の二重奏は、しかしあつけなく見えない壁 アブソリュート・ディフェンスを前にかき消された。

更に彼女は魔法を放つが、結果は同じ。デモネドの足を止めるには至らず、やがて攻撃が途切れた。

「茶番は終わつたようだな……」

デモネドは例の微笑を浮かべかけたが、その表情は途端に凍りつく。

氷の粒を含んだ風が静かに吹き始めた。デモネドを中心に渦を巻くように、徐々に風力を増していきながら。

「まざい……！」爆発が起きた。しかし噴き上がったのは火柱ではない。

氷の槍だ。それはデモネドの足元から天井までを一息に貫き、コンクリート造りの通路をたちまち銀世界に変えた。

更に凍てついた壁や床から発生した氷柱が、密に絡まりあつたツタのように通路を埋め、デモネドはその中に閉じ込められた。

「二ーナ、お前……！」リンの表情が歓喜に沸く。

折りよくエレベーターが到着し、一行は中へと乗り込んだ。

それからしばらく。ほとんど氷結廃道のような有様となつた通路に獣のごとき咆哮が響いた。

「ぬうんっ！」

デモネドを包囲していた氷の槍衾やりふさまが、見えない波動の衝撃によって粉々に砕け散る。

パキリ、と氷柱の断片を踏鳴らし、彼はゆっくりと辺りを見回す。青いスカーフは焦げ、衣服のところどころが千切れているが、雷でさえもデモネドの強靭な肉体までは傷つけられなかつたらしい。

「あの娘の魔力、やはり侮れん……。早急に潰しておかねばならんな」

次に彼はエレベーターの電光表示版を見つけた。あの三人はビルの屋上に向かっている。

彼はおもむろに懐から小型の液晶端末を取り出した。それは雷の一撃にも壊れておらず、デモネドの操作どおりに転送装置を発生させた。

「次で決着をつけよう、適格者よ」

青い魔法陣が光を放ち、デモネドを包んだ。

* * * *

一行は電力供給ビルの屋上にたどり着いた。四角形の大きな台座のような舞台いっぱいに、深い青色の魔法陣が刻まれている。これが中央省庁区へと繋がる転送装置だろう。

しかし三人の顔に希望の色はない。リュウはリンの肩を借りてようやく立つていられ、その悲痛な姿に二一ナはまた泣きそうになっている。

一時は二一ナの脅威的な魔力によってデモネドを退けることに成功したが、状況は何ら変わつていないので。

ドラゴンの再生能力を封じる呪符、A・Dを撃ち破る方法、そしてデモネドの尋常ならざる生命力、……それらに対する打開の術は一つ見つかっていない。ここまで勝機のない戦いは初めてだ。

もしここでゲートを使ってデモネドから逃れたとしても、その先は統治者たちの城だ。かといって引き返せばデモネドがいる。この転送装置の前に行き着いた時点で、自分たちはもうどこにも逃げられなくなってしまったのだ。

いや、それは元からか……。リンの口元から自嘲めいた笑みがこぼれる。

「リュウ……ここで旅をやめようなんていつても、どうせお前は聞き入れちゃくれないんだろう？」

「……当たり前だ」その場にぐつたりと座り込んでいたリュウは、言葉を一つ返すのに長い時間を要した。

「おれは……行く。空をみにゆく」

彼の見上げた先は、ただひたすらに真っ暗だつた。闇。

その向こうに光があるだなんて思つてもみなかつた。空を見上げることさえもいつしか忘れていた。

リュウが思い出させてくれたんだ。空を見上げること、希望を抱くことを。

リンは改めて覚悟を決める。あの不死身の男、デモネドを、倒す。

バチ、バチバチバチ……。電光がほとばしる音が小さく大気を震わせ、やがて転送装置が強い輝きを放つた。

「俺をあまり……失望させないでもらおう、適格者よ」

光の収束とともに現れたのはデモネド。彼は悠然とステップを降

アーフンコマー・ドライフュンス

りながら」の句を繰ぐ。

「もつと張り合ひのある相手だと思つていたのだがな……脆い、脆すぎる」

「ふん」リンが身を乗り出した。

「人の弱点を突いておいてよく言つよ」

「ほう？ 敵の弱点を突き、行動を封じるのは戦いの常道だが……

俺を卑怯者呼ばわりするか、女」

「ああ、あんたは卑怯者さ。そして怖がりでもある。でなきや、あんな不意打ちみたいなやり方はしないさ」

「？怖がり？……？」デモネドの眉尻がピクッと動く。

「まともにやりあつたら勝ち田がないと踏んで、あんたはリュウが本当の力を使う前にそれを封じたんだ。？戦いは公正に？とか散々言つた後にね」

「面白いことを言つ。では、本来の力が発揮できれば、この俺に勝てると言つのだな？」

するとデモネドは右手の甲にもう片方の手をかざした。呪いの紋様が消え、リュウは途端に自らの身体が癒え、力がみなぎるのを感じた。

「ついでにA・Dもなしで戦つてやる。これでいいのだろう？ 女」「後悔するよ、あんた」

リュウはおもむろに立ち上がり、紫音剣を天に掲げる。

ふと火が付いたような音が静寂にこだました。彼の双眸^{そうぼく}が鮮やかに燃え上がり、鮮紅色のオーラが身体を取り巻いた。

対するデモネドに一切ひるんだ様子はなく、相手を手招きする。

「来い」

リュウは深く息を吸い込み、一拍。真っ赤な弾丸となつて飛び出した。

デモネドはそれを正面から受け止める姿勢であつたが、つと何かを察したように振り返る。

「後ろか」

デモネドの言つとおり、リュウの斬撃は背後から飛んできた。この瞬き一つする間に彼は敵の背後へと回りこんでいたのである。

デモネドはわずかな身体の軸移動でリュウの縦一文字をかわした。続く横一文字、頸動脈を狙つた突きも、すべて紙一重のところで。リュウは斜めに切り上げた紫音剣を空中でそのまま逆さに持ち替える。絶命剣。

その刃を渾身の力で振り下ろそうとした時　彼は背後に殺氣を感じた。

「動きが大振りすぎるな……」デモネドの鋭い右回し蹴りがリュウの脇腹をえぐつた。

「いいか。攻撃というのはな、小僧！」

大きく態勢を崩したリュウにデモネドは猛追をかける。

「動きは小さく！」この一撃は胸に。

「素早く！」次はみぞおちに。

「そして強烈に！」顔面に。

一拍のうちに無数の拳打を叩き込んだあと、デモネドは右手を大きく引いた。

「碎けろオ！」

エメラルド色の闘氣を宿したその豪腕がリュウの腹を貫いた。フレイタル・ブロー（致命的な一撃）。

リュウは弾かれたビー玉のように吹っ飛び、落下防止用のフェンスに激しく衝突した。より高く打ち出されていたらそのまま落下していたところだ。

「リュウ！」リンと二ーナが思わず身体を乗り出す。しかし彼は勢いよく血痰を飛ばすと、何事もなかつたかのように立ち上がった。再生能力が正常に機能している証だ。

彼は剣を十字に構えてまぶたを閉じる。身体を取り巻くオーラが爆炎のように噴き上がった。

「ついに本性を見せるか……」デモネドの口元が大きく歪んだ。これを待つていたと言わなければかりに。

「ドラゴン。お前の力の全て……今一度、俺に見せてくれ！」
戦いは決着に向けて急速に動き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7732v/>

プレス・オブ・ファイア ドラゴンクォーター

2012年1月10日21時50分発行